

学部・研究科等の現況調査表

教 育

平成28年6月

奈良女子大学

目 次

1. 文 学 部	1-1
2. 理 学 部	2-1
3. 生活環境学部	3-1
4. 人間文化研究科	4-1

1. 文学部

I	文学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	1 - 5
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 5
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 13
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	1 - 18

I 文学部の教育目的と特徴

1 教育目的

文学部では資料 I - 1 のように、文学部規程に学部全体と 3 学科（人文社会学科、言語文化学科、人間科学科）の教育目的とを明記している。

（資料 I - 1：学部等の目的）

<p>（学部の目的）</p> <p>文学部は、人間性への深い洞察に根ざした人文科学的な知をもって、人間及びそれを取り巻く世界にかかわる諸問題の研究を学際的・総合的に推進し、それらの研究成果をもとに高度な専門教育を行い、現代社会が直面する複雑な諸課題の解決に貢献できる人材を養成することを目的とする。（文学部規定第 1 条の 2）</p> <p>（学科の目的）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人文社会学科は、日本と世界の文化や社会に関する研究・教育を行うことにより、時間・空間・関係などの視点にもとづく豊かな思考力と適確な判断力を持ち、広く社会に貢献できる人材を養成する。 2. 言語文化学科は、言語と文学に関する諸事象・諸問題について、根源的かつ総合的な研究・教育を行うことにより、文化現象全般を視野に入れ、自由な発想と柔軟な思考力を持ち、国際社会で活躍できる人材を養成する。 3. 人間科学科は、社会と文化における人間と人間相互の生の営みに焦点を合わせ、人間の存在と形成について総合的に研究・教育を行うことにより、一人ひとりの人間が充実して生きることのできる社会と文化の創造に貢献できる人材を養成する。（文学部規定第 2 条の 2）

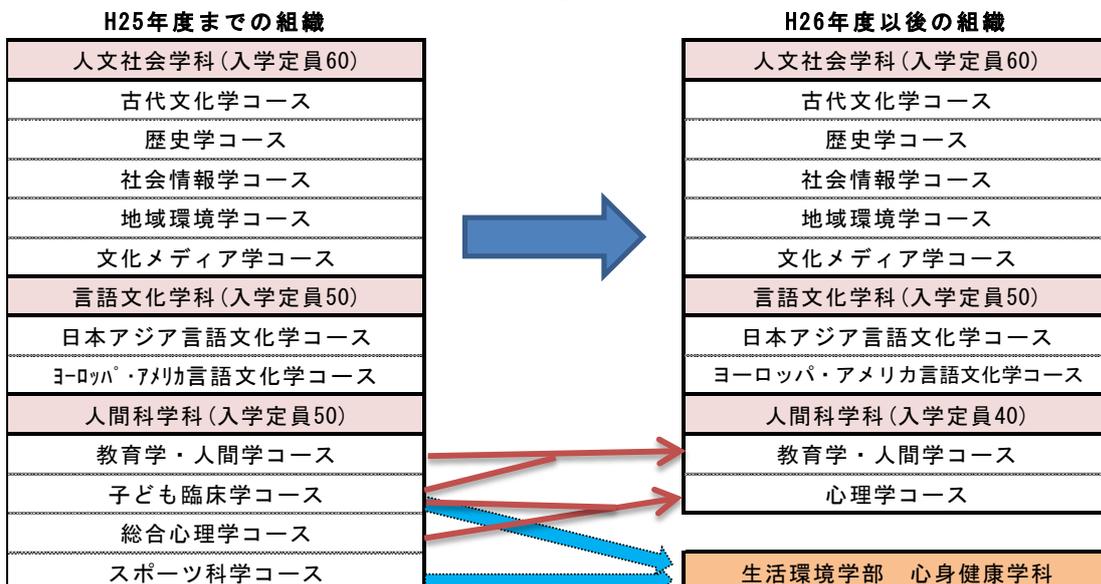
以上の目的は、本学の第 2 期中期目標「教養教育・専門教育・キャリア教育等の体系的連携を推進し、社会のリーダーとして活躍できる豊かな人間性を備えた女性人材育成のための教育を実施する」に沿うものである。

2 特徴

○全学改組と定員数の変更

平成 20 年度に専攻制に代えて履修コース制を導入し、人文社会学科に 5 コース（古代文化学、歴史学、社会情報学、地域環境学、文化メディア学）を、言語文化学科に 2 コース（日本アジア言語文化学、ヨーロッパ・アメリカ言語文化学）を、人間科学科に 4 コース（教育学・人間学、子ども臨床学、総合心理学、スポーツ科学）を設けたが、26 年度の全学改組で、スポーツ科学コースの教員 6 名と子ども臨床学コースのうちの臨床心理分野の教員 1 名を他学部配置転換したため、26 年度入学生より年次進行で文学部履修コースとしてのスポーツ科学コースは廃止、子ども臨床学コースは総合心理学コースと統合して心理学コースとした（資料 I - 2）。これに伴い 26 年度以降は 3 学科 9 コース、定員は 10 名減の 150 名となった。

（資料 I - 2：平成 26 年度改組による組織移行図）



○学生の受け入れ状況

1年次入学者選抜状況（資料I-3）からみた充足率は1.05～1.12で、適正である。

（資料I-3：平成22～27年度文学部1年次入学者選抜状況）

学部・入試区分等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	充足率
22年度	前期日程	103	351	343	111	107	1.06
	高大連携	(2名以内)	2	2	2	2	
	帰国生	(5名以内)	4	4	2	2	
	後期日程	45	453	247	52	46	
	A O	12	40	40	12	12	
	私費外国人留学生	若干名	21	17	2	0	
	合計	160	871	653	181	169	
学部・入試区分等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	充足率
23年度	前期日程	103	266	258	112	110	1.12
	高大連携	(2名以内)	2	2	2	2	
	帰国生	(若干名)	10	10	3	3	
	後期日程	45	415	228	52	50	
	A O	12	55	55	12	12	
	私費外国人留学生	若干名	21	20	3	2	
	合計	160	769	573	184	179	
学部・学科・入試区分等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	充足率
24年度	前期日程	103	335	330	113	106	1.08
	高大連携	(2名以内)	2	2	2	2	
	帰国生	(若干名)	1	1	1	1	
	後期日程	45	369	184	58	52	
	A O	12	39	39	11	11	
	私費外国人留学生	若干名	17	16	2	0	
	合計	160	763	572	187	172	
学部・入試区分等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	充足率
25年度	前期日程	103	314	307	111	105	1.06
	高大連携	(2名以内)	2	2	2	2	
	帰国生	(若干名)	5	5	3	3	
	後期日程	45	365	197	55	47	
	A O	12	34	34	12	12	
	私費外国人留学生	若干名	10	8	2	0	
	合計	160	730	553	185	169	
学部・入試区分等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	充足率
26年度	前期日程	99	255	250	105	101	1.05
	高大連携	(2名以内)	1	1	1	1	
	帰国生	(若干名)	0	0	0	0	
	後期日程	45	385	195	56	49	
	A O	6	26	26	6	6	
	私費外国人留学生	若干名	12	8	1	0	
	合計	150	679	480	169	157	
学部・入試区分等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	充足率
27年度	前期日程	99	299	294	108	104	1.05
	高大連携	(2名以内)	2	2	2	2	
	後期日程	45	322	175	50	45	
	A O	6	27	27	6	6	
	私費外国人留学生	若干名	8	4	1	0	
	合計	150	658	502	167	157	

奈良女子大学文学部

平成27年度の在籍学生総数は703名（資料I-4）、専任教員66名（他学部へ異動した教員を含む）であり、専任教員1人当たりの学生数は10.7名である。

（資料I-4：文学部在籍学生数）

平成27年5月1日現在

	学 科	定 員		現 員				
		入学定員	収容定員	1年次	2年次	3年次	4年次	計
文学部	人 文 社 会 学 科	60	240	157	68	77 (5)	83 (8)	678 (23)
	言 語 文 化 学 科	50	200		45	43 (2)	55 (3)	
	人 間 科 学 科	40	180		44	48 (2)	58 (3)	
	小 計	150	620	157	157	168 (9)	196 (14)	678 (23)
	国 際 社 会 文 化 学 科						2 (0)	2 (0)
	小 計	0	0	0	0	0	2 (0)	2 (0)
	計	150 (20)	620 (40)	157	157	168 (9)	198 (14)	680 (23)

()は第3年次編入学に係る数で外数

なお、文学部生の出身地域は全国に跨っているが、最も多いのは近畿地方で、2期全体の入学者数の46%を占める（別添資料I-5）。

○専門教育とカリキュラムの特徴

文学部の専門教育としての特徴は、人文科学、社会科学から人間科学に及ぶ領域の広さにあり、社会的要請にも応える学際的・総合的研究として、「なら学」、「ジェンダー言語文化学」、「差異と交感の人間学」の3つのプロジェクトを推進し、その成果を教育に還元している。また、元女子高等師範学校という伝統の上に立ち、附属学校との連携のもとで、高等学校一種免許、中学校一種免許のほか、小学校一種免許、幼稚園一種免許といった多校種多教科の教職免許のほか、学校図書館司書教諭、学芸員、社会調査士、健康運動指導士などの資格が取得できるカリキュラムを擁している。

[想定する関係者とその期待]

在学生及びその家族、卒業生、卒業生の雇用者、地域社会からは、人文学的な知をもって現代社会が直面する諸課題を解決することや、適切な教育課程のもと、イノベーション社会での汎用的なスキルをもつ人材を養成することが期待されている。

II 「教育の水準」の分析・判定
分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

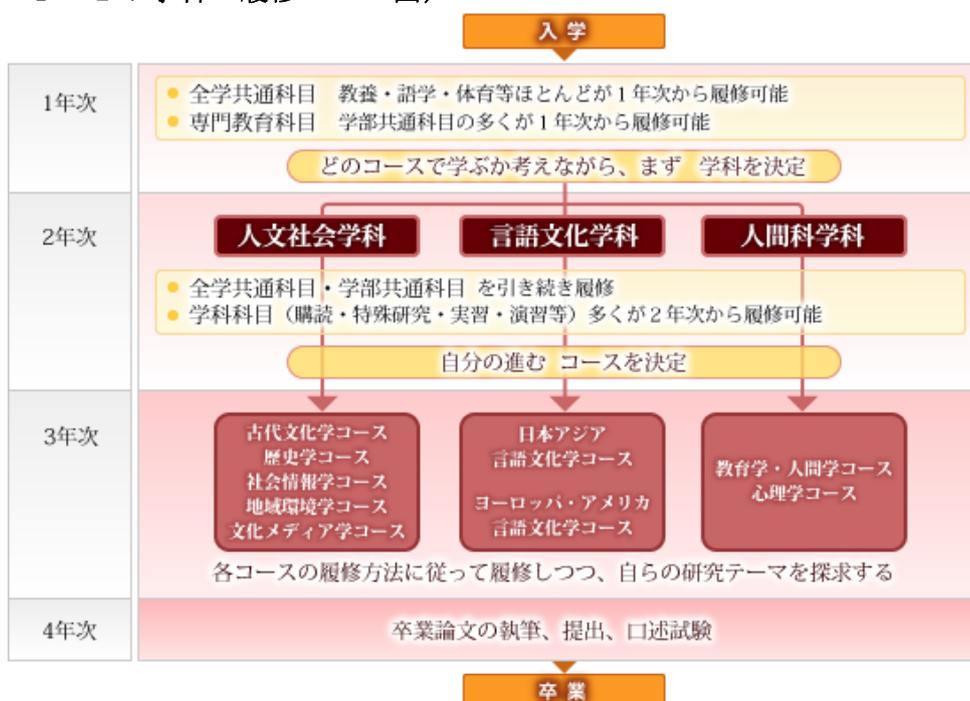
(観点に係る状況)

(1) 教員組織編成・教育体制

① 学科と履修コース

学生の主体的な学修のために、入学後の興味や関心に沿って学科や履修コースを選択する方式を採っている(資料Ⅱ-I-1)。学部全体で行われる選抜試験によって入学してきた学生は、1年次に初年度教育の「基礎演習」を受講しつつ今後の学びを自由に設計し、1年次の後半に人文社会科学、言語文化学科、人間科学科の3学科から1つの学科を選択し、2年次から学科に所属する。さらに3年次に履修コースを選択、4年次に学びの集大成としての卒業論文(必修8単位)の執筆に取り組む。学科や履修コースの選択は、学生の意思を尊重しており、履修コース別に見ると偏差があるものの、全て当該学科の受け入れ可能人数内にある(資料Ⅱ-I-2)。

(資料Ⅱ-I-1: 学科・履修コース図)



(資料Ⅱ-I-2: 学科・コース所属学生数)

入学年度	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
人 文 社 会 学 科					
古代文化	6	9	9	14	68
歴史学	12	20	19	22	
社会情報学	17	11	5	7	
地域環境学	8	6	7	4	
文化メディア学	34	28	36	30	
言 語 文 化 学 科					
日本アジア言語文化学	20	27	16	18	45
ヨーロッパ・アメリカ言語文化学	29	28	25	26	
人 間 科 学 科					
教育学・人間学	13	20	13	12	44
子ども臨床学(25年度入学生まで)	6	9	10	9	
総合心理学(25年度入学生まで)	15	14	20	17	
スポーツ科学(25年度入学生まで)	9	7	12	9	
心理学(26年度入学以降)	—	—	—	—	

②少人数教育

いずれの履修コースも、演習は 10 名以下、卒論演習は 4 名の平均受講者数であり、少人数教育を実践している（資料Ⅱ－Ⅰ－3）。専門科目の専任担当率は、平均 86%となっている（別添資料Ⅱ－Ⅰ－4）。

（資料Ⅱ－Ⅰ－3：文学部開設科目別の履修登録者数とクラス平均人数 平成 27 年度）

	科目	対象	開講数	履修登録者数（延べ人数）	クラス平均人数
学部共通科目	基礎演習	1 回生	8	156	20
	学ぶことと女性のライフスタイル	1 回生	1	41	ミニゼミは5
	概論	1 または 2 回生以上	73	2,067	28
学科専門科目	講読	2 または 3 回生以上	66	1,059	16
	特殊研究	2 回生以上	115	2,349	20
	演習	2 または 3 回生以上	111	883	8
	実習（フィールドワーク含む）	2 または 3 回生以上	33	455	14
	卒業演習	4 回生	84	352	4

* コミュニケーション科目は講読に含め、資格関連専門科目は除外。

③学際的な学修

学際的な学修のために、専門教育科目は細分化を避けて、学部共通科目・学科科目という大まかな区分にとどめており、学生は他学科他コースの授業も積極的に履修している（資料Ⅱ－Ⅰ－5）。また、希望者は、放送大学教育協力型単位互換科目や、奈良県内の大学間単位互換制度を利用できる。

（資料Ⅱ－Ⅰ－5：代表的な文学部専門科目の履修コース別受講者数 平成 27 年度）

人文社会学科		履修コース名											他学部 ほか	受講者数 合計
科目名	開講コース	古代文化学	歴史学	社会情報学	地域環境学	文化 メディア学	日本アジア 言語文化学	ヨーロッパ 言語文化学	教育学・ 人間学	子ども 臨床学	総合 心理学	スポーツ 科学		
日本美術史 特殊研究A	古代文化学	9	10	0	0	9	0	1	1	0	0	0	1	31
日本史 特殊研究E	歴史学	14	24	0	1	7	1	1	0	2	0	0	4	54
計量社会学 特殊研究	社会情報学	0	0	4	2	8	0	1	0	0	0	0	1	16
社会地理学 特殊研究B	地域環境学	1	2	4	4	2	0	0	1	0	1	0	0	15
観光文化論 特殊研究	文化メディア学	2	9	1	3	36	2	2	5	3	1	0	3	67

言語文化学科		履修コース名											他学部 ほか	受講者数 合計
科目名	開講コース	古代文化学	歴史学	社会情報学	地域環境学	文化 メディア学	日本アジア 言語文化学	ヨーロッパ 言語文化学	教育学・ 人間学	子ども 臨床学	総合 心理学	スポーツ 科学		
近代国文学講読Ⅰ	日本アジア 言語文化学	0	0	1	0	4	22	3	2	0	0	0	1	33
近代国文学講読Ⅱ	日本アジア 言語文化学	0	0	0	1	1	21	1	2	0	0	0	2	28
イギリス地域 文化論講読Ⅰ	ヨーロッパ 言語文化学	0	0	1	0	0	1	14	0	0	1	0	4	21
英語テキスト論 特殊研究	ヨーロッパ 言語文化学	0	1	0	0	1	0	31	0	1	0	0	1	35

人間科学科		履修コース名											他学部 ほか	受講者数 合計
科目名	開講コース	古代文化学	歴史学	社会情報学	地域環境学	文化 メディア学	日本アジア 言語文化学	ヨーロッパ 言語文化学	教育学・ 人間学	子ども 臨床学	総合 心理学	スポーツ 科学		
哲学思想史 特殊研究Ⅱ	教育学・人間学	0	1	0	1	0	0	0	3	0	0	0	1	6
子ども史特殊研究	教育学・人間学	0	3	0	0	0	1	0	24	4	2	0	7	41
社会心理学 特殊研究	総合心理学	0	0	0	2	1	1	0	10	9	42	1	0	66

④初年次教育と教養教育

初年次教育を重視しており、1年生前期に「基礎演習」（ほぼ全員が履修、別添資料Ⅱ－Ⅰ－6）を開講している。

「基礎演習」は全クラス同一の教育目標のもとで授業を運営しており、平成27年度からはクラス担任が授業担当者となることで学生支援と連動した教育体制を組んだ。「学ぶことと女性のライフスタイル」は、課題発見型の授業であり、最終授業のアンケートでは、ほとんどの受講生が、自らの女性としての生き方や考え方についての気づきや発見があったと自己評価している（別添資料Ⅱ－Ⅰ－7）。

このほか、文学部教員は、平成27年以降開講した教養科目「パサージュ」と「教養コア科目」を含む教養科目や外国語教育においても重要な役割を担っている。

（2）多様な教員の確保とその効果

女性教員比率は、第1期終了時点で28.4%だったが、第2期に上昇し、平成27年度には32.2%に達した（資料Ⅱ－Ⅰ－8）。これは国立大学人文科学系の女性教員比率23.7%（※）を8.5ポイント上回っている。また、女性教員の3人に1人は本学出身者であり、学生の良きロールモデルとなっている。

（※）『国立大学における男女共同参画推進の実施に関する第12回追跡調査報告書』（平成27年12月 一般社団法人国立大学協会）による。

（資料Ⅱ－Ⅰ－8：文学部女性教員比率の推移）

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
文学部女性教員比率	28.8%	30.4%	34.3%	35.7%	31.7%	32.2%

外国人教員は現在、英語、ドイツ語、フランス語に1人ずつ配置されており、TOEICのヒアリングの点数などの面で効果を得ている（別添資料Ⅱ－Ⅰ－9）。

（3）入学者選抜方法の工夫とその効果

一般入試では、個別学力検査の前期日程・後期日程とも思考能力や表現能力をみかく基礎として国語と外国語の力を重視し、完全記述式の試験を行っている。地域環境学分野と教育学・人間学分野で実施しているA0入試では、学生の意欲と将来性を見極めるために、2段階選抜を実施している。また、附属学校を通じて高校教育と大学教育の接続を研究推進するための高大連携入試のほか私費外国人留学生試験も実施し、多様な学生を受け入れている（資料Ⅰ－3、P1－3）。こうした特別入試では、小論文を課すことで、文学部で学ぶために必要とされる文章表現力を確認している。3年次編入学試験では、平成24年度より「英語」科目に代えてTOEICもしくはTOEFLのスコアをもとに判定する方式を導入し、受験生の負担を軽減した。なお、A0入試や高大連携入試の入学予定者に対しては、入学前指導を実施し、編入生には平成24年度より学部独自にチューターを配置することで、入学後の学修を支援している。

（4）教員の教育力向上のための体制の整備とその効果

①FD活動

文学部ファカルティ・デベロップメント実施委員会（以下、FD実施委員会）主催の研修会には、80%以上の教員が参加している（別添資料Ⅱ－Ⅰ－10）。また同委員会は、学部専門教育課程について授業評価アンケートを実施し、集計結果を教員にフィードバックしている（別添資料Ⅱ－Ⅰ－11）。平成25年度からは、アンケートの教員への質問項目に「昨年度と比較した改善点とその効果」を追加し、「授業を改善した」という報告を得ている（別添資料Ⅱ－Ⅰ－12）。

②研究交流集会

文学部では、授業改善や専門職能開発に関連する取り組みとして、研究交流集会を開催している（別添資料Ⅱ－Ⅰ－13）。

(5) 質保証・質向上のための工夫とその効果

①総務委員会による点検

文学部では、教育プログラムの質向上のため、教務委員会がカリキュラムを検討実行し、FD委員会が研修会や授業および学士力アンケートの実施と分析を行い、総務委員会が上記の教育活動を評価、点検している。

②1年生への支援

初年次に大学教育や生活になじめず、不登校から成績不振、休学へと進むケースがあることから、平成26年度からは教務委員会と学生支援委員会が連携して、クラス担任が「基礎演習」を担当することで1年生の学びを見守ることとした。また、1年生必修科目の体育の授業で無届けの欠席が続いた場合は、クラス担任に連絡が行くようなシステムを構築した。27年度には1年から2年への進級時点での休学者が0名になった。

③新入生保護者説明会

平成27年度より新入生保護者説明会で学部の教育方針等を説明する取組みを開始した。保護者アンケートでは、文学部のカリキュラムや学生支援体制について理解が深まったという回答を得ている（別添資料Ⅱ-I-14）。

（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）文学部における教育の実施体制は、本学の基本理念、文学部の教育目的、第2期中期目標の学士課程の教育目標を踏まえている。特に初年次教育は、2年次以降の専門教育の礎として機能している。また、「基礎演習」担当者とクラス担任を兼任させたことや、新入生保護者説明会の開催など、1年生の学びを支援するシステムも効果を上げている。FD活動も活発で、女性教員比率は全国平均を超え、多様な教員の確保がなされている。以上のことから、文学部の教育実施体制は、想定する関係者の期待を上回ると判断される。

観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

(1) 体系的な教育課程の編成状況

①ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

文学部では、資料Ⅱ－Ⅰ－15、16のポリシーに基づき、初年次から卒業まで段階的に専門を深められるようにカリキュラムを設計している。

(資料Ⅱ－Ⅰ－15：ディプロマ・ポリシー)

<p>文学部では、「社会への鋭い認識を育む教育」「国際的視野に立った思考力を養う教育」「人間への深い理解を目指す教育」という教育目標のもとに、以下の諸力を涵養し、幅広い教養と深い専門性を身につけた創造的な女性を育成する。定められたカリキュラムを履修し、所定の単位を修め、卒業論文を提出し、科目修了試験に合格した学生を、この目標に到達したと認め、「学士（文学）」の学位を授与することとする。</p>
--

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ● 社会における諸事象を批判的に眺め、的確に判断する力 ● 歴史・文化・言語・地域について認識を深め、国際社会の中で活躍できる力 ● 豊かな感受性と洞察力を持ち、人間とは何かについて深く考える力 |
|---|

(資料Ⅱ－Ⅰ－16：カリキュラム・ポリシー)

<p>文学部では専門科目として「学部共通科目」、「学科科目」を設置する。</p>
--

<p>「学部共通科目」は、主に1～2年次での履修であり、専門の基礎科目としての「基礎演習」「学ぶことと女性のライフスタイル」という初年次教育科目を設置し、大学での学びへのスムーズな導入を図るとともに、「概論」科目を設置し、各専門分野の基礎的な知識や考え方を習得できるようにしている。また、「全学共通科目」の履修も推奨し、幅広い教養を身につけることも目指している。</p>

<p>「学科科目」は学生が学科に所属する2年次以降の履修となる。「特殊研究」を中心とした講義科目による専門的な知識の獲得、「講読」「実習」における具体的な素材を通しての学的スキルの習得、「演習」による創造的な思考力の育成を目指している。そして4年次に「卒業論文」を全員に課すことによって、これまでの学びの集大成と、総合的な能力の陶冶を図っている。</p>

<p>また、「学科科目」については、他学科の大部分の科目を自由に履修することも可能であり、幅広い視野を獲得できるカリキュラムを編成している。</p>
--

②学際研究のプロジェクト授業

文学部の学際的研究として、「なら学」「ジェンダー言語文化学」「差異と交感の人間学」の3プロジェクトを推進し、成果を教育に還元するべく関連授業を開設した（資料Ⅱ－Ⅰ－17）。

(資料Ⅱ－Ⅰ－17：プロジェクト関連科目一覧表)

プロジェクト名	科目名		
なら学	なら学概論A・B	なら学フィールドワーク実習	なら学演習
ジェンダー言語文化学	ジェンダー言語文化学概論	ジェンダー言語文化学特殊研究A・B	ジェンダー言語文化学演習
差異と交感の人間学	人間科学へのいざないⅠ	人間科学の思想と方法	

(2) 社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫

上掲の「なら学」は、地域や社会と連携した教育である（資料Ⅱ－Ⅰ－18）。歴史ある奈良の社会や文化を現代的視点から読み解き、成果を外部に発信する新しい試みであり、近年全国で盛んになっている地域学・地元学の先駆的存在でもある。

(資料Ⅱ－Ⅰ－18：「なら学」の地域に関する教育内容)

開講主体	授業名	内容	地域等開放状況
全学開講科目	「なら学」 (一回生以上)	文学部のなら学プロジェクトが編纂した『大学的奈良ガイド』が参考書。文学部・生活環境学部・理学部の教員による奈良についてのリレー講義。主に一回生や留学生が対象。	
文学部共通科目	なら学概論B (一回生以上)	多様な歴史や文化・社会状況からなる奈良県について広く知識を増やすと同時に、受講者が奈良の魅力発見や情報整理を試みるワークも交えた授業。 <u>奈良の地域雑誌の編集長、奈良の食文化振興のNPOスタッフ、南和(奈良県南部地域)の役場の方</u> などをゲスト講師に迎え、奈良について具体的・実際に学ぶ。	文学部以外や県内の単位互換協定に基づき県内の大学生にも開放
文学部専門科目	なら学フィールドワーク実習 (二回生以上)	概論で学んだ知識を実際に確認し、奈良生活の経験をさらに広げ・深めるための実習授業。平成21年度は、天理から山辺の道、また橿原神宮から今井町周辺を対象とし、各自が自分なりのテーマ・視点を見つけ学習と研究報告を行う。	
文学部専門科目	なら学演習 (三回生以上)	奈良を中心とした地域の文化研究やメディア上のローカリティについて各自テーマを決めて報告すると同時に、奈良の企業や店舗を訪問。	
なら学プロジェクト	〈成果報告〉 (四回生及び大学院生)	奈良女子大生による奈良に関する研究発表会。生活観光現代GPと共催で、毎年3月下旬に、奈良の市中において、奈良に関する卒業論文・修士論文、調査報告など、学生の成果の報告会を開催。	毎年、町の多くの方の参加がある。

(3) 国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

①外国語教育の重視

外国語教育を重視し、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語から2か国語以上を選択、計16単位を必修としている。英語教育では、年に5回TOEIC 団体特別受験 (IP テスト) を実施しており、650～799 点を得た者に英語の2単位を、800 点以上に4単位を付与するなどのインセンティブを通じて学習意欲を涵養している。専任教員がいるドイツ語、フランス語、中国語では週4コマ授業制を採っている。

②海外留学・語学研修

海外協定校への交換留学や語学研修への参加を奨励しており、毎年30～40名が留学のために渡航している(資料Ⅱ－Ⅰ－19)。

(資料Ⅱ－Ⅰ－19：文学部海外渡航留学者数)

留学の種別	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
協定校派遣(4か月以上)留学	2	7	10	9	8	3
夏季中国語学研修(南京大学)	14	12	7	中止	5	6
グローバル女性人材養成プログラム(ニュージーランド)	6	13	9	13	11	4
夏季ベトナム研修			—			6
その他の派遣留学				4	4	3
学生の自主的な留学(注)	6	9	9	13	11	10
合計	28	41	35	39	39	32

(注)学生の自主的な留学には、留学を理由に休学している学生も含む。

③外国人留学生の受け入れと留学生交流室の開設

文学部では、交換留学生や研究生を積極的に受け入れており(資料Ⅱ－Ⅰ－20)、27年度には文学部留学生交流室を開設し、日本人学生と留学生が学びあう環境を整備した。

(資料Ⅱ－Ⅰ－20：文学部の外国人留学生受け入れ状況)

区 分	学部学生		非正規生		計		合計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	
平成22年5月	0	10	0	19	0	29	29
平成22年10月	0	10	0	19	0	29	29
平成23年5月	0	10	0	22	0	32	32
平成23年10月	0	10	1	22	1	32	33
平成24年5月	0	8	2	20	2	28	30
平成24年10月	0	8	1	17	1	25	26
平成25年4月	0	4	1	9	1	13	14
平成25年10月	0	4	0	7	0	11	11
平成26年4月	0	2	0	18	0	20	20
平成26年10月	0	2	2	17	2	19	21
平成27年4月	0	2	3	8	3	10	13
平成27年10月	0	2	5	14	5	16	21

(4) 養成する人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

①初年次からのゼミ

社会のリーダーとして活躍できる女性人材を育成するために、初年次から「基礎演習」などで、調べる技術、資料解釈力、プレゼンテーション能力を身につけるための少人数ゼミを展開している。

②実習

言語文化学科以外のすべてのコースで、実習科目を開講している。そのうちインターンシップは、奈良県立図書館での体験学習である「文化メディア学インターンシップ AB」と附属幼稚園や学校現場での実習である「子ども臨床学インターンシップ」(25年度入学生まで)が、フィールドワークでは「なら学フィールドワーク実習」や子ども臨床学コースの必修科目「フィールド調査法実習」(別添資料Ⅱ－Ⅰ－21)があるほか、「古代文化学実習 A」や「地域環境学巡検」なども開講している。また、ほとんどのコースが校外学習を実施しており、養成しようとする人材に応じた効果的な教育方法を採用している。

(5) 主体的な学習を促すための取組

①SA と TA 制度

資料Ⅱ－Ⅰ－22のように、文学部の主体的な学びを支えるために、初年次の「基礎演習」にはチュードントアシスタント(SA)を、演習や実習にはティーチングアシスタント(TA)を配置している。

(資料Ⅱ－Ⅰ－22：文学部平成27年度授業形態別 TA、SA 配置状況)

	基礎演習	講義	演習	実習	その他	計
TA配置数	0	2	16	15	0	33
SA配置数	10	0	0	0	0	10

②単位の実質化

単位の実質化のために、授業のシラバスに事前準備・事後学習についての具体的な指示を記載し、学生に予習復習を促している(別添資料Ⅱ－Ⅰ－6)。

③短期語学研修等

交流協定校での短期語学研修(資料Ⅱ－Ⅰ－19、P1-10)や、インターンシップ(別添資料Ⅱ－Ⅰ－21)を開講している。

④成績優秀表彰制度

学習意欲向上のために、文学部では成績優秀者表彰制度(あをによし賞—文学部の退職教員からなる「あをによし会」から成績優秀者に対して授与される賞)を設けており、そのうち希望者には登録履修単位の上限緩和を認めている(資料Ⅱ－Ⅰ－23、24)。

(資料Ⅱ－Ⅰ－23：成績優秀者数—あをによし賞受賞者数)

*卒業要件科目を40単位以上履修しかつ得点平均が85点以上。26年度入学生より86点以上。

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
1年	28	39	50	47	34	30
2年	19	33	28	27	33	20
3年	11	16	21	22	20	13
4年	制度対象外					
計	58	88	99	96	87	63

(資料Ⅱ－Ⅰ－24：履修登録単位数の上限緩和申請者数)

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
1年	制度対象外					
2年	9	12	31	30	8	16
3年	5	3	3	10	6	1
4年	0	2	0	0	5	1
計	14	17	34	40	19	18

⑤学習環境の整備

平成25年度に文学部図書室に集密書架を導入し、これまでコース別に配架していた図書や雑誌を一元管理することで、学生の利便性を向上させた。

⑥学習成果の発信

文学部の「まほろば叢書」（かもがわ出版）創刊号は、平成23年6月に行った震災関連授業（「震災ウィーク」）の成果である。また、第5巻『「徒然草」ゼミナール』と第6巻『和合亮一が語る福島』所収「奈良女子大生の福島訪問記」も、学生の主体的な学習を記録したものである。（別添資料Ⅱ－Ⅰ－25）

⑦大学院生との研究交流

年2回の大学院進学説明会において、「まほろば MC 奨励学生」（学部が研究経費を支援する博士前期課程の学生）が研究報告を行うことで、学部生の学習意欲を喚起している。

(6) その他の教育

①教育を通じた地域貢献

社会連携センターと共催で毎年公開講座を実施しているほか、スポーツ科学コースや、子ども臨床学コースでは教育を通じた地域貢献を行っている（別添資料Ⅱ－Ⅰ－26）。

②附属学校との連携

本学の附属学校園は、かつて文学部の附属学校であったことから、両者は密接な関係にある。附属中等教育学校と附属幼稚園は、文学部生の教育実習やフィールド実習の主要な受け入れ校である。附属学校の教員は現場の経験をもとに文学部の教職科目の一部を担当し、文学部教員も附属中等学校のアカデミックガイダンス（4・5年生の必修）では人文分野の講師を務めている（別添資料Ⅱ－Ⅰ－28）。また、高校から依頼のあった場合は、高校に赴いて講義を行い、直接高校教員と意見交換を行っている（別添資料Ⅱ－Ⅰ－29）。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 学位授与の方針に基づき、体系的な教育課程が整備され、少人数による演習、実習など目的と趣旨に沿った科目が配置され、社会のニーズや国際通用性のある教育課程となっている。また、学生の主体的な学びを支える学習環境の整備も適切に行われている。教育を通じた地域貢献にも積極的に取り組んでおり、教育内容・方法は、想定する関係者の期待を上回ると判断される。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

(1) 履修・修了状況から判断される学習成果

学生の専門科目の単位修得率は98.7%と、きわめて高い(資料Ⅱ-Ⅱ-1)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-1：文学部専門科目の単位取得率) 平成27年度実績

	履修登録単位数	修得単位数	単位修得率
1年生	813	809	99.5%
2年生	2735	2699	98.7%
3年生	1689	1665	98.6%
4年生	442	432	97.7%
全体	5679	5605	98.7%

毎年、1、2年生を中心に、修得40単位以上かつ成績平均85点以上の要件を満たす成績優秀者も多数出ている(資料Ⅱ-I-23、P1-12)。特に、平成24~25年度に急増したため、26年度入学生からは成績優秀者の要件を厳しくした。成績優秀者に認められる履修登録単位数の上限緩和を申請する者はいるが(資料Ⅱ-I-24、P1-12)、早期卒業制度の利用者は26年度の1名にとどまっております、むしろ卒論にじっくり取り組むことを選択する人が多い。卒論には主査1名、副査2名以上からなる口頭試問を課しており、各コースでは卒業論文発表会が開催されている。こうした中、学術誌に掲載が認められるような優秀卒業論文が毎年、複数生まれている(別添資料Ⅱ-Ⅱ-2)。

留年生は22年度をピークに、その後徐々に減り、27年度には32名と比較的少数にとどまっている。休学者の総数も減りつつあり、特に26年度以後は、留学以外の理由による休学が減っており、退学者も減少傾向にある(別添資料Ⅱ-Ⅱ-3)。

(2) 資格取得状況、学外の語学等の試験の結果

①資格取得状況

各種教員免許状の取得者数は一時期、延べ160名を超えていたが、近年は減少傾向にある。社会調査士の資格取得状況は順調である。なお、26年度の学芸員の極端な減少は、実習が3年次から4年次になったことによる一時的な現象である(資料Ⅱ-Ⅱ-4)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-4：免許・資格取得状況)

資格	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	
各種教員免許状	幼稚園	8	12	19	15	10	6
	小学校	18	19	17	17	13	5
	中学校	37	38	49	27	27	24
	高等学校	69	65	82	50	58	35
	計	132	134	167	109	108	70
学校図書館司書教諭(注)	3	9	12	15	14	4	
学芸員	36	37	32	49	5	15	
(大学院)臨床発達心理士(個人申請)	6	1	5	5	2	1	
社会調査士(個人申請)	12	13	17	22	13	15	
(大学院)専門社会調査士(個人申請)	0	1	0	0	0	2	
健康運動指導士(受験資格)	4	5	6	5	5	5	

(注)必要単位をすべて本学開講科目で取得した者のみの数。

②語学検定の結果

文学部のTOEIC 学内受験成績の平均点はほぼ600点前後で、高い時には650点に達し、国際化時代に対応した英語力の養成に成果をあげている。(別添資料Ⅱ-I-9)

また、専任教員がいる中国語、フランス語、ドイツ語では週4コマ授業制を採っていることから、初級レベルの語学力が早く身につく、語学検定も入門レベルよりも上の級から受験する学生が多い。成績も良好で、特に初級～中級では検定全体の合格率を上回っている。(別添資料Ⅱ-II-5～7)

③その他

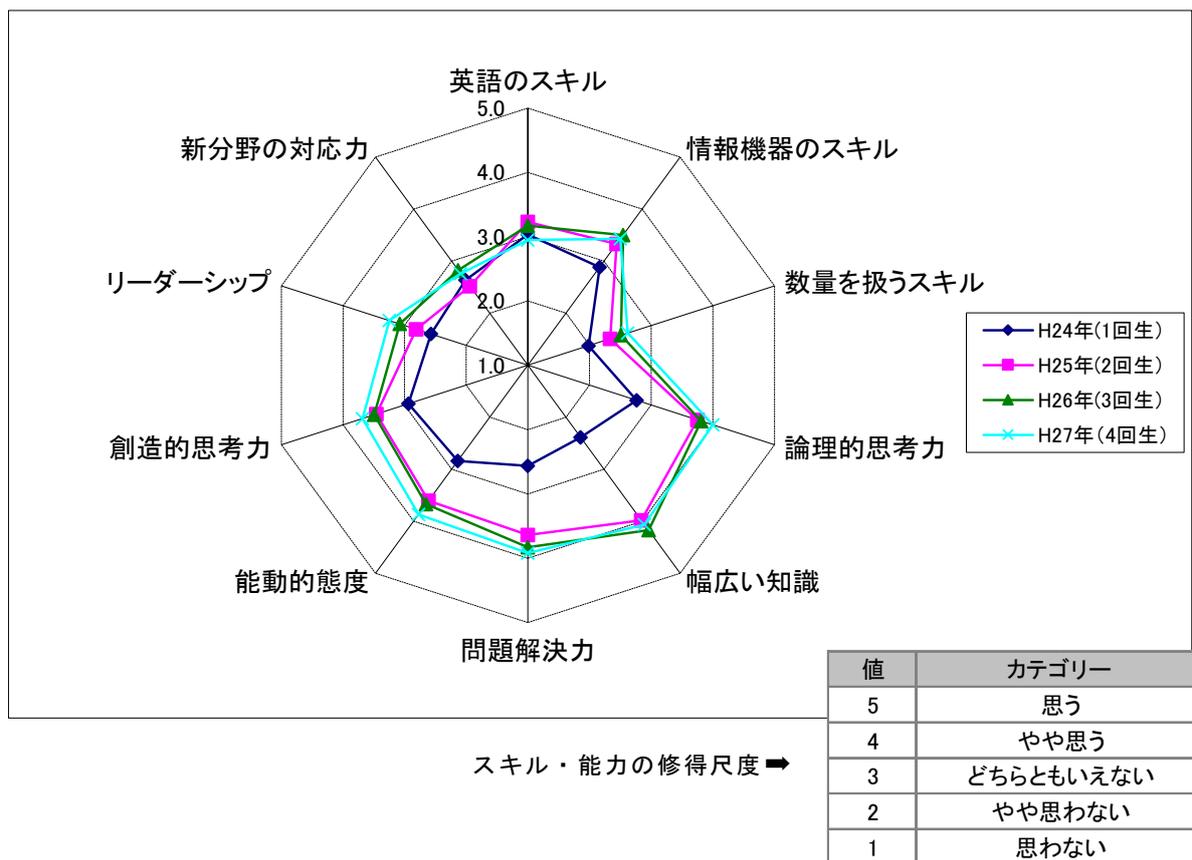
文学部生は著書を公刊したり、ロゴの公募で大賞に選ばれたりするなど、個性を活かした幅広い活動を行っている(別添資料Ⅱ-II-8)。

(3) 学業成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の分析結果

①学業成果のアンケート

全学年対象の学業成果に関するアンケートによれば、文学部生は特に2年の段階に論理的思考力、幅広い知識、能動的態度、創造的思考力などで伸びを実感する傾向にあり、これは初年次教育の効果の一端といえる。一方、数量を扱うスキルに対して苦手意識を感じており、今後の重点課題である(資料Ⅱ-II-9)。

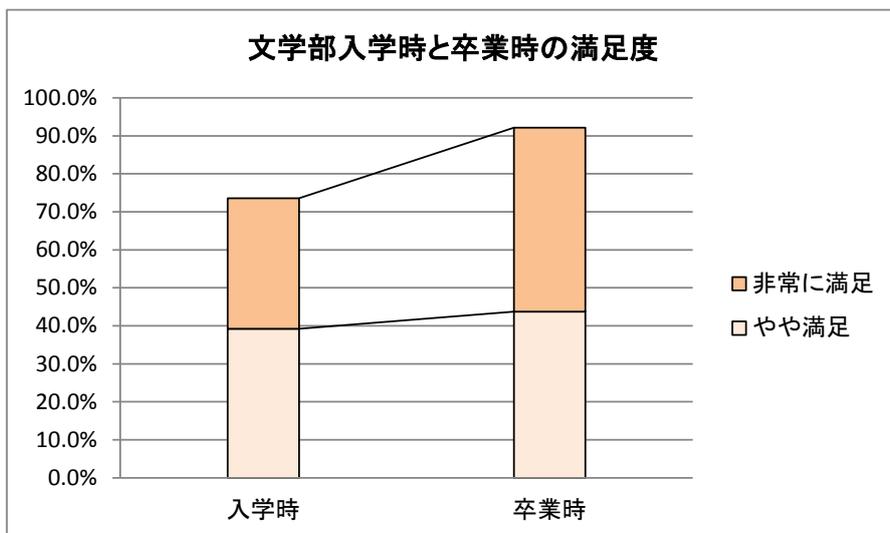
(資料Ⅱ-II-9 : 平成24年度入学生の学業成果に関する経年変化レーダーチャート)



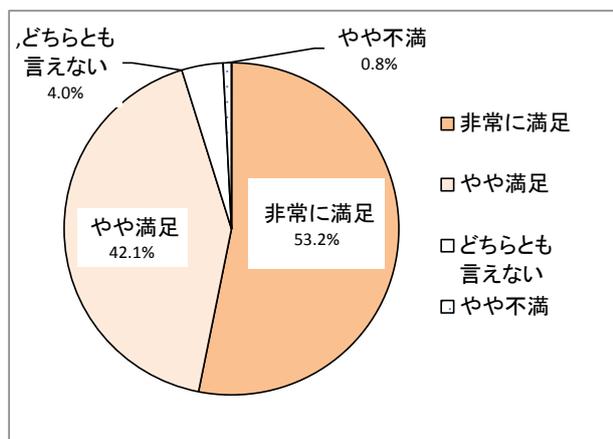
②学生満足度調査

平成26年度の卒業前の学生を対象とした学生満足度調査では、入学時に非常に満足34.4%、やや満足39.2%であったのが、卒業時にはそれぞれ48.6%、43.7%と合計92.3%が満足する結果となっている。とりわけ、専門科目での満足度が合計95.3%と高い。これと連動しているのが、96.0%という教員に対する満足度の高さである(資料Ⅱ-II-10)。きめ細かな教育の成果といえる。

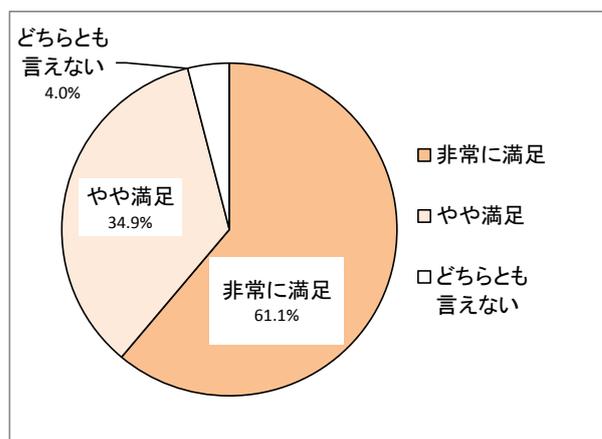
(資料Ⅱ－Ⅱ－10 : 平成26年度卒年生への満足度調査) 回答率：65%



文学部専門科目への満足度



文学部教員への満足度



(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 学生の単位修得率が高く、成績優秀者が多いこと、各学年や卒業時等における学業の成果、各種教員免許など資格取得者数や学外の語学等の検定試験での高い合格率、退学者数の少なさ、留年者や休学者の減少、教育に対する学生の高い満足度からも、教育の成果があがっていることは明らかであり、学業の成果は、想定する期待を上回ると判断される。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

(1) 進路・就職状況等から判断される在学中の学業の成果の状況

①進路・就職状況

就職者と進学者の割合はほぼ8：2である。就職先は民間企業が6.5～7割、教員・公務員が3割となっている。近年は公務員が倍増し、教員は減少の傾向にある。就職率は85.2～95.0%の間を推移し、良好である(資料Ⅱ-Ⅱ-11)。進学者のほとんどは本学大学院への進学である。

(資料Ⅱ-Ⅱ-11：文学部生の卒業後の進路)

学部	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	
卒業者数	196	178	184	178	197	172	
進学者数	37	37	31	35	37	24	
就職者数	125	120	137	123	127	132	
その他/未定者	21	16	13	12	22	16	
進学者の割合	18.9%	20.8%	16.8%	19.7%	18.8%	14.0%	
就職者の割合	63.8%	67.4%	74.5%	69.1%	64.5%	76.7%	
進路確定率	82.7%	88.2%	91.3%	88.8%	83.3%	90.7%	
就職希望者に対する就職率	85.6%	88.2%	91.3%	91.1%	85.2%	95.0%	
就職者数	125	120	137	123	127	132	
内訳人数	民間企業	81	78	98	86	85	89
	教員	22	19	20	13	9	11
	公務員	22	23	19	24	33	32

②地方で活躍する女性人材の育成

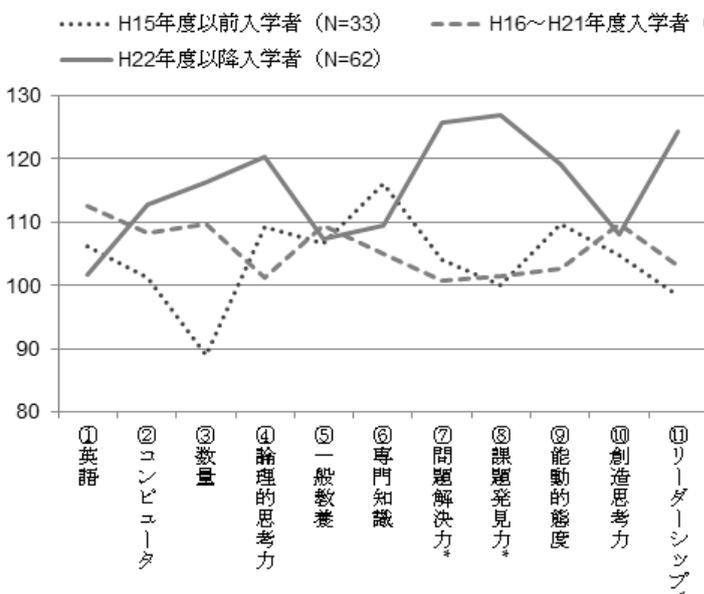
文学部生は出身地へのUターン就職が全体の40%を超えており、地方で活躍する女性人材を育成しているといえる(別添資料Ⅱ-Ⅱ-12)。

(2) 進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析

①卒業・修了生を対象としたアンケート調査

平成27年5月に実施した卒業・修了生を対象としたアンケート調査(N=216)において、11項目のスキル・能力等を在学中に身につけることができたかどうか尋ねたところ、資料Ⅱ-Ⅱ-13のように、22年度以降の文学部入学者(2期、N=62)では、15年度以前入学者(N=33)および16～21年度入学者(1期、N=121)に比べて、問題解決力、課題発見力、リーダーシップ力の3項目の平均値が有意に高かった。

(資料Ⅱ-Ⅱ-13：卒業生が感じる在学中に身につけたスキル・能力等)

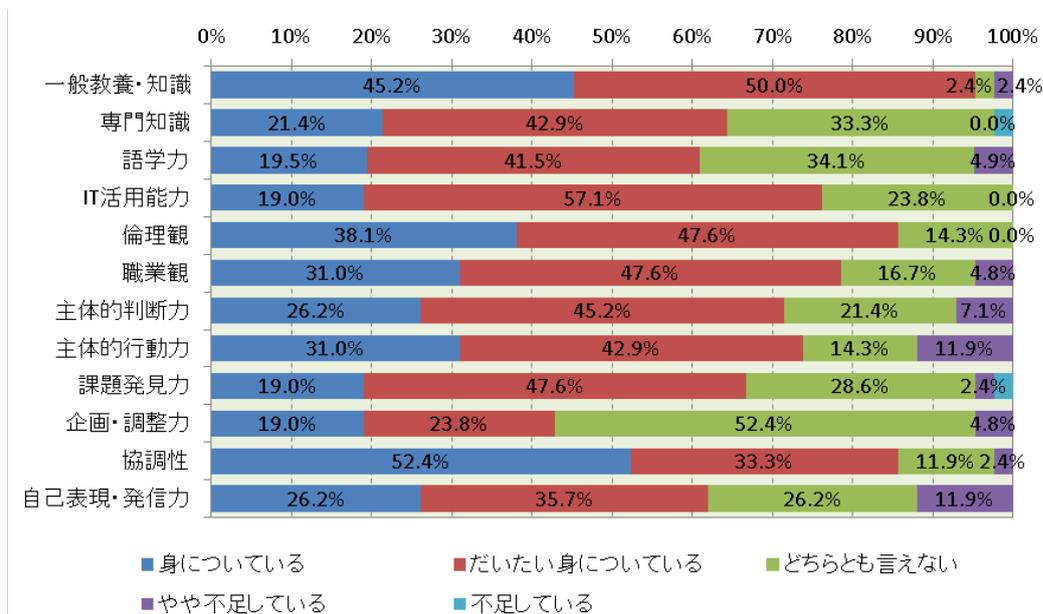


・ Kruskal Wallis 検定による。
 ・ 数値は「平均ランク」で、値の高いほうが肯定的評価が高い。
 ・ *は5%水準で有意差を示した項目。

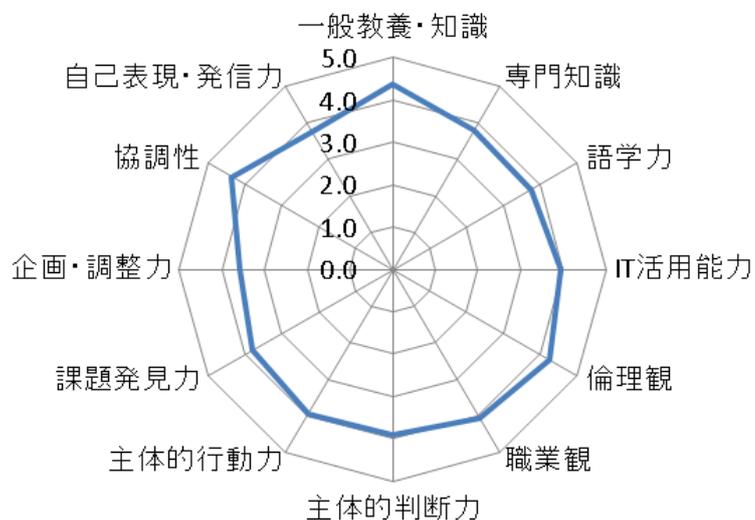
②卒業生の就職先へのアンケート調査

平成 27 年 12 月に実施した卒業生の就職先へのアンケート調査においても、資料Ⅱ－Ⅱ－14 のように、卒業生に対する評価は良好で、さらに自由記述では「良い人材を育成している」という回答が目立った（別添資料Ⅱ－Ⅱ－15）。

（資料Ⅱ－Ⅱ－14：卒業生の就職先アンケート調査の結果） N=42



平均値によるレーダーチャート



（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）学生の卒業後の就職は順調に推移している。また、在学中に身につけたスキル・能力等に関する卒業生へのアンケートでは、問題解決力、課題発見力、リーダーシップ力の3項目の平均値が高く、「基礎演習」の導入の効果と見なすことができる。卒業生の就職先からは卒業生の能力を評価する声が多い。これらのことから、文学部の教育に対する満足度は相当に高く、進路・就職の状況は想定する関係者の期待を上回ると判断される。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

初年次教育である「基礎演習」の各クラスの授業について、授業の目標や内容の統一化を進め、さらに平成27年度には1年のクラス担任が「基礎演習」を担当することで学生支援と一体化した教育体制を整えた。また、スポーツ実習の担当者と緊密な連絡をとることで、不登校などの問題を抱える学生に早期に対応できるシステムを確立した。さらに学部の教育方針について保護者と認識を共有するために新入生保護者説明会を開催した（別添資料Ⅱ-I-14）。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

第1期に比べて留年者、休学者（留学を除く）および退学者の数が減少した（別添資料Ⅱ-II-3）。

また、卒業・修了生を対象としたアンケート調査において、11項目のスキル・能力等を在学中に身につけることができたかどうか尋ねたところ、第2期の入学者では、1期入学者やそれ以前の入学者に比べて、問題解決力、課題発見力、リーダーシップ力の3項目の平均値が有意に高くなっている（資料Ⅱ-II-13、P1-16）。このことは、本学が第2期中期目標として掲げた「社会のリーダーとして活躍できる豊かな人間性を備えた女性人材育成」を着実に進めていることを示している。

2. 理 学 部

I	理学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	2 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	2 - 4
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	2 - 4
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	2 - 8
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	2 - 13

I 理学部の教育目的と特徴

1 教育目的

本学の第2期中期目標で定めた教育目標に従い、理学部は次の目的を定めている（資料I-1）。

（資料I-1：理学部の目的）

『理学部は、高いレベルの基礎科学の教育・研究活動を通じて、広い視野にもとづく問題発掘・問題解決能力を持ち、次世代の課題にリーダーシップを発揮することのできる教養豊かな女性を育成することを目的とする。』（理学部規程第1条）

また、これを実現するために3つの理念（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）を、理学部、各学科、各コースのそれぞれで定め、ウェブページ（http://www.nara-wu.ac.jp/rigaku/2014/01_policy.html）で公開している（資料I-2、I-3、I-4）。

（資料I-2：理学部のアドミッション・ポリシー）

【理学部の求める学生像】本学部で学ぶことを希望するみなさんには、入学後に理学の教育を受けるための基礎学力として、まず、論理的思考能力の基礎となり、どの分野の専門教育をうけるにも基礎となる数学について、十分に学習していることを望みます。また、理科についても、科学的思考と諸現象の科学的探究に不可欠な物理、化学、生物の各科目について、高等学校で着実に学習していることを望んでいます。自立的思考と他者とのコミュニケーションに欠かせない国語や英語に関しても、十分な力を身につけていることを期待しています。

（資料I-3：理学部のカリキュラム・ポリシー）

理学全般の基礎への導入から始めて、2つの学科に分かれて各分野を深く習得できるように、学部共通科目と学科別に体系的に構成された学科共通科目およびコース専門科目の3つのカテゴリーの授業科目を設置する。

理学各分野を深く理解し習得することを目指し、学生の専攻する各分野の基礎から専門的で発展的な内容までを網羅した学科・コース別の専門教育科目を設置する。

理学を学ぶことを通じて、自らが思考して問題解決できる柔軟な応用力を持った自立した人間を養成することを目指し、学生が能動的に理学の研究に参加する授業科目を学科・コース別に設置する。

（資料I-4：理学部のディプロマ・ポリシー）

理学部は、次世代の課題解決にリーダーシップを発揮できる教養豊かな女性を育成することを目的として、以下に示す資質・能力を体系的に構築された専門教育と活発な研究活動を通して培う。

- ・高いレベルの基礎科学の知識を身につけ、創造的能力を持つ
- ・実践的な研究活動を通して、広い視野にもとづく問題発掘・問題解決能力を有する
- ・科学リテラシーを基礎に、社会に貢献できるコミュニケーション能力を修得している

2 特徴

理学部は、平成26年度に5学科体制（数学科、物理科学科、化学科、生物科学科、情報科学科）から改組して、2学科体制（数物科学科、化学生命環境学科）となった。それぞれの学科は3つのコースから構成されている（数物科学科：〈数学コース〉〈物理学コース〉〈数物連携コース〉、化学生命環境学科：〈化学コース〉〈生物科学コース〉〈環境科学コース〉）。改組の趣旨は、現代社会の急激なグローバル化、価値観の多様化、予測困難な自然・社会現象の変動等に対応できる広い視野と深い専門知識を持つ人材を育成するためであり、数学と物理学が融合・連携して教育を行う数物科学科と、化学、生物科学、自然環境学が融合・連携して教育を行う化学生命環境学科の2大学科とした。また、情報科学科は各分野の専門性に鑑み、一部をそれぞれ生活環境学部情報衣環境学科、理学部数物科学科、理学部化学生命環境学科に移し、学部を超えた改組とした。この改組に伴い、3つのポリシーを見直し、それぞれの学科、コースにおける教育目的を明確にしている（別添資料I-5）。入学者の状況については（別添資料I-6）、平成22年度から27年度の入学定

員充足率は、各学科及び理学部全体で1.0から1.1となっており、入学定員と実入学者数との関係は適正である。

理学部が達成しようとしている基本的な成果は、リーダーシップを発揮することのできる女性を育成し社会に輩出することである。理系女性の活躍が期待されている現在、優秀な女性を数多く育て、輩出していることは、本学理学部の個性であり特色である。このために、理学部は3つのポリシーに基づき、体系的に構築された専門教育、キャリア教育と教養教育を通して、教育の質の向上に努めている。

[想定する関係者とその期待]

想定する関係者は、在学生・受験生及びその家族、卒業生、卒業生の雇用者、本学と関係のある地域社会等である。関係者から、理学部の教育目的を達成するための教育課程が適切に編成され、適切な教育方法によって実施され、学生に身につけさせる学力や資質・能力、及びディプロマ・ポリシー（別添資料Ⅰ-5）に照らして、学業の成果や進路・就職の状況において成果や効果が上がっていることが期待されている。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 1-1 教育実施体制

(観点に係る状況)

上述したように、理学部は平成 25 年度までは 5 学科体制で、26 年度に改組して 2 学科 6 コース体制となった。学科・コースは自然科学の基盤となる学問分野と学際的分野における教育研究を重視した構成となっている。専任教員一人当たりの学生数は 10.0 人（平成 27 年 5 月 1 日現在）であり、少人数教育を実現できる数値である。理学部では、理学部運営会議（構成員は、理学部長、学科長、コース長及び 2 名の教育研究評議員）において、学部長を中心に教育課程や教育方法を検討し、各コース会議での意見集約を経て、理学部全体の方向付けを行っている。また、具体的な教務事項を検討する組織として、「教育計画委員会」を設置している。「教育計画委員会」は、全学の「教育計画室」と連携を保ちながら、理学部の教育課程全般について検討を行っている（別添資料Ⅱ-I-1）。教育の質保証・質向上のために、学生による授業評価アンケートの実施と集計・分析を行い、結果を「FD 活動実施報告書」として公開している。また、各コースにおいても学生による授業評価アンケートを実施し、評価結果を各教員にフィードバックし、授業改善に反映させている（後述、P2-10 参照）。「理学部 FD（ファカルティ・ディベロップメント）委員会」（別添資料Ⅱ-I-1）は、全学の「FD 推進委員会」の下で、「教育計画委員会」と連携して、年 1-2 回 FD 研修会及び講演会を行っている（別添資料Ⅱ-I-2）。また、「FD 推進委員会」の下で、教員同士の教養教育科目の授業見学により、授業の質の保証と改善を行っている。このような内部質保証システムにより、教育の質の改善・向上を図っている。

多様な教員の確保の状況とその効果

本学の教員の出身大学は多様で、国内のさまざまな大学出身者や企業経験者、海外の大学（大学院）出身の者もあり、専門分野についても多様な教員を確保している。また、第 2 期中期目標期間中に女性教員比率が増加した（平成 21 年度 14.8%→平成 27 年度 23.3%、資料Ⅲ-I-2、P2-13）。このように、多様な教員により幅広い教育研究ができる陣容となっている。

入学者選抜方法の工夫とその効果

第 2 期中期目標として、『入学者受入れに関する目標・大学の基本理念、目的、特色等に応じてアドミッション・ポリシーを明確化し、入学者受入れを工夫する。』を掲げている。理学部では、それぞれの学科、コースのアドミッション・ポリシー（別添資料Ⅰ-5）に沿った適切な学生を受け入れるために、入学者の選抜方法として、一般入試（前期日程と後期日程）、推薦入試、私費外国人留学生入試、高大連携特別教育プログラムに基づく特別入試（本学附属中等教育学校からの入学）、帰国生入試（平成 26 年度まで）、及び第 3 年次編入学入試を実施している（別添資料Ⅰ-6）。多様な選抜を実施することにより、基礎学力、コミュニケーション能力、志望する学問分野に対する熱意や素養等について判定を行っている。最も募集人員の多い一般入試においては、大学入試センター試験及び個別学力検査を課し、高校教育における学習の達成度及び各コースが求める基礎的な学力を測っている。理学部の志願者は関西圏が多く、中部、四国、中国地方がそれに続いているが、北海道や沖縄、関東、東北からの志願者もあり、理学部入学者は全国から集まってきた（別添資料Ⅱ-I-3）。理学部では、本学附属中等教育学校の生徒を対象とした授業「アカデミックガイダンス」を行ったり、一般の小中高への出張講義や模擬授業を行って、理系人材の裾野を広げると共に、志願者の確保に努めている（別添資料Ⅱ-I-4）。平成 21 年度より実施している、本学附属中等教育学校生（女子）を対象とする特別選抜による入学者は例年理学部全体で 1-2 名ある。第 3 年次編入学試験では、毎年定員である 10 名程度を受け入れている（資料Ⅱ-I-5）。大学 2 年次修了者、高等専門学校や短期大学の卒業生など、多様な人材を受け入れており、その対応として、学科で編入生のための科目を開講したり、丁寧な面接指導を行うなど、特別な配慮を行って

る。このように理学部では、入学者選抜の方法を工夫し、多様な入学者を確保する上で効果をあげている。

(資料Ⅱ－Ⅰ－5：第3年次編入生の受入状況)

平成22年度	学科	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	数 学 科 (一般)	5	5	3	2
	物 理 学 科 (推薦)	0	0	0	0
	(一般)	2	1	1	1
	化 学 科 (推薦)	2	2	2	2
	(一般)	9	7	3	2
	生 物 学 科 (一般)	11	11	2	0
	情 報 学 科 (推薦)	1	1	1	1
	(一般)	0	0	0	0
	学部合計	30	27	12	8

平成23年度	学科	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	数 学 科 (一般)	4	4	3	3
	物 理 学 科 (推薦)	1	1	0	0
	(一般)	4	3	2	2
	化 学 科 (推薦)	3	3	3	3
	(一般)	6	6	0	0
	生 物 学 科 (一般)	8	8	3	2
	情 報 学 科 (推薦)	1	1	1	1
	(一般)	3	3	2	2
	学部合計	30	29	14	13

平成24年度	学科	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	数 学 科 (一般)	3	3	3	3
	物 理 学 科 (推薦)	0	0	0	0
	(一般)	4	4	4	3
	化 学 科 (推薦)	4	4	4	4
	(一般)	5	5	0	0
	生 物 学 科 (一般)	7	7	3	3
	情 報 学 科 (推薦)	2	2	1	1
	(一般)	4	4	2	1
	学部合計	29	29	17	15

平成25年度	学科	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	数 学 科 (一般)	4	4	4	4
	物 理 学 科 (推薦)	1	1	1	1
	(一般)	1	1	1	0
	化 学 科 (推薦)	2	2	2	2
	(一般)	2	2	0	0
	生 物 学 科 (一般)	3	3	1	1
	情 報 学 科 (推薦)	0	0	0	0
	(一般)	4	3	3	1
	学部合計	17	16	12	9

平成26年度	学科	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	数 学 科 (一般)	6	6	4	3
	物 理 学 科 (推薦)	1	1	1	1
	(一般)	3	3	2	2
	化 学 科 (推薦)	2	2	2	2
	(一般)	1	1	0	0
	生 物 学 科 (一般)	3	3	1	1
	情 報 学 科 (推薦)	2	2	2	2
	(一般)	1	1	1	1
	学部合計	19	19	13	12

平成27年度	学科	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	数 学 科 (一般)	7	7	5	3
	物 理 学 科 (推薦)	0	0	0	0
	(一般)	6	6	3	2
	化 学 科 (推薦)	0	0	0	0
	(一般)	8	8	2	1
	生 物 学 科 (一般)	6	6	1	1
	情 報 学 科 (推薦)	0	0	0	0
	(一般)	6	6	3	1
	学部合計	33	33	14	8

各年度の定員は学部全体で10名

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由) 理学部では、本学の基本理念、第2期中期目標、理学部の目的に沿って教育活動が展開されており、学科及びコースの構成、教員配置は、理学部の教育の目的を達成する上で適切であると判断される。多様な教員の確保については、特に、理学部の女性教員比率が増加したことが挙げられ、学生に身近なロールモデルを提供すると共に、教育研究活動の活性化につながっている。多様な入試を行って、多様な面から志願者の能力を判定しており、アドミッション・ポリシーに沿って適切な学生を受入れている。少人数できめ細やかな教育活動を行っており、その実態を示すデータは、各コース及び学務課で収集・蓄積され、学部長を中心に、教育の質の向上・改善に向けた組織体制が整備され、教育の充実を図るための活動が行われている。学生による授業評価やアンケートが実施され、FD研修会や講演会と共に教員にフィードバックされており、教育内容・方法の改善・向上に結びついている。これらのことから、教育の実施体制は、想定する関係者の期待を上回ると判断される。

観点 1-2 教育内容・方法

(観点に係る状況)

本学の学士課程教育は「教養教育科目」、「専門教育科目」、「キャリア教育科目」で構成されるが、理学部では、「教養教育科目」の中から保健体育科目 2 単位、外国語科目 8 単位を含む計 30 単位の履修を義務付けている。「専門教育科目」では、60～75 単位(コースによって異なる)を義務付けている。卒業資格を得たものと認定されるためには、次の表に定める各単位を含め 124 単位以上を修得しなければならない。

(資料Ⅱ-I-6：理学部規程第 4 条)

区分	学 科		数 物 科 学 科			化 学 生 命 環 境 学 科		
	基 礎 科 目 群	主 題 科 目	数 学 コース	物 理 学 コース	数 物 連 携 コース	化 学 コース	生 物 科 学 コース	環 境 科 学 コース
教 養 教 育 科 目	基礎科目群	主題科目				8 2 18	}	18
		外国語科目						
		保健体育科目						
		情報処理科目						
	教養科目群		12					
専門教育科目			60	60	60	75	75	75

理学部の「専門教育科目」には、「理学部共通科目」「数物科学科共通科目」「化学生命環境学科共通科目」及び各コースの専門科目「コース科目」がある。理学部に入学した学生は、教養教育科目で語学、社会科学及び自然科学の教養を深めた後、学部及び学科共通科目を学び、さらに各コースの専門教育科目を学ぶことになる。数物科学科では、1 年次はコースに属さず、2 年次に進む際に各コースに分かれる。化学生命環境学科では、1 年次より 3 つのコースに分かれるが、2 回生開始時と 3 回生開始時に転コースも認められている。転コースの条件は異動先のコースによって異なる。

それぞれのコースにおいて、講義科目、演習科目、実験科目は各年次にわたってバランス良く配当され、特にそれぞれの学問分野で根幹を成す授業科目は必修科目に指定されている（別添資料Ⅱ-I-7、別添資料Ⅱ-I-8）

開講している全科目についてシラバスが作成され、授業目的、学習・教育目標、授業計画及び各回の授業内容を明らかにしている。さらに、成績評価方法や評価割合等を明記している（別添資料Ⅱ-I-9）。学期初めのガイダンスでは、シラバスをもとに履修する科目を決めるように指導している。教員側は、シラバスに沿って授業を進めるように心がけている。

理学部では、どの学科においても主要講義科目に対応する演習・実習科目や実験科目がセットになって開講され、授業担当者が連絡を密に取りながら授業を進めることで、学生の習熟度が増すように配慮している。また、重要度の高い実験・実習・演習科目においては、TA を有効に配置し教育効果を高める工夫がなされている（別添資料Ⅱ-I-10）。国際的に活躍する人材を求める社会のニーズに対応し、教員の専門に関する講義「宇宙論入門」「生物環境科学特論 1～6」や、科学英語の読解とプレゼンテーションに重きを置いた演習「実践化学英語Ⅰ、Ⅱ」、「生物科学英語」「生物環境科学演習」で、複数教員による少人数授業を実施している。また、生物科学コースでは、フィールド型授業として「森林生物学野外実習」「河川生物学野外実習」「海洋生物学野外実習」「臨海実習Ⅰ及びⅡ」を実施し、必要に応じて TA や非常勤講師を活用している。卒業研究では、1 名の教員に約 2-3 名の学生が配属され、少人数教育を活かした丁寧な指導が行われている。また、理学部では、学部生を含め、学会参加者に対して旅費の一部負担を行っている（平成 27 年度実績学部生のべ 14 名に総額 174,564 円、博士課程前期学生のべ 57 名に総額 982,840 円を支援）。これにより学生のモチベーションが上がり、卒業研究のレベルの向上につながっている。

第2期中期目標に『留学生の受入れを推進する』としていることを受け、理学部では積極的に留学生を受け入れ、平成22年度から27年度では、毎年7-11名の留学生が在籍している（資料Ⅱ-I-11）。

（資料Ⅱ-I-11：理学部在籍留学生数）

	正規生		非正規生		計		合計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	
平成22年度	0	6	0	2	0	8	8
平成23年度	0	6	0	2	0	8	8
平成24年度	0	7	0	3	0	10	10
平成25年度	0	6	0	5	0	11	11
平成26年度	0	6	0	3	0	9	9
平成27年度	0	7	0	0	0	7	7
計	0	38	0	15	0	53	53

学生の能動的な学修を促すための科目を学科・コース別に設置している。特に、平成18年度から開講した理学部共通科目「サイエンス・オープンラボ」は、学生が自ら企画・立案し、小中高生や一般市民に対して、実験や実演により科学の面白さを伝えるもので、学生の自主性・自発性を引き出すと共に、コミュニケーション能力の育成とリーダーとしての資質の涵養を目指すものである。この授業の実績をもとに、平成20年度の文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム(教育 GP)」に、「地域貢献事業を活用した理系女性人材育成—学生能動参加型授業のアクティブ連鎖による理系女性人材育成—」が採択され、採択期間終了後もこの科目を継続・発展実施し、外部評価委員会からも「学生参加型の『サイエンス・オープンラボ』は興味深い取組みであり、他大学にも参考となる点が多いと思う」と評価されている（理学部「外部評価報告書」2013年）。

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）第2期中期目標に、『教育方法・学習方法に関する目標・教育効果を高めるために授業形態・学習指導法を改善する』とある。理学部では、授業形態・学習指導法を改善し、カリキュラム・ポリシーに従い、「学部共通科目」と「学科共通科目」を履修しながら段階的に専門性を深める体系的な教育課程が編成されており、履修モデルによって明確な体系が示されている。また、現代社会のニーズに対応した科目が多数開講されており、国際通用性のあるコミュニケーション能力や専門性のある英語力を身につけられる科目や、学生が能動的に参加する科目が開講されている。以上から、教育目標や授与される学位に照らして、授業科目は適切に配置され、教育課程の体系性が確保されており、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請に対応した教育課程の編成に配慮していることから、教育内容は、想定する関係者の期待を上回ると判断される。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点2-1 学業の成果

(観点に係る状況)

平成22年度から27年度における学生の卒業状況を(資料Ⅱ-Ⅱ-1)に示す。約90%の学生が4年で卒業しており(「標準在学年限以内卒業率」)、4年で卒業できなかった学生の大半が留年を経て卒業している。卒業した学生は理学士の学位を取得しており、入学者数に対する学位取得率は90%を越えている(「入学者内学位取得率」)。休学者率及び退学・除籍率は、年度によっても異なるが、数%程度であり、理由は「他大学受験」「一身上の都合」が多い。4年で卒業した学生の単位取得数の約1/3を教養教育などの専門教育外の科目が占めており、学生は専門教育科目とそれ以外の科目をバランスよく履修している。また、それぞれの学科・コースで定められた基準を満たした成績優秀者が数%から20%程度おり、3年で卒業(早期卒業)した者もいる。

(資料Ⅱ-Ⅱ-1: 卒業状況)

入学年度	卒業年度	学科	入学者数(a)	標準在学年限以内卒業			留年者数(c)	過年度卒業		学位取得率((b+d)/a)	成績優秀者		休学者		退学・除籍者	
				卒業生数(早期卒業内数)(b)	卒業率(b/a)	単位取得数平均		過年度卒業生数(H27年度末まで)(d)	過年度卒業率(d/c)		成績優秀者数(e)	成績優秀者率(e/a)	休学者数(入学からH27年度末まで)(f)	休学者率(f/a)	退学・除籍者数(H27年度末まで)(除籍者内数)(g)	退学・除籍率(g/a)
19	22	数学科	34	32	94%	136	1	0	0%	94%	2	6%	1	3%	2	6%
		物理科学科	38	32	84%	140	2	1	50%	87%	3	8%	3	8%	5 (1)	13%
		化学科	38	34	89%	137	4	2	50%	95%	3	8%	2	5%	2	5%
		生物科学科	37	30	81%	134	4	4	100%	92%	3	8%	4	11%	5	14%
		情報科学科	42	38	90%	137	0	0		90%	0	0%	4	10%	4	10%
		小計	189	166	88%	137	11	7	64%	92%	11	6%	14	7%	18 (1)	10%
20	23	数学科	35	33	94%	132	2	2	100%	100%	0	0%	1	3%	0	0%
		物理科学科	40	35	88%	142	3	2	67%	93%	5	13%	4	10%	3	8%
		化学科	43	31	72%	136	8	3	38%	79%	4	9%	4	9%	8 (1)	19%
		生物科学科	35	32	91%	132	2	2	100%	97%	5	14%	2	6%	1	3%
		情報科学科	42	38	90%	135	4	4	100%	100%	0	0%	0	0%	0	0%
		小計	195	169	87%	135	19	13	68%	93%	14	7%	11	6%	12 (1)	6%
21	24	数学科	32	29	91%	136	2	2	100%	97%	1	3%	1	3%	0	0%
		物理科学科	39	35	90%	143	4	3	75%	97%	11	28%	5	13%	1	3%
		化学科	40	31	78%	135	8	6	75%	93%	5	13%	5	13%	3	8%
		生物科学科	37	31	84%	131	3	3	100%	92%	6	16%	4	11%	3	8%
		情報科学科	47	41	87%	135	3	2	67%	91%	1	2%	4	9%	5	11%
		小計	195	167	86%	136	20	16	80%	94%	24	12%	19	10%	12	6%
22	25	数学科	30	29	97%	142	1	1	100%	100%	0	0%	1	3%	0	0%
		物理科学科	35	31	89%	142	3	1	33%	91%	5	14%	3	9%	3	9%
		化学科	37	31	84%	135	6	2	33%	89%	4	11%	6	16%	3	8%
		生物科学科	38	33	87%	131	3	1	33%	89%	5	13%	3	8%	4	11%
		情報科学科	42	40	95%	147	0	0		95%	1	2%	0	0%	0	0%
		小計	182	164	90%	139	13	5	38%	93%	15	8%	12	7%	6	3%
23	26	数学科	30	26 (1)	87%	146	3	0	0%	87%	1	3%	2	7%	0	0%
		物理科学科	36	29	81%	138	5	2	40%	86%	8	22%	3	8%	2	6%
		化学科	39	37	95%	129	1	0	0%	95%	1	3%	2	5%	2	5%
		生物科学科	37	35	95%	130	3	2	67%	100%	14	38%	3	8%	2	5%
		情報科学科	43	41	95%	132	0	0		95%	0	0%	0	0%	2	5%
		小計	185	168 (1)	91%	135	12	4	33%	93%	24	13%	10	5%	8	4%
24	27	数学科	30	28	93%	140	1	0	0%	93%	1	3%	2	7%	1	0%
		物理科学科	39	35	90%	142	3	0	0%	90%	7	18%	1	3%	1	3%
		化学科	40	35	88%	132	3	0	0%	88%	4	10%	3	8%	2	5%
		生物科学科	38	37 (1)	97%	128	3	0	0%	97%	9	24%	0	0%	0	0%
		情報科学科	43	37	86%	133	2	0	0%	86%	0	0%	3	0%	1	2%
		小計	190	172 (1)	91%	135	12	0	0%	91%	21	11%	9	5%	5	3%
合計			1136	1006 (2)	89%	136	87	0	0%	93%	109	10%	75	7%	61 (2)	5%

※同一者は重複してカウントしていない(留年者数、休学者数、退学者数)。

奈良女子大学理学部 分析項目Ⅱ

学生の資格取得状況については、(資料Ⅱ-Ⅱ-2)に示すように、学科によっても異なるが、中学校教諭一種免許状(数学または理科)を取得した学生は例年20-30%、高等学校教諭一種免許状(数学、情報または理科)を取得した学生は例年40-50%で、特に数学科での免許状取得率が高い。小学校教諭などの一種免許状を取得した学生もいる。学芸員資格も例年数%程度の学生が取得しており、生物科学科での取得率が高い。学校図書館司書教諭の単位取得者は、平成22年度から27年度では、それぞれ10名、6名、2名、4名、7名、2名となっている。

学部学生の中には学会等で発表する者もあり、第60回日本生態学会大会ポスター賞 優秀賞(平成25年度)や、第4回サイエンス・インカレ グッドパフォーマンス賞(平成27年度)を受賞している。

(資料Ⅱ-Ⅱ-2:資格取得状況)

入学年度	卒業年度	学 科	卒業者数	中学校教諭一種免許状 (数学または理科)		高等学校教諭一種免許状 (数学、情報または理科)		その他(小学校教諭など) 一種免許状		学芸員資格	
				取得者数	取得者%	取得者数	取得者%	取得者数	取得者%	取得者数	取得者%
19	22	数学科	32	20	62.5%	26	81.3%	1	3.1%	2	6.3%
		物理科学科	32	7	21.9%	15	46.9%	1	3.1%	3	9.4%
		化学科	34	2	5.9%	15	44.1%	0	0.0%	0	0.0%
		生物科学科	30	12	40.0%	16	53.3%	0	0.0%	12	40.0%
		情報科学科	38	9	23.7%	11	28.9%	0	0.0%	2	5.3%
		小計	166	50	30.1%	83	50.0%	2	1.2%	19	11.4%
20	23	数学科	33	20	60.6%	25	75.8%	3	9.1%	0	0.0%
		物理科学科	35	6	17.1%	16	45.7%	0	0.0%	2	5.7%
		化学科	31	3	9.7%	7	22.6%	0	0.0%	0	0.0%
		生物科学科	32	7	21.9%	12	37.5%	1	3.1%	8	25.0%
		情報科学科	38	6	15.8%	7	18.4%	1	2.6%	5	13.2%
		小計	169	42	24.9%	67	39.6%	5	3.0%	15	8.9%
21	24	数学科	29	18	62.1%	22	75.9%	2	6.9%	0	0.0%
		物理科学科	35	12	34.3%	24	68.6%	0	0.0%	1	2.9%
		化学科	31	5	16.1%	13	41.9%	0	0.0%	0	0.0%
		生物科学科	31	8	25.8%	15	48.4%	0	0.0%	8	25.8%
		情報科学科	41	6	14.6%	12	29.3%	0	0.0%	3	7.3%
		小計	167	49	29.3%	86	51.5%	2	1.2%	12	7.2%
22	25	数学科	29	18	62.1%	22	75.9%	4	13.8%	3	10.3%
		物理科学科	31	6	19.4%	14	45.2%	0	0.0%	5	16.1%
		化学科	31	4	12.9%	6	19.4%	0	0.0%	9	29.0%
		生物科学科	33	4	12.1%	12	36.4%	0	0.0%	11	33.3%
		情報科学科	40	11	27.5%	13	32.5%	0	0.0%	1	2.5%
		小計	164	43	26.2%	67	40.9%	4	2.4%	29	17.7%
23	26	数学科	26	23	88.5%	26	100.0%	6	23.1%	1	3.8%
		物理科学科	29	3	10.3%	11	37.9%	0	0.0%	6	20.7%
		化学科	37	3	8.1%	10	27.0%	0	0.0%	0	0.0%
		生物科学科	35	3	8.6%	11	31.4%	1	2.9%	8	22.9%
		情報科学科	41	14	34.1%	18	43.9%	2	4.9%	0	0.0%
		小計	168	46	27.4%	76	45.2%	9	5.4%	15	8.9%
24	27	数学科	28	10	35.7%	19	67.9%	1	3.6%	0	0.0%
		物理科学科	35	14	40.0%	17	48.6%	0	0.0%	2	5.7%
		化学科	35	1	2.9%	11	31.4%	0	0.0%	0	0.0%
		生物科学科	36	4	11.1%	7	19.4%	0	0.0%	3	8.3%
		情報科学科	37	8	21.6%	9	24.3%	0	0.0%	2	5.4%
		小計	171	37	21.6%	63	36.8%	1	0.6%	7	4.1%
合計			834	230	27.6%	379	45.4%	22	2.6%	97	11.6%

学業の成果に関する学生の評価

教育に関する学生からの意見聴取は、各学科で各学期末に行われる学生による授業評価アンケートによって行われている（別添資料Ⅱ－Ⅱ－3）。アンケートで指摘された問題点については教員が対策を講じている（別添資料Ⅱ－Ⅱ－4）。

在学生に対して、毎年、全学で「学業成果調査」を行っているが、平成27年度の調査では、「本学の教育を受けてあなたは色々な分野で幅広い知識が身についたと思いますか。」「本学の教育を受けてあなたは論理的思考力が身についたと思いますか。」の設問に対し、いずれも約7割以上の理学部の学生が「思う」「やや思う」と答えている。また、卒業時には、全学で「学生満足度調査」を行っている。平成27年度の調査では、入学時より卒業時の満足度が高く、理学部の学生は、専門教育に関して、「非常に満足（25.6%）」「やや満足（58.5%）」であり、合わせて84.1%の学生が専門教育に満足感をもっている。また、教養教育に関しては78.3%が、教員に関しては79.5%の学生が満足感をもっている。学業成果の達成度や満足度に関する学生の評価は高いと言える。

（水準） 期待される水準を上回る。

（判断理由） 理学部の教育目的を達成するための教育課程が適切に実施され、学生の在学中の単位取得状況は良好であり、教養教育科目と専門教育科目のバランスもよい。また、卒業時の満足度調査から、専門教育科目についても、肯定的な意見が8割を超えていることから、学生が身につける学力や資質・能力について、教育の成果や効果が上がっており、学業の成果は想定する関係者の期待を大きく上回ると判断される。

観点2-2 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

第2期中期目標として『卒業後の進路等に関する目標・現代社会が要請する新しい職業分野への進路にも対応できる専門的能力等を培う』を掲げている。また、平成22年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」に「女性の生活様式を考慮したキャリア教育」が、平成24年度文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に本学を含めた16校の共同プログラム「滋京奈地区を中心とした地域社会の発展を担う人材育成」(本学は部会のリーダー校)が採択され、これらのプログラムにより、全学的に体系立ったキャリア教育を推進している。

平成22年度から27年度の理学部卒業生の進路を(資料Ⅱ-Ⅱ-5)に示す。卒業生の50-60%が本学または他大学大学院に進学し、残りが就職・その他となっている。大学院進学率は数学科と情報科学科でやや低いが、これは教職や一般企業に就職した結果であるともいえる。卒業生の約半数が大学院に進学することは、理学部の目的(資料Ⅰ-1、P2)に合致しており、現在の日本でまだ少ない理系の女性人材を輩出することに貢献している。後述するように、国立大学法人の大学院博士前期課程(理系)に在籍する女性の約1割以上を本学の大学院生が占めており(資料Ⅲ-Ⅱ-1、P2-13)、本学理学部の卒業生が社会に果たす役割は大きい。

(資料Ⅱ-Ⅱ-5：卒業生進路)

卒業年度		卒業者数	進学			就職・その他						就職率(%)
			本学大学院	他大学大学院	進学率(%)	一般企業等		教職		公務員等		
						人数	%	人数	%	人数	%	
22	数学科	36	9	2	30.6%	15	41.7%	9	25.0%	1	2.8%	69.4%
	物理科学科	35	9	8	48.6%	13	37.1%	3	8.6%	2	5.7%	51.4%
	化学科	43	17	5	51.2%	15	34.9%	4	9.3%	2	4.7%	48.8%
	生物科学科	33	14	7	63.6%	8	24.2%	2	6.1%	2	6.1%	36.4%
	情報科学科	40	10	7	42.5%	21	52.5%	1	2.5%	1	2.5%	57.5%
	計	187	59	29	47.1%	72	38.5%	19	10.2%	8	4.3%	52.9%
23	数学科	36	10	1	30.6%	17	47.2%	7	19.4%	1	2.8%	69.4%
	物理科学科	37	12	7	51.4%	13	35.1%	2	5.4%	3	8.1%	48.6%
	化学科	37	18	7	67.6%	10	27.0%	1	2.7%	1	2.7%	32.4%
	生物科学科	34	15	4	55.9%	9	26.5%	0	0.0%	6	17.6%	44.1%
	情報科学科	39	22	1	59.0%	14	35.9%	0	0.0%	2	5.1%	41.0%
	計	183	77	20	53.0%	63	34.4%	10	5.5%	13	7.1%	47.0%
24	数学科	34	12	3	44.1%	15	44.1%	2	5.9%	2	5.9%	55.9%
	物理科学科	38	18	10	73.7%	7	18.4%	1	2.6%	2	5.3%	26.3%
	化学科	35	24	1	71.4%	6	17.1%	3	8.6%	1	2.9%	28.6%
	生物科学科	36	21	4	69.4%	6	16.7%	1	2.8%	4	11.1%	30.6%
	情報科学科	48	18	3	43.8%	26	54.2%	0	0.0%	1	2.1%	56.3%
	計	191	93	21	59.7%	60	31.4%	7	3.7%	10	5.2%	40.3%
25	数学科	36	17	2	52.8%	14	38.9%	1	2.8%	2	5.6%	47.2%
	物理科学科	37	15	8	62.2%	11	29.7%	0	0.0%	3	8.1%	37.8%
	化学科	41	23	6	70.7%	11	26.8%	0	0.0%	1	2.4%	29.3%
	生物科学科	41	22	7	70.7%	11	26.8%	0	0.0%	1	2.4%	29.3%
	情報科学科	42	20	0	47.6%	20	47.6%	0	0.0%	2	4.8%	52.4%
	計	197	97	23	60.9%	67	34.0%	1	0.5%	9	4.6%	39.1%
26	数学科	30	9	1	33.3%	10	33.3%	6	20.0%	4	13.3%	66.7%
	物理科学科	30	8	6	46.7%	13	43.3%	1	3.3%	2	6.7%	53.3%
	化学科	42	21	3	57.1%	10	23.8%	1	2.4%	7	16.7%	42.9%
	生物科学科	38	20	7	71.1%	10	26.3%	0	0.0%	1	2.6%	28.9%
	情報科学科	43	10	2	27.9%	26	60.5%	1	2.3%	4	9.3%	72.1%
	計	183	68	19	47.5%	69	37.7%	9	4.9%	18	9.8%	52.5%
27	数学科	30	14	0	46.7%	10	33.3%	5	16.7%	1	3.3%	53.3%
	物理科学科	42	12	5	40.5%	20	47.6%	0	0.0%	5	11.9%	59.5%
	化学科	39	23	5	71.8%	9	23.1%	0	0.0%	2	5.1%	28.2%
	生物科学科	41	17	8	61.0%	13	31.7%	0	0.0%	3	7.3%	39.0%
	情報科学科	41	11	4	36.6%	23	56.1%	1	2.4%	2	4.9%	63.4%
	計	193	77	22	51.3%	75	38.9%	6	3.1%	13	6.7%	48.7%
	合計	941	394	112	53.8%	331	35.2%	46	4.9%	58	6.2%	46.2%

学部卒で就職を希望する者については、就職率は、平成22年度から平成27年度では、96.7%、91.3%、95.7%、91.9%、87.6%、91.0%と、ほぼ90%以上を保っている。就職先の職種は多岐にわたり、情報通信業、学校教育関係、公務員が比較的多く、学部の専門教育を活かした分野に就職する学生が多い。具体的な就職先を以下に示す。

(資料Ⅱ－Ⅱ－6：平成27年度就職先一覧)

数学科

『三重県教育委員会(高校)』 『同志社女子中学校・高等学校』 『龍谷大学附属平安中学校・高等学校』
『大阪学芸高等学校』 『天理高等学校』
㈱南都銀行 名古屋鉄道㈱ ニチコン㈱ 光洋サーモシステム㈱ 大和証券㈱ ㈱トヨタマップマスター
鍋屋バイテック会社 KOYO 証券㈱ 日本イーライリリー㈱ ㈱資生堂

物理科学科

[国税庁大阪国税局] [大阪市]
アルプス電気㈱ 清水建設㈱ 京セラコミュニケーションシステム㈱(2) オリンパス㈱ 日本電気㈱
若築建設㈱ 学校法人河合塾 ㈱サピエント ㈱日立製作所 ㈱キューブシステム ㈱東芝 ㈱KYOSO
中部電力㈱ 三井造船システム技研㈱ ㈱東京インテリア家具 ㈱ジェイアイエヌ 新日鐵住金㈱

化学科

[八尾市] [大阪広域水道企業団] 『奈良先端科学技術大学院大学』
新日鐵住金㈱ ㈱常磐メディカルサービス エヌ・ティ・ティ・システム開発㈱ ㈱学情 フジデン㈱

生物科学科

[山梨県警察] [東浦町] [奈良県警察]
京セラコミュニケーションシステム㈱ (一財)阪大微生物病研究会 片山工業㈱ ㈱南都銀行 ダイナテック㈱
(一財)日本血液製剤機構 ㈱富士通システムズ・ウエスト ㈱新日本科学 PPD タケモトデンキ㈱ EPS㈱

情報科学科

[農林水産省近畿農政局] 『賢明学院中学校・高等学校』
㈱デンソー 大同化学工業㈱ SCSK㈱ ㈱日本総研情報サービス ㈱NTTドコモ 数研出版㈱ ㈱千趣会
富士通㈱(3) リコーITソリューションズ㈱ テクノシステム㈱ ㈱南都銀行 ㈱野村総合研究所 日本電産㈱
㈱ワークスアプリケーションズ ㈱構造計画研究所 三菱電機㈱ ㈱オリエンタルランド 八十二システム開発㈱
㈱富士通北陸システムズ 京セラコミュニケーションシステム㈱

「資料Ⅱ－Ⅱ－6」では、『』は教職、[]は公務員等に分類した。

(2)は同じ就職先に2名就職したことを表す。

就職先の関係者に対して行った意見聴取では、「とても優秀です。行動的であり、よく女子大出身者に見られる消極的態度がなく、積極的です。今後も彼女のような人材を育成していただくことを期待します。」「専門的な力はもちろんのこと、総合的な人間力に優れた人材を育成されていると感じております。」など肯定的な意見が多く見られた。

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由) 理学部の教育目的のもとに行った教育の結果、卒業者が高い就職率や大学院への進学率を示していることから、教育の目的に掲げている育成しようとする人材像等について、教育の成果や効果が上がっていると判断される。企業からの意見聴取の結果でも、理学部の目指す教育とその成果に肯定的な評価が得られている。以上のことから、進路・就職の状況は、想定する関係者の期待を大きく上回ると判断される。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

アクティブ・ラーニングの実施とその効果

「観点1-2 教育内容・方法」に述べたように、理学部では、能動的な学修に積極的に取り組み、少人数の演習科目を複数開講し、「サイエンス・オープンラボ」などで学生の自主性・自発性を引き出す学修を推進している。「自然科学考房」については、以下のように、国立大学法人評価において特筆すべきこととして評価されている。

(資料Ⅲ-I-1：国立大学法人評価)

「理学部では、数学・物理・情報科学分野の知識を持ち、真の数物連携とは何かを理解し、知識基盤社会に対応できる理系女性リーダーを育成するため、特にアクティブ・ラーニングに主眼をおき、自然現象の基礎理論を学ぶとともに、実験装置・パソコンを用いた測定・計算を体験させることを狙いとする『自然科学考房』を設置している」
 —国立大学法人評価「平成26年度に係る業務の実績に関する評価の結果について(27国評委第4号)より—

理学部女性教員比率の増加とその効果

第1期には理学部の女性教員比率は依然低いままで推移していた(平成21年度14.8%)。しかし平成21年9月に「平成25年3月までの間に理学部の女性教員比率を20%以上にするを目標とする」ことを理学部教授会で決定し、平成22年度に文部科学省「女性研究者養成システム改革加速事業」に採択され、その波及効果もあり、理学部の女性教員比率は23.3%(全学では35.0%)となった(平成27年5月1日現在)。この他、本学は、家庭生活と教育研究活動を両立するための環境整備に積極的に取り組んできた。これは、本学の第2期中期目標『社会のリーダーとして男女共同参画社会の実現に貢献し活躍する女性人材を育成する。また、女性のライフサイクルに配慮した教育研究環境の整備、女性教員比率の向上を図り、男女共同参画社会実現の先行モデルとなる。』に合致するものである。

(資料Ⅲ-I-2：理学部(平成27年度は自然科学系)女性教員比率の推移)

年度	区分	教授	准教授	講師	助教	計
平成22年度	理学部					
	男性	23	23	1	4	51
	女性	3	2	1	4	10
	合計	26	25	2	8	61
	女性教員比率	11.5%	8.0%	50.0%	50.0%	16.4%
平成27年度	自然科学系					
	男性	33	21	0	2	56
	女性	2	8	0	7	17
	合計	35	29	0	9	73
	女性教員比率	5.7%	27.6%	—	77.8%	23.3%

※各年度 5月1日現在

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

本学理学系博士前期課程在学生在が国立大学女子学生の修士課程に占める割合が、約1割(情報科学を含めた数学分野では約3割)を占めるという事実(資料Ⅲ-II-1)は、将来の理系女性研究者のかなりの割合を本学が担っていることを示している。他大学大学院に進学した学生を含めると、この割合は更に増える。これは、大学院に進学することを可能にしている学部教育のレベルの高さを示しており、本学理学部の特記すべき教育の成果といえる。

(資料Ⅲ—Ⅱ—1：本学理学系博士前期課程在学生在国立大学女子学生の修士課程に占める割合)

区分	全国計	本学計	全国比
数学	898	291	32.4%
物理学	1373	127	9.2%
化学	1931	175	9.1%
生物	2032	178	8.8%
計	6234	771	12.4%
「理学」全体(※)	12611	771	6.1%

学校基本調査(平成22年～27年)より

(※)学校基本調査の大分類「理学」全体をまとめた数値。
 なお、「理学」の中分類は数学関係(情報科学含む)、物理学関係、化学関係、生物関係、地学関係、原子力物理学関係、その他の7区分となっている。

3. 生活環境学部

I	生活環境学部の教育目的と特徴	・・・	3-2
II	「教育の水準」の分析・判定	・・・	3-4
	分析項目 I 教育活動の状況	・・・	3-4
	分析項目 II 教育成果の状況	・・・	3-12
III	「質の向上度」の分析	・・・	3-21

I 生活環境学部の教育目的と特徴

1. 教育目的

(1) 生活環境学部の教育目的

生活環境学部は、大学の基本理念と教育目標に則り、生活環境学部規程において学部の教育目的を以下のように定め、学部ウェブページで公表している（資料 I-1）。

(資料 I-1：生活環境学部の教育目的)

【生活環境学部の教育目的】 <http://koto.nara-wu.ac.jp/j-kouhyou/mokuteki.html>

生活環境学部は、生活の根幹である衣・食・住や家族の環境など、生活を取り巻く様々な生活環境を教育研究の対象とし、生活に関わる諸問題を科学的に分析し、高度な教育・研究を進め、生活診断力や生活改善力に優れ、生活者の目で見えて社会をリードできる女性専門職業人を養成することを目的とする。（生活環境学部規程第1章総則第1条の2）

(2) 各学科の教育目的

生活環境学部は、5学科から構成される（資料 I-2）。各学科は、以下のような教育目的を学部ウェブページで公表している（資料 I-3）。

(資料 I-2：生活環境学部の学科)

学科	コース
食物栄養学科	
心身健康学科	生活健康学コース スポーツ健康学コース 臨床心理学コース
情報衣環境学科	衣環境学コース 生活情報通信科学コース
住環境学科	
生活文化学科	

(資料 I-3：各学科の教育目的)

【食物栄養学科】 <http://www.nara-wu.ac.jp/life/food/>

食物栄養学科では「食」にかかわるバイオサイエンスの高度な研究・教育を行うと同時に、人間栄養学にかかわる分野を充実させ、科学概念と同時に実践的知識を身に付けた食物・栄養分野における日本のリーダーとなる専門家の育成を目的とします。

【心身健康学科】 <http://www.nara-wu.ac.jp/life/health-new/>

人の健康を、生活の基本である衣・食・住だけでなく、社会環境、生活習慣、身体、運動、こころ、発達、教育などの多様な視点・観点から総合的に学ぶことを目的としています。こころと身体の健康を定量的あるいは定性的に分析することで科学的に考える能力を養い、健康な生活のあり方を提案できる人材を養成します。

【情報衣環境学科】 <http://www.nara-wu.ac.jp/life/lics/index.html>

情報衣環境学科は、衣環境学と情報工学の基本的事項や先端技術を教育・研究し、安全で快適な衣環境の構築、モバイル装置としての衣服の構想、並びにライフ・コンピューティングによる生活改善を行うための専門知識や技術を身につけた人材の養成を目的とします。

【住環境学科】 <http://www.nara-wu.ac.jp/life/resed02/>

住環境学は、安全・安心で、快適に生活することができ、自然環境とも共生できる住環境を総合的に創り上げていくことを目指した学問体系です。住まいのインテリアから建築、都市、地域にいたる広範な領域を対象に、生活者の視点に立った質の高い生活空間の計画・設計・管理するための技術を学びます。

【生活文化学科】 <http://bunka-nwu.info/>

生活文化学科では、私たちの暮らしにまつわるほとんどすべてのことがらを学べます。複雑化・高度化・国際化した現代社会の暮らしの課題を解決していくためには、従来の学問の枠組みを超えて、より総合的にものごとを捉える「教養」が求められています。本学科では、人文社会科学の様々な学問分野の視点から、衣食住に関する文化や歴史、人びとの心理や人間関係、地域経済、法文化、福祉制度など、生活を知的に探求します。

2. 生活環境学部の特徴

生活科学・生活環境学系の学部を擁する二つの国立大学法人の一つとして、世界と日本をリードするすぐれた研究を行うと同時に、研究成果を教育に反映し、次世代の女性リーダーを育てることを使命としている。学部の目標として「生活の根幹である衣・食・住や家族の環境など、生活を取り巻く様々な生活環境を教育研究の対象とし、生活に関わる諸問題を科学的に分析し、高度な教育・研究を進め、生活診断力や生活改善力に優れ、生活者の目で見えて社会をリードできる女性専門職業人を養成すること」(資料Ⅰ-1、P3-2)を掲げている。この目標に即して、①文理融合型、②生活密着型、③実践型という学部の特徴を生かした教育を実践するべく、各学科・コースがカリキュラムに工夫をこらしている。衣(衣環境学コース)・食(食物栄養学科)・住(住環境学科)という3つの専門的な学科・コースのみならず、すべての学科・コースが生活環境学に関わる問題を教育課程に組み込んでいる。

[想定する関係者とその期待]

生活環境学部は、生活者の視点で生活環境に関わる高度な知識を持った実践的な専門職業人を養成するという教育目標を掲げている。この目標を達成するために、教育の実施体制が適切に編成され、教育内容や教育方法が適切に実施されていることが求められる。このような教育目標は、在学生・その保護者・卒業生・受験生・留学生・卒業生の就職先事業所(企業・自治体・国家など)や上司・地域社会に向けて発信され、周知されるとともに、教育目標に照らした学習成果が着実にあがっていることが期待されている。

II 「教育の水準」の分析・判定
分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

(1) 教員組織編成・教育体制

①教員組織

全学方針にもとづき、学部長のリーダーシップのもとに、教員全員が参加する教授会で十分な審議と合意形成を行い、学部の教育方針・教育課程を決定している。学部方針をふまえて、学科会議あるいはコース会議で、各学科・コースの具体的な教育内容について審議する。学科・コース間の調整は、学部長・評議員2名・学科代議員(学科長)・コース代表者より構成される代議員会で行い、教授会で審議・決定する。このほか、全学組織(教育計画室など)と協力・連携する各種委員会が学部長のもとに設置されており、全学の個別課題との調整をはかっている。

②教員数と学生定員

学部の教員総数は67名、各学科の教員数は11~17名であり、教員1名あたりの1学年学生数は約3名である。女性教員比率は47.8%と高い(資料II-I-1)。改組の結果、定員は1学年あたり35名増の175名となった(資料II-I-2)。教員1名あたりの学生数は少なく、少人数教育を実施する体制が整っている。

(資料II-I-1: 学科・コース別教員数、平成27年5月1日現在)

学科		専任教員数	うち女性教員数	女性教員比率(%)
食物栄養学科		13	8	61.5
心身健康 学科	生活健康学コース	6	3	50.0
	スポーツ健康科学コース	6	3	50.0
	臨床心理学コース	5	2	40.0
情報衣環 境学科	衣環境学コース	8	3	37.5
	生活情報通信科学コース	7	1	14.3
住環境学科		11	6	54.5
生活文化学科		11	6	54.5
合計		67	32	47.8

(資料II-I-2: 学科定員と在学者数)

()は、第3年次編入学に係る数で外数

平成27年5月1日現在

学部	学科	定員		在学者数 ()内は3年次編入者数				
		入学定員	収容定員	1年次	2年次	3年次	4年次	計
生活環境学部	食物栄養学科	35	140	39	37	39	42	157
	心身健康学科	40	80	41	41	—	—	82
	情報衣環境学科	35	70	37	40	—	—	77
	住環境学科	35	140	37	37	38 (4)	41 (3)	153 (7)
	生活文化学科	30	120	32	33	31 (1)	36 (1)	132 (2)
	小計	175	550	186	188	108 (5)	119 (4)	601 (9)
	生活健康・衣環境学科	—	80	—	—	44 (3)	48 (3)	92 (6)
	小計	0	80	0	0	44 (3)	48 (3)	92 (6)
計	175 (10)	630 (20)	186	188	152 (8)	167 (7)	693 (15)	

③全学的教育への貢献

全学的な教養教育やキャリア教育、全学的連携教育に、学部・学科として積極的に協力している。「生命・運動・健康」(心身健康学科)、高大連携科目である「ジェンダー論入門」(生活文化学科)、教養改革の一環として平成 27 年度に新設された科目群である「パサージュ」、「教養コア科目」(ジェンダーから見た人間と社会)、「アジア論入門」についても多くの学科が協力している(別添資料Ⅱ-I-3)。

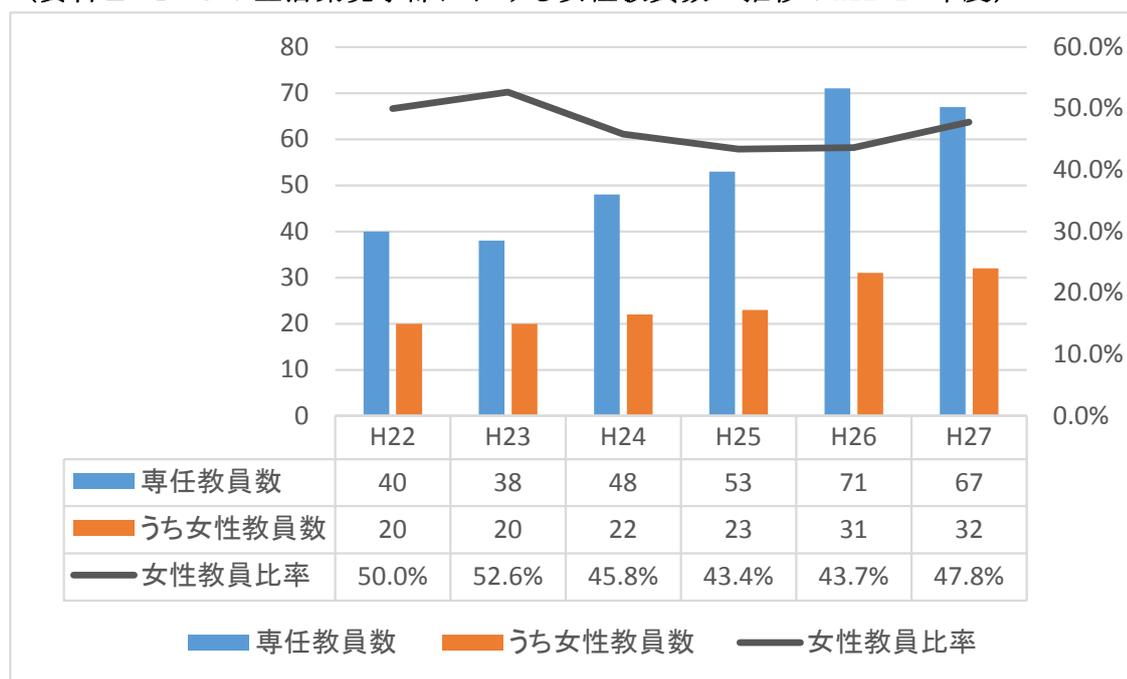
④国際交流・外部組織との連携

住環境学科では、平成 23 年度より大連工業大学(中国)および嶺南大学校(韓国)の教員と住宅照明に関する共同研究を実施している。食物栄養学科では、平成 24 年度より英国レスター大学との交流プログラムに参加し、平成 24~26 年には連続して学生 1 名を派遣した。また、自治体や他大学との連携教育を積極的にすすめている(別添資料Ⅱ-I-4)。

(2) 多様な教員の確保の状況とその効果

各学科の専門性に応じた教員を配置しており、学部の学際的性格を反映して、教員の専門分野は多様である。学生のロールモデルとするため、女性教員を積極的に採用・配置してきた。女性教員比率はきわめて高く、50%前後を推移している(資料Ⅱ-I-5)。若手教員も積極的に採用しており、職階や年齢ごとの男女比率はバランスがとれている(資料Ⅱ-I-6)。外国人専任教員はいないが、生活文化学科では、2014 年に「多文化共生論」を新設し、外国人教師 2 名が非常勤講師として担当している。

(資料Ⅱ-I-5：生活環境学部における女性教員数の推移：H22-27 年度)



(資料Ⅱ-I-6：生活環境学部専任教員の年齢構成：H27. 5. 1 現在)

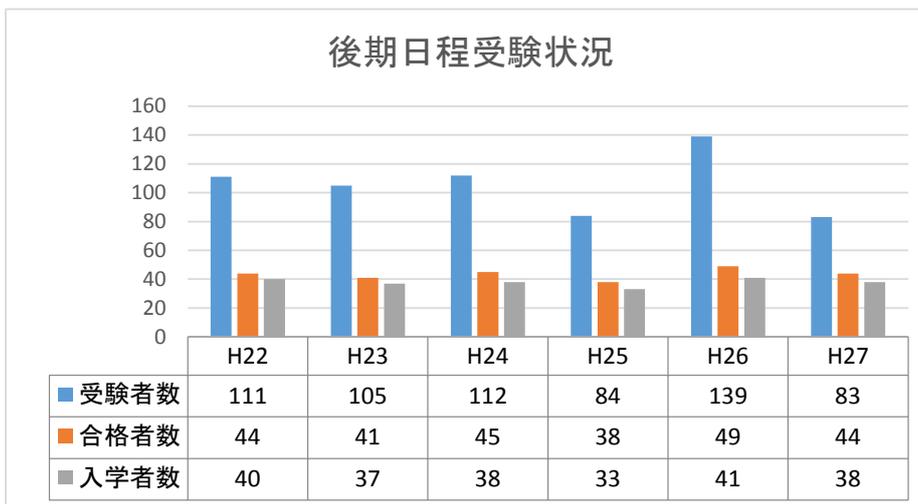
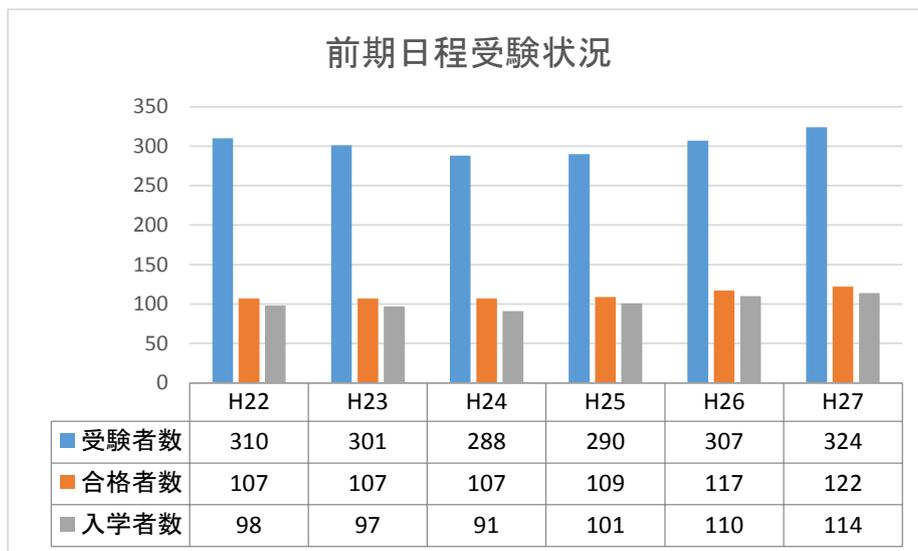
	20 歳代		30 歳代		40 歳代		50 歳代		60 歳代	
	男性	女性								
教授	0	0	0	0	3	1	12	8	2	3
准教授	0	0	3	0	5	6	4	1	2	0
講師	1	0	3	2	0	1	0	0	0	0
助教	0	4	0	5	0	0	0	1	0	0
合計	1	4	6	7	8	8	16	10	4	3

(3) 入学者選抜方法の工夫とその効果

①入学者確保と選抜

定員に対する充足率は、106.3%（平成 27 年入学）であり、全学科で定員を充足している。定員超過率はほぼ 110%を下回っており、教育に支障は出ていない。3 年次編入の充足率は、75%（平成 27 年度）でやや低い。受験状況では、合格倍率は前期日程でほぼ 2.5 倍、後期日程でほぼ 2 倍を維持しており、両日程ともに合格者のほとんどが入学している（資料Ⅱ-I-7）。選抜方法は多様であり、①一般入試（前期・後期）のほか、②推薦入試（定員 14～27 名）、③私費外国人留学生（若干名）、④編入学がある。住環境学科では、本学と工業高等専門学校 2 校との協定にもとづく編入学入試を実施して優秀な学生の確保につとめている。

(資料Ⅱ-I-7：生活環境学部一般入試（前期・後期）の受験状況：H22～H27 年度)



②社会人・留学生等の入学促進

学部の社会人入学はほとんどない。私費留学生は、毎年コンスタントに受験・入学している（資料Ⅱ-I-8）。多くの留学生は、研究生として入り、半年から1年間の教育を受けてそのほとんどが大学院に進学する。はじめて日本に来た留学生には、大学院生のチューターをつけ、学生生活になじめるよう配慮するとともに、大学院進学を見込んだ指導を施して、進学を促進している。

(資料Ⅱ-I-8:私費留学生入学実績)

私費留学生入学実績		
年度	受験者数	入学者数
H22	5	3
H23	14	2
H24	8	3
H25	11	2
H26	8	0
H27	3	1

(4) 教員の教育力向上や職員の専門性向上のための体制の整備とその効果

①FD活動

教員の教育力を向上させるために、学部のFD活動として、年1回、教授会終了後に学部FD研修会を開催している。そこでは、学科ごとに取り組んでいるFD活動の成果について報告し、情報と課題を共有している（資料Ⅱ-I-9）。学科ごとの取組も活発で、学生アンケートを活用した初年次教育の内容改善（生活文化学科）、授業録画による改善（住環境学科）など工夫をこらした取組をしている（別添資料Ⅱ-I-10）。

(資料Ⅱ-I-9) 生活環境学部 FD活動

実施年度	テーマ	報告者	参加者数
平成22年度	授業の問題点と工夫	各学科代表	45名
平成23年度	平成22年度生活環境学部授業評価アンケート等の総括と討論		42名
平成24年度	平成23年度生活環境学部授業評価アンケート等の総括と討論		38名
平成25年度	生活環境学部授業評価アンケート等の総括と討論	各学科・専攻選出の学部教育計画室員	51名
平成26年度	生活環境学部授業評価アンケート等の総括と討論		52名
平成27年度	アクティブ・ラーニングについて(講習会)		55名

②授業アンケートと教員評価

授業アンケートは、毎学期、演習・実習を除くすべての科目について実施している。アンケート結果は各教員に伝えられ、授業改善に役立てている。また、全体結果は、学部や学科のFD委員会で検討材料とし、組織としての教育改善に利用している。

教員評価は、平成20年度から毎年実施している。各教員が作成する教育研究等活動目標・計画書、各年度活動実績報告書に、教育業績や各種委員歴などを加味したうえで学部長が総合的に判断し、経費配分や期末手当に反映している。また、平成26年度以降、授業アンケートの評価が低い教員に対しては、学部長が改善を促している。

③教育・研究支援のための職員体制

奈良女子大学家政学会を組織し、学術雑誌『家政学研究』（年2回刊行）のための編集担当者（非常勤）を雇用している。また、生活文化学科では、教育・研究補助員2名（非常勤）を学科予算で雇用し、学生の教育支援と科研費管理に携わってもらっている。

(5) 教育プログラムの質保証・質向上のための工夫とその効果

改組のつど、教育プログラムの適正さについてもあわせて見直し、時代と社会にあわせたカリキュラム構築に努力している。教育内容の効果については、企業や卒業生を講師に招いた懇談会の開催、インターンシップ先との意見交換会を行っている。

平成26年、教育情報の発信をわかりやすくするために、学部ホームページ委員会を立ち上げ、学部ホームページのデザインと内容を刷新した。各学科も独自の学科ウェブサイト

を作成し、「学生のページ」をもうけて学生企画プロジェクトを紹介する（生活文化学科）など、具体的な教育情報を発信している。

平成 25 年 3 月、生活環境学部の外部評価を実施した（外部評価委員 5 名）。評価の結果は、109 頁の冊子にまとめて公表した。

(水準)期待される水準を上回る。

(判断理由)平成 22～27 年度にかけて、受験者数確保は堅調に推移しており、入学辞退者が少ないことは本学部の教育内容が受験生に評価・期待されている証と考えることができる。また、FD 活動が学部レベルでも学科レベルでも着実に行われており、授業アンケートが教育改善の資料として有効に活用されている。教育課程の方針・教育内容・教育方法について審議・決定する組織体制が整っており、学部と学科・コースの意見調整が円滑に行われている。教員は積極的に教養教育にも関与しており、専門教育と教養教育の連携が教員個人を媒介にしても貫徹されているとみなすことができる。教員組織の男女比・年齢構成・職階構成はバランスがよく、若手教員・女性教員が多いことは高く評価できる。

観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

(1) 体系的な教育課程の編成状況

①養成する能力の明示とカリキュラムの体系性

卒業要件として各学科・コースごとに、教養教育科目、専門教育科目を含め、124～130単位以上の履修を義務づけており、学部・学科の教育目的が達成できるように配慮している(資料Ⅱ-I-11)。学科ごとに冊子やウェブサイトなどでディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを明示し、カリキュラムの体系性に工夫を凝らして、学科ウェブサイトや履修ガイダンス等を通じて学生に周知している。たとえば、管理栄養士養成課程の設置(食物栄養学科)、「ブリッジ科目」の配置(心身健康学科)、「創造学」と「失敗学」の配置(衣環境学コース)、「人生」や「文化」に関わる科目配置による「学び図」の提示(生活文化学科)などである(別添資料Ⅱ-I-12)。

(資料Ⅱ-I-11：生活環境学部の卒業要件単位(平成27年度入学生))

			食物 栄養 学科	心身 健康 学科	情報衣環境学科		住環境 学科	生活文 化学科
					衣環境学 コース	生活情報通信 科学コース		
授 業 科 目	基礎科 目群	外国語科目	12	12	12	12	12	12
		保健体育科目(必修)	2	2	2	2	2	2
	教養科目群		12	12	12	12	16	16
	合計(上記2群を含む)		30	30	30	30	34	34
専 門 教 育 科 目	学部共 通科目	必修	-	2	2	2	-	-
		選択必修	6	2	2	4	6	4
	学科共 通科目	必修	-	6	10	10	-	-
		選択必修	-	-	8	10	-	-
	学科専 門科目	必修	32	-	-	-	56	6
		選択必修	24	30	-	-	16	46
	コース専 門科目	必修	-	20	24	20	-	-
		選択必修	-	8	18	28	-	-
卒業研究(必修)		12	12	12	10	12	12	
合計		74	80	76	84	90	68	
卒業に必要な残りの単位数			20	14	18	10	6	22
合計(卒業要件単位)			124	124	124	124	130	124

②教養教育と専門教育の関わりと学際的教育

文理融合型という特徴を生かし、学際的教育には熱心に取り組んでいる。たとえば、一定数の科目を「積極開放科目」として位置づけ、他学科の履修を促している。また、平成27年度以降開講した教養科目「パッセージ」と「コア科目」は専門教育への関心を高めるための科目であり、複数の学部教員が担当している。

(2) 社会のニーズに対応した教育課程の編成と実施上の工夫

「社会のニーズ」に対応する教育課程の工夫として、臨床心理学コースでは、指導時間帯の配慮や各人の希望に応じた個別指導を実施し、臨床実習やボランティアなどの連携協力のもと、現場での即戦力を備えた教育プログラムを組んでいる。衣環境学科では、「繊維製品品質管理士」、色彩検定等の積極的な資格取得をすすめて、学生の能力開発をはかっている。

「高大連携」の取り組みとしては、①附属中等教育学校における「スーパーサイエンス授業」への協力(別添資料Ⅱ-I-13)、②「アカデミック・ガイダンス」(別添資料Ⅱ-I-14)、③「キャリア・ガイダンス」(住環境学科)が特筆できる。初等中等教育現場での心

理臨床実践による連携（臨床心理学コース）も実施している。

「生涯教育」としては、放送大学への協力や各種セミナー・講演会の実施がある。臨床心理学コースでは、臨床心理相談センター開設記念セミナーを年間相当数行い（2013年度は10回、2014年度は10回、2015年度は7回程度）、広い年代からの一般参加が多い。

（3）国際通用性のある教育課程の編成・実施上の工夫

「グローバル人材養成」や「キャンパスの国際化」については、①学生の留学支援及び海外研修支援（資料Ⅱ-I-15）、②グローバル対応授業の開講（資料Ⅱ-I-16）をあげることができる。

（資料Ⅱ-I-15：学生の留学支援）

○衣環境学科	<ul style="list-style-type: none"> 平成 25 年度ノースカロライナ大学に 1 年間交換留学 平成 26 年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」に参加(平成 27 年 1 月 26 日から平成 27 年 2 月 23 日)
○生活文化学科	<ul style="list-style-type: none"> 学科教員の支援・指導による以下のような学生海外研修を実施している （*必ずしも授業と関係していないが、一部関係しているものもある）。 <p>平成 22 年 ラオスに学生 2 名 平成 23 年 インドネシアに学生 1 名・院生 1 名 平成 25 年 フィリピンとインドネシアに院生 1 名、ラオスに学生 5 名 平成 26 年 フィリピンに学生 1 名、ラオスに学生 2 名</p>

（資料Ⅱ-I-16：グローバル対応授業の開講状況）

開講学科	科目名（対象年次）	内容	実施年度・（ ）内は履修者数
生活文化 学科	フィールド英語演習（2年）＋ 生活誌演習 A（2年） （※2科目同時履修が条件）	ラオス研修 （英語利 用）	隔年開講：H22（4名）・H24（5名）・H26 （9名）
	人間関係文化論外書購読 （3年）	英語文献購 読	H22（10名）、H23（3名）、H24（11名）、 H25（14名）、H26（6名）、H27（2名）
	ジェンダー文化論演習 （2年）	英語による 授業、英文 講読発表	
	多文化共生論（2年）非常勤科 目（※H26年度から新規開講）	英語による 授業	H26（25名）：授業評価は大変良かった。 H27（8名）：2年生の英語の必修授業と 重なったため受講者が減少

（4）養成しようとする人材像に応じた効果的な教育方法の工夫

講義・演習・実習を効果的に組み合わせ、理系学科では実験や社会調査、文系学科では文献講読や社会調査の訓練も盛り込んだカリキュラムとしている。卒業論文のほか、ゼミ・レポートなどで論理的な文章を書く訓練を行っている。また、キャリア支援の取り組みを通じて、卒業生との交流機会を積極的にもうけている（別添資料Ⅱ-II-10）。

（5）学生の主体的な学習を促すための取組

①アクティブ・ラーニングの実践

各学科とも、グループワークやグループディスカッション、ディベートなどを通じて、コミュニケーション能力を高め、プレゼン能力を開発している（別添資料Ⅱ-I-17）。また「リサーチャー・カフェ」として、学生参加で障害者支援とまちづくりを考えるという実践的なプロジェクトを実施した（平成 27 年度、生活文化学科）。

②単位の実質化

単位の実質化をはかるため、評価の適正化とシラバスへの事前事後学習の明記を行った。住環境学科では JABEE 認定基準にもとづき、評価の適正化がはかられている。他学科でも、成績評価に不適切な面がないかを点検し、評価に著しい偏りがある場合には是正すること

にしたが、少人数科目が多いため、一般的な評価基準の適用は困難という面もある。

③学外研修プログラムとインターンシップの推進

学外研修は全学科で実施している。新入生合宿研修（食物栄養学科・心身健康学科）のほか、2年生以上対象の学外研修は、専門性に役立つもの（衣環境）、幅広い教養を高めるもの（生活文化）、キャリア支援をめざすもの（生活健康学）など目的は学科ごとに多様である（別添資料Ⅱ-I-18）。インターンシップにも積極的に取り組んでいる（別添資料Ⅱ-I-19）。

④学生支援

ゼミ配属以前の1～2回生についてはクラス担任をもうけ、さまざまな相談にあたっている。また、学生の学習意欲向上支援として、成績優秀者の表彰（学科表彰）、成績不振者の面談、1年生の面談を行っている（資料Ⅱ-I-20）。

（資料Ⅱ-I-20：学生支援の取り組み）

○生活文化（平成26年）

1回生全員に対して1～3人の少人数で、茶話会の形での面談をおこなった。大学生生活になじみはじめた1回生夏期休暇終了時に行うことにより、今後4年間、修学から友人関係まで含めた円滑な学生生活を送るにあたっての問題点を早期に把握し、個別にアドバイスすることができた。また教員側にとって、学生に必要な支援の形を把握することができ、学科行事運営学生組織を作るに至った。

○情報通信科学コース

生活情報通信科学コースの2年生は後期から各研究室に3～4名ずつ仮配属を行い、学習支援を行っている。

○住環境学科

学年ごとにクラス担任を、また学生一人につき専任教員2名をアドバイザー教員として配置し、学生の支援にあたる仕組みを設けている。学生全員にガイダンス資料や成績を綴るためのセルフ・ポートフォリオ（学生携帯ファイル）を配布しており、これを資料にアドバイザー教員は半期ごとに学生と面談して学生の状況を確認するとともに、必要に応じて随時学生からの相談を受けている。

○食物栄養学科

学年ごとにクラス担任を配置し、学生全員に個別面談を実施して、学生の状況を把握し、学業、学生生活全般の支援をしている。また、管理栄養士国家試験受験支援として、成績不振者の個別面談、自主学習の支援を実施している。

⑤学習環境の整備

全学科で学生が利用する共同研究室を確保し、学習の便をはかっている。また、唯一の文系学科である生活文化学科は独自の学科図書室をもち、パソコン、教員の執筆図書や推薦図書を配架して、学生に閲覧・貸出をしている。

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）実学と理論が融合した学際的・文理融合的学部ならではの取り組みが多い。すべての学科において、養成する人間像が明確に示されており、カリキュラムの体系も教育目的を達成するのに十分な内容となっている。また、卒業生や学生の交流機会が豊富に用意されていることも高く評価できる。学生の主体的参加を促すアクティブ・ラーニングの取り組みも実効性がうかがえる。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

(1) 履修・修了状況から判断される学習成果の状況(生活環境学部)

①フィードバック

学期ごとに履修単位上限をもうけて、適切な学習時間を確保できるように配慮している。4年間の学修成果となる卒業論文はすべての学科で必修とされており、卒業論文は厳正な審査で評価される。実習や演習では、学生の自己評価・学生相互の講評・教員コメント・添削指導などを複合的に組み合わせてフィードバックを行い、学習成果を高めるようにしている(資料Ⅱ-Ⅱ-1)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-1:フィードバックの取り組み例)

○レポート添削・コメント返却

・実習や演習でのレポートに対して、添削およびコメントを付して返却することで、フィードバックを行っている(スポーツ健康科学コース)。

○段階的な課題達成

・比較的簡単な必修課題と発展課題に分け、必修課題の完了で達成感を感じさせながら、意欲のある学生にはさらに発展課題に取り組むように促している(衣環境学科)。

○作品の鑑賞・学生同士の相互講評・教員コメントの複合

・実習において制作したCG作品のプレゼンテーションの回を設け、学生同士で作品を鑑賞させ合うと共に、優れている点、より改善できる点について教員からコメントを行っている(衣環境学科)。

○プレゼン報告などについて学生の相互講評

・プレゼン報告やディベートについて自己評価と学生相互講評を行う(生活文化学科)。
・演習でグループごとに読解作成した資料によりプレゼンテーションを実施する場を設け、質疑応答のみならず、相互の講評を行わせることで、より詳細な調査が必要と考えられる知見については、引用論文を掘り下げ、また他の研究を別途調査するなど、自発的に知識を深化できるよう促している(衣環境学科・生活文化学科)。

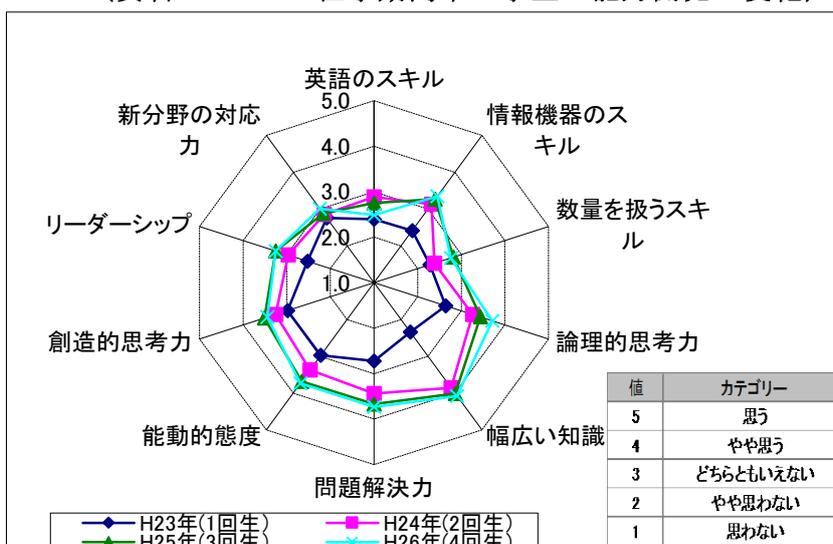
○グループ単位の実習

・実習では、グループ単位で役割分担し、学生が積極的に課題に取り組むように配慮している。実習後には、個別の振り返りを行うとともに、グループ単位のプレゼンテーションによる実習報告とその後の学生相互のディスカッション、教員によるコメントにより、基礎知識の理解度の再認識、問題発見・分析・解決能力およびコミュニケーション能力の向上を図っている(食物栄養学科)。

②学生の能力開発

能力開発の認識(平成23～26年度)によれば、学生はすべての面で能力が上昇したと認識している。「幅広い知識」の伸びが大きいのは、学際的教育の成果反映である。「論理的思考力」や「問題解決能力」も伸びが高く、種々のアクティブ・ラーニングが功を奏している。他方、リーダーシップや英語などは多少の上昇はあるものの、低いレベルにとどまっている。これらの能力の養成は今後の重要な課題である(資料Ⅱ-Ⅱ-2)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-2:在学期間中の学生の能力開発の変化)



③退学・除籍

除籍はほとんどいないが、退学は毎年一定数ある。平成26年度の退学者は7名(定員比

4%)であった(資料Ⅱ-Ⅱ-3)。入学後低年次での「進路変更」等の退学理由が多く、学習停滞による退学はほとんどない。学習や学生生活に関する学生の悩みや希望を聞く取り組みは、各学科で行っている。

(資料Ⅱ-Ⅱ-3：退学者・除籍者数：平成22～27年度)

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
退学者	4	2	8	2	7	2	25
退学者内							
食物栄養	1		1	1		1	4
住環境			4	1	2	1	8
衣環境		2	2		1		5
健康	3				2		5
文化			1		2		3
除籍者	1			1	1		3

(2) 資格取得状況・学外の語学等の試験の結果、学生が受けたさまざまな賞の状況から判断される学習成果の状況

学生の学習成果は順調であり、それは以下の3点に示すような資格取得実績、TOEICスコアに反映されている。

①管理栄養士の合格率は例年高い。健康運動指導士の受験資格は、多くは大学院生が取得しているが、学部生も毎年5人程度が取得している。繊維製品品質管理士の合格者数は順調に伸びており、平成26、27年度の合格者数は大学間で1位となった(資料Ⅱ-Ⅱ-4)。

②教員免許の取得件数は多く、おおむね各年度60件前後を推移している。1学生が複数の免許を取得する傾向が強いはいえ、1学年定員175名あたり60件は十分に多い。取得免許は家庭科(中・高)がもっとも多いが、それ以外の科目のほか、幼稚園や小学校の免許まで幅広く取得している(資料Ⅱ-Ⅱ-5)。

③TOEICあるいは実用英語技能検定による単位認定は、平成22～27年度に順調に増えている。また、高得点者が増えている(資料Ⅱ-Ⅱ-6)。

④学生の受賞歴では、住環境学科・衣環境学コース・食物栄養学科についてほぼ毎年コンスタントに受賞者がでていく(別添資料Ⅱ-Ⅱ-7)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-4：各種資格取得状況(%と明示している場合以外は人数)

年度	管理栄養士 (合格率・合格者数)	健康運動指導士 (受験資格取得者数)	繊維製品品質管理士(TEES)	色彩検定一級	カラーコーディネーター1級
H22	86.1% (31名)	16	2 (うち学部2)	1	0
H23	100% (33名)	16	4 (同3)	1	0
H24	97.4% (37名)	13	2 (同2)	2	0
H25	100% (35名)	13	4 (同3)	1	1
H26	91.7% (33名)	16	7 (同7)	4	0
H27	95.0% (38名)	13	8 (同6)	0	0

(資料Ⅱ-Ⅱ-5：教員免許取得状況：平成22～27年度)

科目	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
中学校一種(家庭)	11	25	18	21	17	16	108
高等学校一種(家庭)	16	32	28	31	25	18	150
中学校一種(保健体育)		1	2		2	2	7
高等学校一種(保健体育)		2	2	1	3	2	10
中学校一種(英語)	2			2	1	1	6
高等学校一種(英語)	1			2	1	1	5
中学校一種(国語)					1		1
高等学校一種(国語)					1		1
高等学校一種(公民)					1	1	2
中学校一種(社会)						1	1
高等学校一種(地理歴史)						1	1
小学校一種	1	2	5	2	3	2	15
幼稚園一種	2	3	4	2	2	1	14
(合計)	33	65	59	61	57	46	321

(資料Ⅱ-Ⅱ-6：TOEIC等による単位認定数：平成22～27年度)

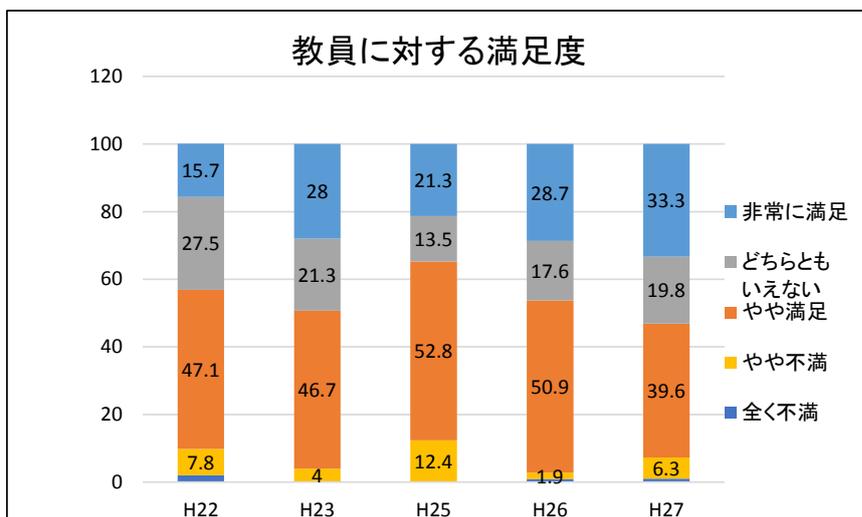
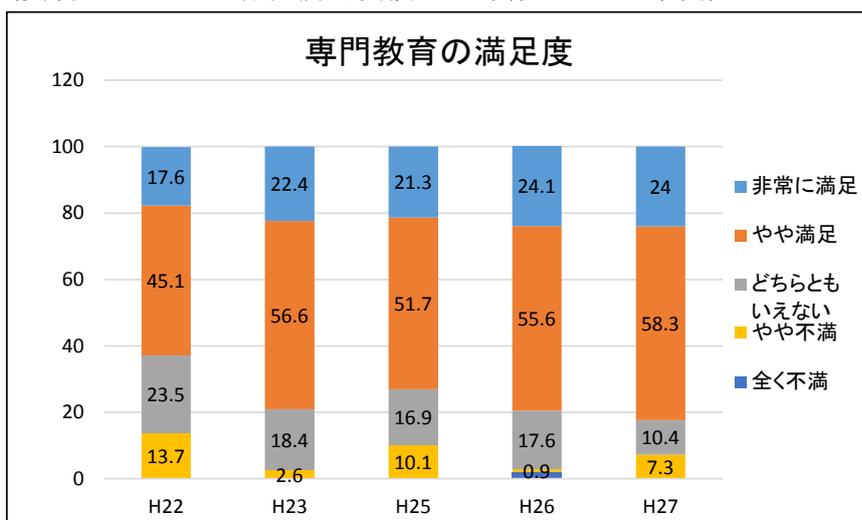
単位認定の 年度学期		H22		H23		H24		H25		H26		H27		合計
		前期	後期											
TOEIC	600-699	3	6	7	6	9	3	7	5	8	7	16	11	88
	700-799	5	2	5	2	11	2	4	5	12	8	10	6	72
	800-899	1	1	1		2		3		2	1	4	1	16
	900以上			1				1		2				4
TOEFL	68-90											1		1
実用英語 検定	準一級	1	1								1	2		5
認定科目数		15	20	18	15	35	9	24	18	24	17	56	29	280
人数		10	10	14	8	22	5	15	10	43	33	33	18	221

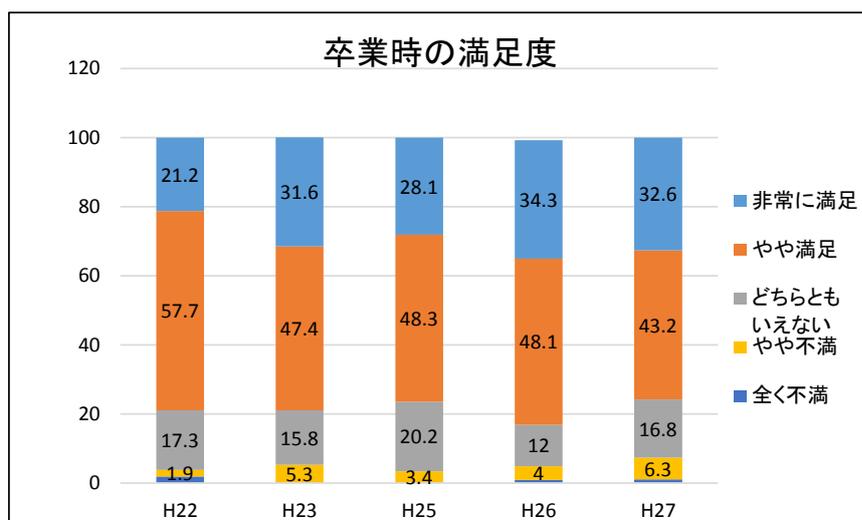
(3) 学業の成果の達成度や満足度に関する学生アンケート等の調査結果とその分析結果

学生アンケートの調査結果からは、専門教育の満足度が一般に高く（「非常に満足」24.0%、「やや満足」58.3%）：平成27年度）、上昇傾向にあることがわかる。教員に対する満足度は上昇傾向にあり、3人に1人が「非常に満足」と回答している。（資料Ⅱ-Ⅱ-8）。

入学後の満足度（65%程度）に比べて、卒業時の満足度は一様に高まっており、専門教育や教員に対する満足度の変化をやや反映しつつ、おおむね8割前後を推移している。

(資料Ⅱ-Ⅱ-8：各種満足度調査：平成22～27年度)





(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由) 専門教育 (81.3%)、教員への満足度 (72.9%)、卒業時の満足度 (75.8%) がともに高く、全体として上昇傾向にあることは、教育サービスの向上に向けた努力が学生の満足度に反映された結果であると考えられる。学科がめざす資格取得状況もきわめて順調である。TOEIC による単位認定数の増加にもあらわれているように、学部や学科の教育目的として掲げていた能力・技能の養成も成果をあげている。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

(1) 進路・就職状況その他の状況から判断される在学中の学業の成果の状況

①キャリア支援の取り組み

毎年、各学科で就職内定者による就職懇談会を実施し、学年を超えた情報交換をはかっている。また、卒業生を招き、意見交換会も実施している(資料Ⅱ-Ⅱ-9)。学生の参加率は一般に高く、積極的な意見・情報交換が行われている。衣環境コースでは、「キャリア支援研修」を毎年、実施している(別添資料Ⅱ-Ⅱ-10)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-9:キャリア支援のための取り組み)

学科・コース	取り組み	講師等	対象学年、参加者数
食物栄養学科	在学生合宿研修中の進路セミナー	キャリア・コンサルタント(学科卒業生を招聘)	2回生 ※参加率は90%以上
	女性キャリア講演会(9~11月)	3名(学科卒業生中心)	1年生~大学院生、20-40名
生活文化学科	就職懇談会(10月)3時間 ※2017年は、新しい試みとして、前半(企業)・後半(公務員・進学)に分けて実施(参加者の評判が良く、次年度からは「進路懇談会」に改める予定)	4回生の就職・進学内定者10-15名	2~3回生希望者20~30名 H27:4回生(15人)、2・3回生(29人) H26:4回生(15人程度)、3回生(20人程度) H25:4回生(15人)、3回生(20人程度) H24:4回生(10人)、3回生(20人程度)
臨床心理学コース	臨床心理士(スクールカウンセラー)講演・研修会	学校現場で活躍する臨床心理士(スクールカウンセラー)	
生活健康学コース	○3回生合宿研修において、卒業生・修了生(2,3年後)に合宿先で就職活動、就職先などに関する講演を行ってもらい、3回生との懇談会を実施。 ○卒業生・修了生による大学訪問による懇談会を毎年2月に実施(ダイキン工業) ○研究室で共同研究先を訪問し、研究室見学、女性研究員との懇談を実施(2014年:アイシン精機、2012年:東芝キャリア、関西電力、2011年東芝キャリア、2010年:東芝キャリア、ワコール)		
スポーツ健康科学コース	キャリア懇談会	卒業生を数名招いての講演会	心身健康学科1~2回生のうち希望者
衣環境学コース	キャリア研修講習会	人事教育コンサルタント(本学被服学科卒)	衣環境専攻及び衣環境コース3回生全員参加
	TES対策講座(平成25および26年度)	消費科学関係の専門家	衣環境専攻及び衣環境コース学生のうち希望者が参加

②就職・進学率

学部全体として就職率は高く、近年ではほぼ94%以上である(資料Ⅱ-Ⅱ-11)。学科による大きな差異はなく、どの学科も就職率は高い。大学院への進学率は学部全体で約25%(平成27年度)である(資料Ⅱ-Ⅱ-12)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-11:生活環境学部の就職率の推移:平成20~27年度)

年度	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
就職率	95.7%	88.7%	89.5%	94.5%	94.3%	94.5%	98.3%	93.9%

(資料Ⅱ-Ⅱ-12：就職・進路の状況：平成27年度)

平成28年5月1日現在

学 科	平成27年度卒業生数			就職希望				進学			その他 (人)	不明 (人)
	9月 卒業 (人)	3月 卒業 (人)	合計 (人) <a>	就 職 希望者 数(人) 	就職者 数(人) <c>	就職率(※)		大学院 (人) <f>	学部等 (人)	その他 (人)		
						本学方式 <d>	大学通信 方式 <e>					
食物栄養学科	0	40	40	30	29	96.7%	87.9%	7	1	1	1	0
生活健康・ 衣環境学科	1	48	49	37	35	94.6%	92.1%	11	0	0	1	0
住環境学科	0	38	38	22	22	100.0%	100.0%	16	0	0	0	0
生活文化学科	3	31	34	25	21	84.0%	75.0%	6	0	0	3	0
	4	157	161	114	107	93.9%	88.4%	40	1	1	5	0

その他には、進学希望者の進学先未決定者、就職も進学も希望しない者を含む。

就職率の算出方法

・本学方式 就職率<d>=就職者数<c>÷就職希望者数

・大学通信方式 就職率<e>=就職者数<c>÷(卒業生数<a>-大学院進学予定者数<f>)

大学通信方式は、「㈱大学通信」が行うアンケート調査(対象:全国の国公立大学。時期:5月、12月)で採られる算出方法で、その結果が「サンデー毎日」「週刊東洋経済」「大学ランキング(朝日新聞出版刊)」に掲載されるものです。

③就職先の特徴

就職先は、食物は食品、衣環境は繊維、住環境は建設業など、学科の特徴を反映した就職先となっている(資料Ⅱ-Ⅱ-13)。学部全体では就職先は各分野に及んでおり、製造業40名、公務員10名、学術・技術専門職12名が多い(別添資料Ⅱ-Ⅱ-14)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-13：就職先：平成27年度)

区 分	食物栄養 学 科	生活健康・衣環境		住 環 境 学 科	生活文化 学 科	小 計
		生活健康学	衣環境学			
建設業				5		5
製造業	食料品・飲料・たばこ・飼料	14	3			17
	繊維工業・衣服・その他の繊維製品		2	9		11
	化学工業、石油・石炭			1	1	2
	はん用・生産用・業務用機械器具				2	1
	電子部品・デバイス・電子回路	2				2
その他			1	4		5
情報通信業		2		1	3	6
卸売・ 小売業	卸売業	1		1	1	3
	小売業	2	1	2	1	6
金融・ 保険業	金融業	1	1	1	2	5
	保険業	1	1	1	3	6
学術研究、 専門・技術 サービス業	学術・開発研究機関					0
	法務					0
サービス業	その他の専門・技術サービス業	2	1	3	5	12
宿泊業・飲食サービス業				1		1
生活関連サービス業		2			2	4
教育、学習 支 援 業	学校教育	1			2	3
	その他の教育、学習支援業				1	1
医療・福祉業	医療業、保険衛生	2	1			3
	社会保険・社会福祉・介護事業	2				2
公務員	国家公務関係		1			1
	地方公務関係	2	2		2	9
未 定 者 等	1	1	1	0		7

(2) 在学中の学業の成果に関する卒業・修了生及び進路先・就職先等の関係者への意見聴取等の結果とその分析結果

①卒業生アンケート結果から

平成16-21年卒業生(第1期中期計画)・平成22年以降卒業生(第2期中期計画)の3者を比較すると、学業成果の結果を肯定する回答として顕著な伸びを示しているのは「リーダーシップ」である。これは、「リーダー育成」という学部目標が達成されつつあることを示している。「専門分野」「問題解決能力」「能動的態度」も伸びており、専門教育やアクティブ・ラーニング授業の効果があらわれていることが読み取れる。とくに「専門分野」における学業成果はきわめて肯定的にとらえられている(資料Ⅱ-Ⅱ-15)。

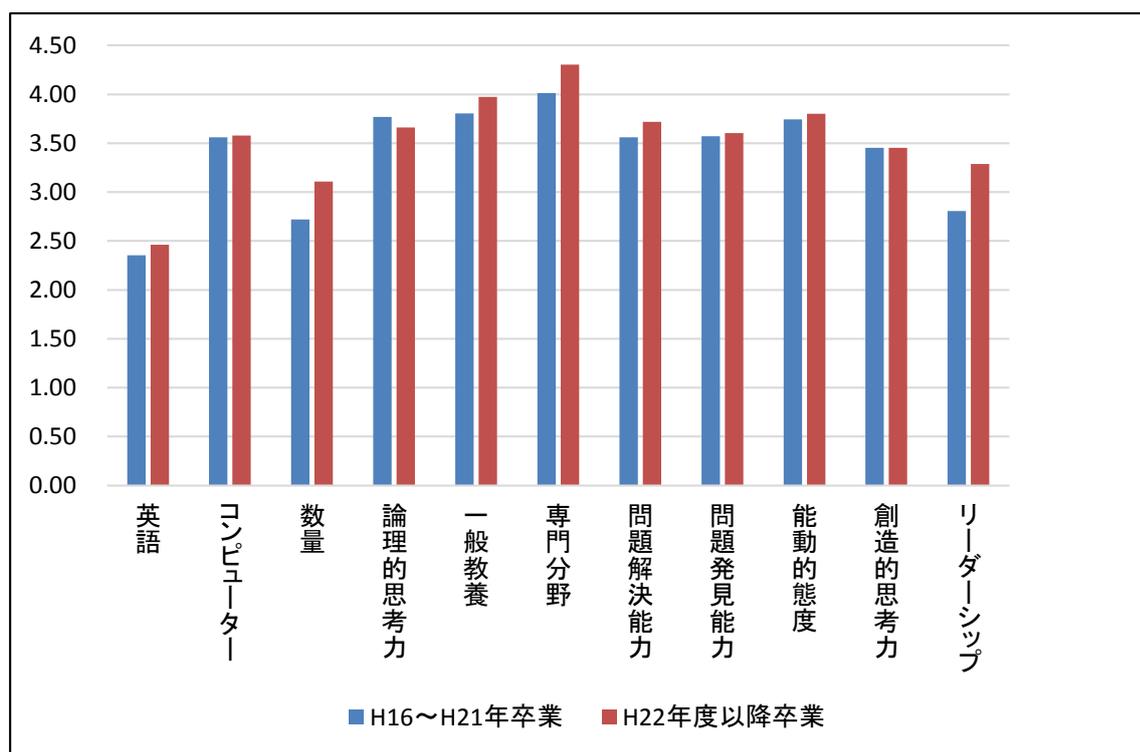
学業成果としての能力開発に肯定的な割合(「そう思う」と「やや思う」の合計)が50%を超える項目は、11項目中8項目に及ぶ。「コンピューター」(65%)、「論理的思考力」67%、「一般教養」81%、「専門分野」91%、「問題解決能力」68%、「問題発見能力」63%、「能動的態度」66%、「創造的思考力」57%である。「リーダーシップ」は49%であったが平成16~21年卒業生が28%であったことを考えると大幅に伸びている(資料Ⅱ-Ⅱ-16)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-15：学業成果に関する卒業生アンケート結果：平成27年実施)

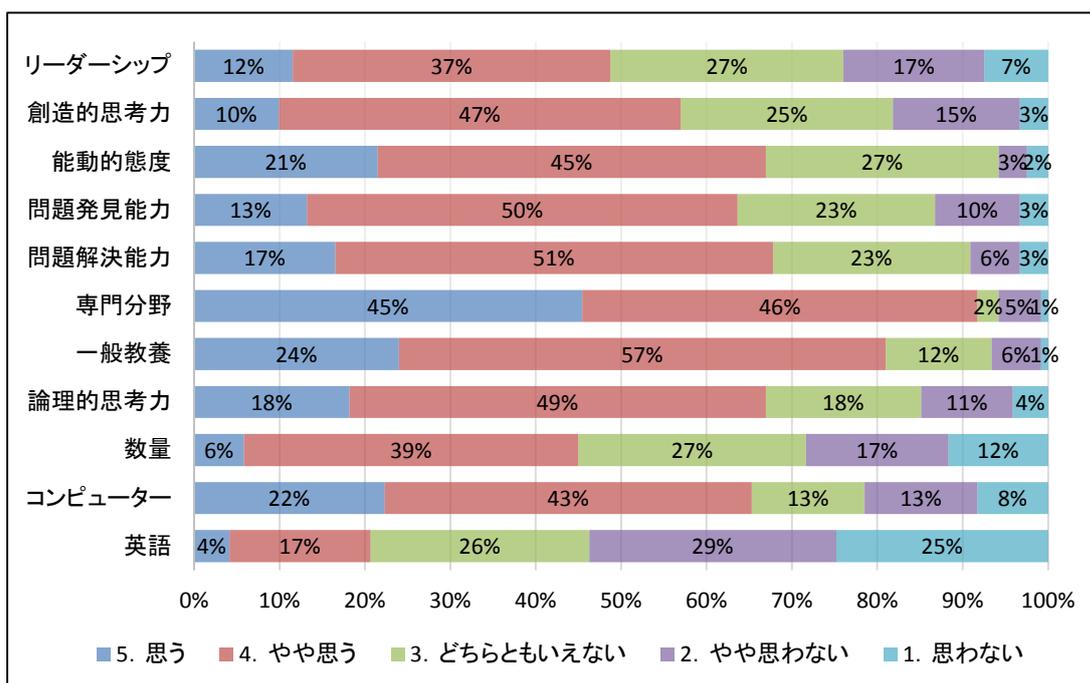
【凡例】H16~H21年卒業生(N=82)、H22年度以降卒業生(N=121)、総数(N=203)

質問：下記の能力は身についたと思うか？

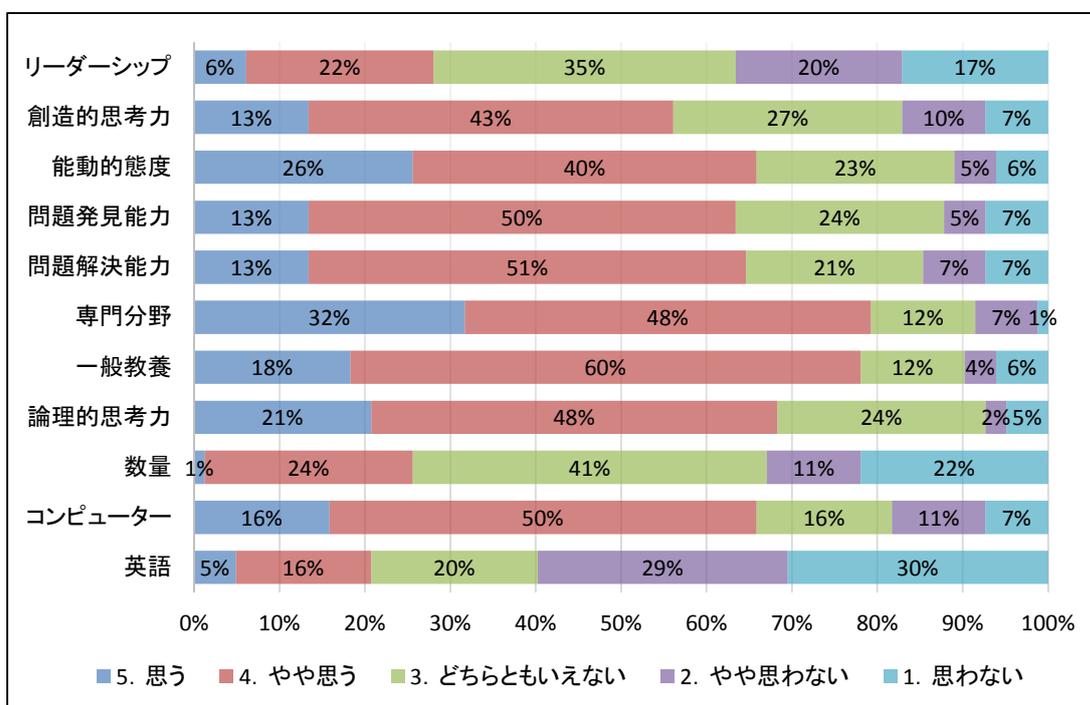
回答選択肢：5(そう思う)・4(やや思う)・3(どちらともえない)・2(やや思わない)・1(そう思わない)



(資料Ⅱ-Ⅱ-16：学業成果としての能力発展に対する評価（平成27年実施卒業生アンケート調査結果から：平成22年度以降卒業生）（N=121）



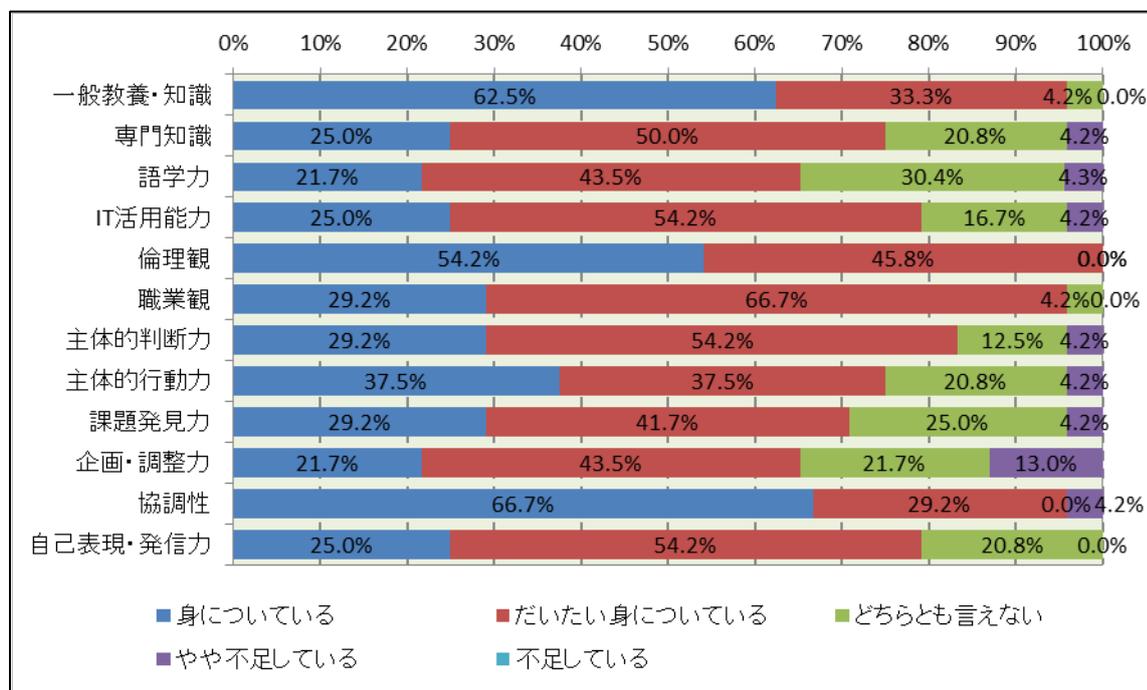
(参考) 平成16～21年卒業生 (N=82)



②就職先調査内容

就職先アンケート結果では、一般教養・知識と協調性については高い評価を得た。しかし、語学力・企画力ではなお課題を残していることも判明した（資料Ⅱ-Ⅱ-17）。

（資料Ⅱ-Ⅱ-17 就職先アンケート結果 2015年調査）



(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由) 就職率は高く、進路先も学科の教育内容を反映したものが多く、進学率は25%と決して高いとは言えないが、これは就職率の高さと連動していると考えられる。各学科が実施している就職内定者や卒業生との懇談会が効果的に作用していると言えよう。卒業生の意見調査は、在学中の高い満足度を示している。また、就職先の評価も高い。卒業生アンケートからは、学部の教育目的に掲げた能力の顕著な向上が確認できる。これらのことを総合すると、学生の進路・就職に関して、教育成果が十分に上がっていると判断できる。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

①教育組織の再編による教育目的の合理的明示

平成18年の改組により4学科制になったが、「生活健康・衣環境学科」は、異なる領域が一学科に入っており、教育目的がわかりにくい面があった。しかし、平成26年の改組によって5学科制に移行し、学科・コースごとの教育目的が明確化した。教育組織の再編によって教育目的を合理的に明示できるようになった点で、質の向上があったと判断できる。

②アクティブ・ラーニングや参加型授業の増加

学部としても学科としても自覚的にアクティブ・ラーニングの導入に努力した結果、科目の新設（パサージュ・教養コア科目など）や既存科目の再編（生活文化学入門など）により、該当科目数が増えた。また、既存科目でも学生参加型の授業が増加した。学習のフィードバックも複合的に行われている。学生の主体性を促す授業取り組みが増加したという点で、質の向上があったと判断できる。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

①学習成果としての能力の向上

卒業生アンケートが示すとおり、多くの能力について「身についた」と肯定的に回答する卒業生が多く、しかも、その比率が第1期よりも上昇している。「専門能力」についても肯定比率が上昇していることに加え、「リーダーシップ」の急速な伸びや、「問題解決能力」などの主体的な学びを問う項目での肯定比率の高さなどを考慮すると、学習成果として能力開発に著しい質の向上があったと考えることができる。

他方、TOEICによる単位認定制度の浸透によって学生のインセンティブが高まり、単位認定数が増えたことは、学生の英語力向上を促すことにもつながり、TOEICの点数は上昇傾向にある。また、グローバル対応授業が増え、学生参加者も増えている。グローバル化に対応した英語力の向上がうかがえるという点で、教育の質が向上したと判断できる。

②進路・就職・資格取得状況の良好さ

学生の就職率は、平成26年に近年最高の98.3%を記録するなど、堅調に推移している。また、学科の専門性を生かした就職先が多く、「専門的職業人」を養成するという学部の教育目標は十分に達成されている。一方、管理栄養士などの資格取得も順調で、教員免許取得は家庭科以外に多様化している。公務員もコンスタントに採用されている。このような進路・就職・資格取得状況の良好さは、各学科による充実したキャリア支援の産物である。キャリア支援の取り組みに対する在学生の評価は一様に高く、支援が効果を上げているという点で、質の向上があったと判断できる。

4. 人間文化研究科

I	人間文化研究科の教育目的と特徴	・・・	4-2
II	「教育の水準」の分析・判定	・・・	4-4
	分析項目 I 教育活動の状況	・・・	4-4
	分析項目 II 教育成果の状況	・・・	4-10
III	「質の向上度」の分析	・・・	4-18

I 大学院人間文化研究科の教育目的と特徴

1. 教育目的

大学院人間文化研究科では、次の4つの基本理念を掲げている。

1. 研究教育の学際化、 2. 研究教育の高度化、
3. 研究教育の個性化、 4. 女性の人材育成と社会への貢献

これらの基本理念のもと、博士前期・後期課程における目的を以下のように定めている。

博士前期課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要的能力を備えた人材を養成することを目的とする。

博士後期課程は、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を備えた人材を養成することを目的とする。

この目的に沿って立てられた、教育課程・教育内容に関する人間文化研究科の中期目標「専門的能力のみならず、実践力を持つ高度専門職業人・研究者として男女共同参画社会をリードし活躍できる女性人材育成のための教育を実施する」を実現する大学院教育を行なうために、大学院の入学、教育、修了に関するアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを設け、必要に応じて見直しを行っている（別添資料I-1）。

2. 特徴

大学院は、平成15年までの2度の改組により、博士前期課程12専攻、後期課程が4専攻の構成となっている（資料II-I-1、P4-4）。その後も、一部専攻の改組が行われ、学部、博士前期課程のコースや専攻と後期課程の連携が円滑になり、文学系、理学系、生活環境学系を基盤とする幅広い分野の教育研究の実施を可能にしている。また、更なる特徴として以下の事業の実施があげられる。

1) 第一期中期計画期間中の平成20年度に採択の「組織的な大学院教育改革推進プログラム」に係る事業

「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」（人文社会系）及びその後継プログラムにおいて、高度専門職業人の養成を念頭に、主として博士前期課程の教育の実質化を図るために、従来なかった実践的な授業科目をカリキュラムに取り入れ、キャリア形成を支援している。

「理系の実践型女性科学者育成」（理工農系）及びその後継プログラムにおいて、大学院の教育課程を基盤として種々の教育科目群を設定し、院生の指導を適切なプロセス管理の下で進め、専門知識や能力を実践の場で活用し、幅広く社会で活躍できる理系の実践型女性科学者の育成を行っている。

2) 平成22年度採択の「女性研究者養成システム改革加速」（平成23年度より「女性研究者養成システム改革加速事業」として継続）に係る事業

「伝統と改革が創る次世代女性研究者養成拠点」により女性研究者養成システム改革推進本部を設置し、女性人材育成機関として、女性若手研究者の研究の質及びスキルの向上などの様々な取組を実施し、理工系分野の女性教員数の増加を図っている。

3) お茶の水女子大学と共同で平成26年度採択の「国立大学改革強化推進補助金」に係る事業

「大学の枠を越えた科学技術創造立国の中核となる理工系女性リーダー育成拠点の構築」により、両大学の強み・特色を結合し、以下の2本柱の取組の実施・連携強化により、科学技術創造立国の中核となる理工系女性リーダー育成拠点の構築を図る。まず、平成27年度に「理系女性教育開発共同機構」を設置し、理系人材育成教育プログラムを全国に普

及・展開し、理系女性の質・量双方の向上を図っている。また、平成 28 年度設置予定の「生活工学共同専攻」により、女性の強みを活かした生活者の視点からの工学を推進し女性研究者の育成を行う。

[想定する関係者とその期待]

大学院在學生やその保護者からは、女子の最高教育機関として以下のことが期待されている。

1. 教員あたりの学生数が博士前期課程 2 名、後期課程 1 名と、極めて少ないという利点を生かした、きめ細かな教育及び研究指導
2. 文学系、生活環境学系、理学系を基盤とする高度な専門教育及び分野を越えた複合的学際的教育
3. 課題設定能力とその解決のための実践能力の習得
4. 以上を実現するために最適な、教育方法、教育実施体制

また、修了生や就職先などからは、学部より専門性の高い素養、課題設定能力及び問題解決能力の習得が期待されている。

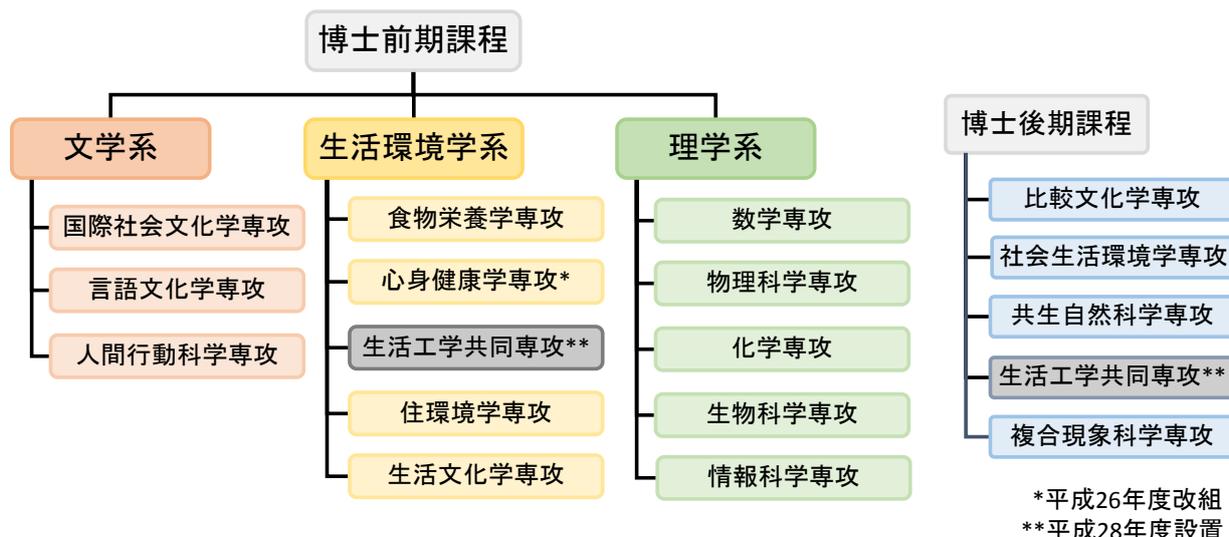
II 「教育の水準」の分析・判定
分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

博士前期課程では、学部の専門性を発展させるために、文学部、理学部、生活環境学部
に接続する形で、それぞれ3専攻、5専攻、4専攻体制としている。博士後期課程では、
専門性の更なる高度化、個性化のみならず、学際性を図るために前期課程の専攻の一部を
融合し、4専攻となっている(資料II-I-1)。

(資料II-I-1:大学院の構成)



以上の専攻の構成により、大学院の基本理念である研究教育の学際化、高度化、個性化、及び女性の人材育成と社会への貢献を実現する教育実施体制をとっている。

第二期中期計画の中的主要な改革は以下のとおりである。

- 1) 博士前期課程文学系の国際社会文化学専攻に、平成24年度に新たに文化メディア学コースを設置した。
- 2) 生活環境学系の「生活健康・衣環境学専攻」を、平成26年度より「心身健康学専攻」に改組して新たに臨床心理学コースを設置し、コース修了により臨床心理士受験資格が取得可能となった。
- 3) 平成28年度のお茶の水女子大学と共同の生活工学共同専攻設置に向けた準備作業を実施した。

多様な教員の確保の状況とその効果: 女性教員の積極的登用(資料II-I-5、P4-5)や、学長主導による教員採用など、多様な教員の確保や、研究領域の拡大、適切な人員配置に伴う教育の一層の充実を図った。

多様な入学者の確保: 推薦入試制度や秋季入学制度の拡大、入試時期の見直しや新研究分野の開設、長期履修学生制度の改善等を行っている。また、平成23年度から大学院のオープンキャンパスを開始し、研究分野の情報提供を行った(別添資料II-I-2)。このように入学者選抜の工夫が行われ多様な入学者確保の方策を講じた。

教育実施体制強化: FD委員会では、学生の声をフィードバックするために、博士前期及び後期課程に在学する学生と担当する教員に対し、授業、学位論文研究、研究教育環境、指導体制及び支援体制等についてアンケートを実施し(別添資料II-I-3)、研究科の各種会議で改善すべき課題を周知するとともに、重要事項をFD研修会のテーマとしてとりあげた(別添資料II-I-4)。また、TA実施報告システムを導入し、実施報告

奈良女子大学人間文化研究科 分析項目 I

書を前期・後期の2回提出させ、その集計・分析を全学のFD活動実施報告書にまとめるとともに、例えばTAの配置人数や業務量の科目によるアンバランス、TA配置対象科目などの諸課題を整理し、PDCAサイクルを稼働させて課題の解決を図り、教育体制、教育内容の質保証・質向上のための工夫を行った。

女性教員比率：人間文化研究科の担当教員数は、平成27年5月1日において博士前期課程担当192名、博士後期課程担当153名であり、そのうち女性教員の人数と比率は、資料Ⅱ-I-5のようになっている。第一期の現況調査表によると25%となっており、それと比較して、前期課程31.3%、後期課程26.1%でいずれも高い比率となっている。前期課程において分野別にみると、人文系29.8%、理学系23.0%、生活環境学系42.6%である。参考として、国立大学の学部・大学院の教員数（助教以上）を示す（別添資料Ⅱ-I-6）。国立大学の女性教員の比率は、人文科学23.7%、社会科学17.0%（両者を合わせると20.2%）、理学7.2%、家政56.3%となっており、これらに比べると当大学院前期課程における比率は、人文系、生活環境学系では国立大学の平均値とほぼ同じであるが、もともと女性教員の少ない理学系では平均値より3倍高い値となっている。

（資料Ⅱ-I-5：教員構成（平成27年5月1日））

【博士前期課程担当】

区分	教授	准教授	講師	助教	合計	女性教員比率
文学系専攻	29	25	2	1	57	29.8%
うち女性教員	7	9	1	0	17	
理学系専攻	36	29	0	9	74	23.0%
うち女性教員	2	8	0	7	17	
生活環境学系専攻	31	21	7	2	61	42.6%
うち女性教員	14	7	3	2	26	
合計	96	75	9	12	192	31.3%
うち女性教員	23	24	4	9	60	
女性教員比率	24.0%	32.0%	44.4%	75.0%	31.3%	

【博士後期課程担当】

区分	教授	准教授	講師	助教	合計	女性教員比率
比較文化学専攻	17	11	0	0	28	39.3%
うち女性教員	5	6	0	0	11	
社会生活環境学専攻	25	14	0	0	39	30.8%
うち女性教員	9	3	0	0	12	
共生自然科学専攻	32	18	0	0	50	24.0%
うち女性教員	8	4	0	0	12	
複合現象科学専攻	20	16	0	0	36	13.9%
うち女性教員	1	4	0	0	5	
合計	94	59	0	0	153	26.1%
うち女性教員	23	17	0	0	40	
女性教員比率	24.5%	28.8%	0.0%	0.0%	26.1%	

学生支援：成績の優秀な学生を、教員の研究プロジェクトにRAとして採用している。

学生数・少人数教育：資料Ⅱ-I-7のようになっている。教員一人当たりの学生数は、博士前期課程で2.0名、博士後期課程で1.0であり、少人数教育を実現している。平成27年の入学者定員充足率は、博士前期課程で102%、博士後期課程で107%である。

(資料Ⅱ－Ⅰ－7：学生数 (平成 27 年 5 月))

	入学定員	収容定員	現員
博士前期課程	192	384	392
博士後期課程	50	150	160

博士後期課程では1、2年次に比べ3年次の学生が多いという状況を鑑みて、次のような学生定員の見直しが行われた。これは、平成 28 年度から実施している(資料Ⅱ－Ⅰ－8)。

(資料Ⅱ－Ⅰ－8 学生定員の見直し)

博士前期課程	変更前	変更後
言語文化学専攻	24	18
人間行動科学専攻	18	16
食物栄養学専攻	11	13
心身健康学専攻	25	18
住環境学専攻	11	13
化学専攻	14	20
生物科学専攻	16	20
生活工学共同専攻 (※)	—	7

博士後期課程	変更前	変更後
比較文化学専攻	12	10
共生自然科学専攻	15	8
複合現象科学専攻	8	3
生活工学共同専攻 (※)	—	2

(※) 平成 28 年 4 月設置

以上の学生定員の配置により、定員充足率の向上を図っている。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由) 大学院前期課程は学部へ接続する形で専門性を深化させ、後期課程は専門性の更なる個性化、高度化に加え、学際化推進のために、分野を融合した専攻を含む4専攻となっている。そして、女性教員の積極的登用など学長主導人事などにより多様な教員の確保が行われた。また、改組による新たなコースの設置、秋季入学制度や長期履修学生制度の改善、オープンキャンパスの実施などにより、継続的な入学者選抜に係る工夫を行った。その結果、臨床心理学コースや文化メディア学コースなどの新分野への学生の進学、多様な学生の受け入れが促進され、ミッションの再定義における機能強化研究分野の充実等が図られた。また、少人数教育を行うのに十分な教員数となっている。更に、教員、学生を対象にしたアンケート調査などにより、PDCA サイクルを稼働させ、教育の質の保証とその向上が行われた。以上のことより、教育実施体制は、想定する関係者の期待を上回ると判断される。

観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

人間文化研究科では基本理念、中期目標に沿った教育目的を達成するために（P 4-2 参照）、中期計画において、教育課程・教育内容に関する次のような具体的方策をあげている。

- ・多様な教育需要に応じた履修コースの設定、複数教員指導体制、弾力的な修業年限等の教育システムの改善等を引き続き実施する。
- ・学際的応用力、実践力を培う科目を配置するなど高度専門職業人育成に対応した教育を充実する。
- ・専門知識を身につける科目、広い視野を身につける科目、キャリア形成を支援する科目、分野別外国語力を培う科目、論文作成を指導する科目等を設定するなど科目の役割を明確にする。

体系的教育課程：具体的には、以下で記載するように体系的な教育課程を編成している。

博士前期課程においては、専修系（高度な専門的能力養成）と複合系（幅広い視野を備えた多様なタイプの人材養成）を設けている。更に、複合系の充実のために、第二期において、「スポーツ・健康・心」領域に新たな分野（臨床心理学）を設ける等、多様な教育需要に応じた履修コース（分野）の充実を図った。（資料Ⅱ-I-9）

(資料Ⅱ-I-9：博士前期課程複合系の履修コース（分野）の例)

「ジェンダー論・女性学」「エコシステム・環境論」「社会・環境システム」 「比較文化情報」「人間」「スポーツ・健康・心」「共生文化社会」 「生活科学」「複合現象・情報」

博士前期課程及び博士後期課程ともに、学位論文執筆の際に主指導教員と副指導教員による複数教員指導体制をとり、 Semesterごとのガイダンスや、年度初めの主指導教員による前期及び後期毎の「研究指導計画書」の学生への明示、そのコピーの大学への提出を義務付けた。特に博士後期課程では、報告会などの実施、主指導教員によるガイダンス実施状況報告書及び現況報告書の提出等で、学生指導体制の実質化を図っている（別添資料Ⅱ-I-10）。また、長期履修学生制度においては、申請条件として病気の項目を追加する等、弾力的な修業年限の設定の改善を行った。

社会のニーズに対応した教育課程の編成・実施上の工夫：社会のニーズに対応するために、平成 26 年度に心身健康学専攻に「臨床心理学コース」を設けた。また、「組織的な大学院教育改革推進プログラム」に係る「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」（人文社会系）、「理系の実践型女性科学者育成」（理工農系）、及びそれらの後継プログラムにおいて、科目群を設け、科目の役割を明確化し、教育活動も充実させてきた（資料Ⅱ-I-11）。

(資料Ⅱ-I-11：「組織的な大学院教育改革推進プログラム」及びその後継プログラムの博士前期課程開講科目（平成 27 年度）)

「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」（人文社会系）及びその後継プログラム 「専門応用英語」、「プレゼンテーション演習」、 「インターンシップ専門実習（国際）」、「インターンシップ専門実習（文化）」 「理系の実践型女性科学者育成」（理工農系）及びその後継プログラム 「女性先端科学者セミナーⅡ」、「双方向インターン実習Ⅱ」、 「プロジェクト企画運営実習Ⅰ」、「プロジェクト企画運営実習Ⅱ」
--

さらに、その考え方を研究科全体に広げ、博士前期課程及び博士後期課程において授業科目を専門群、実践群、キャリア形成群、論文等作成群に分けて、教育内容に応じた学習指導を行うよう工夫し、高度専門職業人育成に対応した教育を充実した（資料Ⅱ-I-12）。

(資料Ⅱ－Ⅰ－12 専攻別の授業科目数(大学院規程より集計))

専攻		専門群	実践群	キャリア形成群	論文等作成群
博士前期	国際社会文化学専攻	90	11	6	2
	言語文化学専攻	86	0	0	2
	人間行動科学専攻	80	9	6	2
	食物栄養学専攻	31	0	0	2
	生活健康・衣環境学専攻	39	0	0	2
	住環境学専攻	24	5	6	7
	心身健康学	66	0	0	3
	生活文化学専攻	21	2	6	1
	数学専攻	30	6	4	4
	物理科学専攻	63	6	4	6
	化学専攻	67	6	0	6
	生物科学専攻	62	0	0	4
情報科学専攻	56	6	4	4	
博士後期	比較文化学専攻	83	0	0	1
	社会生活学専攻	117	0	5	1
	共生自然科学専攻	108	2	0	1
	複合現象科学専攻	98	3	8	1

諸外国の高等教育機関との連携：レスター大学（連合王国）との交流プログラムや大連理工大学（中国）等との共同研究などを通じて、学生を外国に派遣し教育研究活動へ参加させている（資料Ⅱ－1－13）。また、ダブルディグリー締結大学と学生の交換留学を行い、博士学位取得者を出すなどグローバル化を推進した（資料Ⅱ－Ⅰ－14）。

(資料Ⅱ－Ⅰ－13：連携大学)

インドネシア	ガジャマダ大学	アフガニスタン	カブール大学
韓国	梨花女子大学 ソウル大学生活科学部	連合王国	アフガニスタン教育大学 オックスフォード大学オーリエル・コレッジ クイーンマーガレット・ユニバーシティコレッジ レスター大学
ベトナム	ベトナム国家大学 ハノイ教育大学 ベトナム国家大学ハノイ 外国語大学 ベトナム国家大学ハノイ 人文社会科学大学 ハノイ貿易大学 ハノイ大学	ベルギー	ルーヴェン・カトリック大学
		ドイツ	トリアー大学第二文学部
		フランス	パリ・デイドロ大学
		イタリア	ポローニャ大学文学部
中国	西安工程大学 南京大学 香港理工大学 蘇州大学 西安交通大学 新疆大学 武漢大学 内蒙古大学蒙古学学院 大連理工大学	オーストリア	グラーツ大学
		ポーランド	キャロル・マルチンコウスキー・ポズナン医科学大学
		ロシア	ロシア人民友好大学
		アメリカ	ノースカロライナ大学グリーンズボロ校 ミルズカレッジ
		オーストラリア	キャンベラ大学
台湾	国立清華大学 東海大学	ニュージーランド	リンカーン大学
バングラデシュ	バングラデシュ農科大学 チッタゴン大学		

(資料Ⅱ－Ⅰ－14：ダブルディグリー締結校と実施内容)

ダブルディグリー締結校	受入状況	備考
ゲッティンゲン大学 (ドイツ)	平成24年4月－26年3月 博士後期課程1名	平成27年3月博士 (理学)
ルーヴェン・カトリック大学 (ベルギー)	平成27年4月－28年3月 博士前期課程1名	在学中
ハノイ大学 (ベトナム)	平成28年4月－ 博士前期課程2名受入れ予定	入学許可済み

近隣大学との協定：近隣大学の大学院を中心として学生交流協定（単位互換協定）を締結し、学生の派遣、受け入れを行い、学生の勉学に資している（資料Ⅱ－Ⅰ－15）。

（資料Ⅱ－Ⅰ－15：協定大学、単位互換実施状況）

協定大学	H22年度		H23年度		H24年度		H25年度		H26年度		H27年度	
	派遣者数	受入者数										
京都大学大学院文学研究科	8	0	10	0	3	0	2	0	2	0	3	0
京都大学大学院人間・環境学研究科	7	1	5	0	0	0	5	0	2	0	2	0
奈良教育大学大学院教育学研究科	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2
奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科	7	1	1	0	10	0	8	0	6	0	7	0
奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
大阪府立大学大学院工学研究科	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
奈良大学大学院文学研究科	4	1	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0
帝塚山大学大学院人文科学研究科	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
博士前期課程 開講分合計	28	3	16	0	16	0	17	0	11	0	12	2

（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）社会のニーズに対応するために「臨床心理学コース」を設け、博士前期および後期課程において、科目の役割を明確化するために、専門群、実践群、キャリア形成群、論文等作成群を設定した。これにより、教育課程の実効性を高めることが実現され、また、社会のニーズに対応した教育課程の編成となっている。以上により、期待される水準を上回ると判断される。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点到に係る状況)

標準修業年限内での修了率：平成 22 年－27 年での平均が博士前期課程で約 94%で第一期の 91%を上回っている（標準修了年限内での修了者数、資料Ⅱ－Ⅱ－1：第二期、Ⅱ－Ⅱ－2：第一期）。博士後期課程は約 34%であり、第一期の 48%を 14 ポイント下回っている。一方、長期履修学生が第二期では 18.8%であるのに比べて、第一期では 7.0%と少ない。そこで、長期履修者を除いて標準修了年限での修了者数を計算すると、第一期 50%、第二期 41%と差は 9 ポイントとなる。このことより、長期履修学生制度が定着したことも一因であると考えられる（全修了者中の長期履修学生数、資料Ⅱ－Ⅱ－3：第二期、資料Ⅱ－Ⅱ－4：第一期）。

(資料Ⅱ－Ⅱ－1：標準修了年限内での修了者数)

博士前期課程	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
文学系	38	46	41	34	25	38
理学系	80	75	60	73	84	91
生活環境系	45	56	44	45	37	59
小計	163 (96%)	177 (92%)	145 (92%)	152 (96%)	146 (93%)	188 (95%)
全修了者数	170	193	158	159	157	197

博士後期課程	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
4 専攻合計	7 (28%)	10 (43%)	10 (43%)	5 (20%)	7 (33%)	8 (35%)
全修了者数	25	23	23	25	21	23

(資料Ⅱ－Ⅱ－2：標準修了年限内での修了者数 第一期)

博士前期課程	H16 年度	H17 年度	H18 年度	H19 年度	H20 年度	H21 年度
文学系	54	48	41	55	46	42
理学系	57	59	55	65	59	72
生活環境学系	44	55	47	40	46	50
小計	155 (92%)	162 (94%)	143 (91%)	160 (87%)	151 (94%)	164 (93%)
全修了者数	168	173	158	183	16	177

博士後期課程	H16 年度	H17 年度	H18 年度	H19 年度	H20 年度	H21 年度
4 専攻合計	19 (59%)	19 (44%)	14 (39%)	17 (50%)	14 (44%)	22 (52%)
全修了者数	32	43	36	34	32	42

(資料Ⅱ－Ⅱ－3：全修了者中の長期履修学生数、カッコ内は、比率)

区分	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	平均
博士前期課程	3 (1.7%)	3 (1.6%)	6 (3.8%)	4 (2.5%)	3 (1.9%)	5 (2.5%)	3.8 (2.2%)
博士後期課程	6 (24%)	2 (8.7%)	6 (26.1%)	4 (16%)	4 (19%)	3 (13%)	4.5 (17.9%)

(資料Ⅱ－Ⅱ－4：全修了者中の長期履修学生数、カッコ内は、比率、第一期)

区分	H16 年度	H17 年度	H18 年度	H19 年度	H20 年度	H21 年度	平均
博士前期課程	0	2 (1.1%)	5 (3.3%)	4 (2.3%)	3 (1.9%)	2 (1.2%)	2.7 (1.6%)
博士後期課程	0	0	0	0	2 (6.3%)	5 (11.9%)	1.2 (7.0%)

教員免許取得者数：博士前期課程学生の教員免許取得者は、平成 22 年度－27 年度で年平均 52.5 人である。各種免許種の内訳を資料Ⅱ－Ⅱ－5 に示す。この資料で校種別内訳計は延べ数を意味しており、多くの学生が複数の学校種の免許を取得していることがわかる。

(資料Ⅱ－Ⅱ－5：博士前期課程学生の各種教員免許取得者数)

		H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
免許取得者数*		79	55	50	37	46	48
校種別内訳	小学校	19	7	3	4	2	4
	中学校	38	41	25	25	32	35
	高等学校	70	47	42	33	43	42
	幼稚園	9	4	2	0	1	2
	栄養教諭	0	6	6	3	3	5
	計	136	105	78	65	81	88

*複数免許取得者を含む

受賞と研究発表：受賞学生数は資料Ⅱ－Ⅱ－6 に示すように、年平均で、博士前期課程 5 名、博士後期課程 1.3 名、全体で 6.3 名であった。人数あたりにすると、前期課程と後期課程ではほぼ同じである。

(資料Ⅱ－Ⅱ－6：年度ごとの受賞件数 (学外))

前期課程

区分	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
文学系	0	0	0	0	0	0
理学系	3	2	4	4	3	3
生活環境学系	2	3	4	0	1	1
合計	5	5	8	4	4	4

後期課程

区分	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
文学系	0	0	0	1	0	1
理学系	0	0	1	3	1	1
生活環境学系	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	1	4	1	2

また、学生の学会発表件数と出版論文数は、平成 27 年度について、それぞれ、博士前期課程で 0.3 回/人、0.1 編/人、博士後期課程では、0.5 回/人、0.4 編/人となっており、博士後期課程の実績が優れている (資料Ⅱ－Ⅱ－7)。

(資料Ⅱ－Ⅱ－7：平成 27 年度学生口頭発表、論文発表数 (ポスター発表を含む))

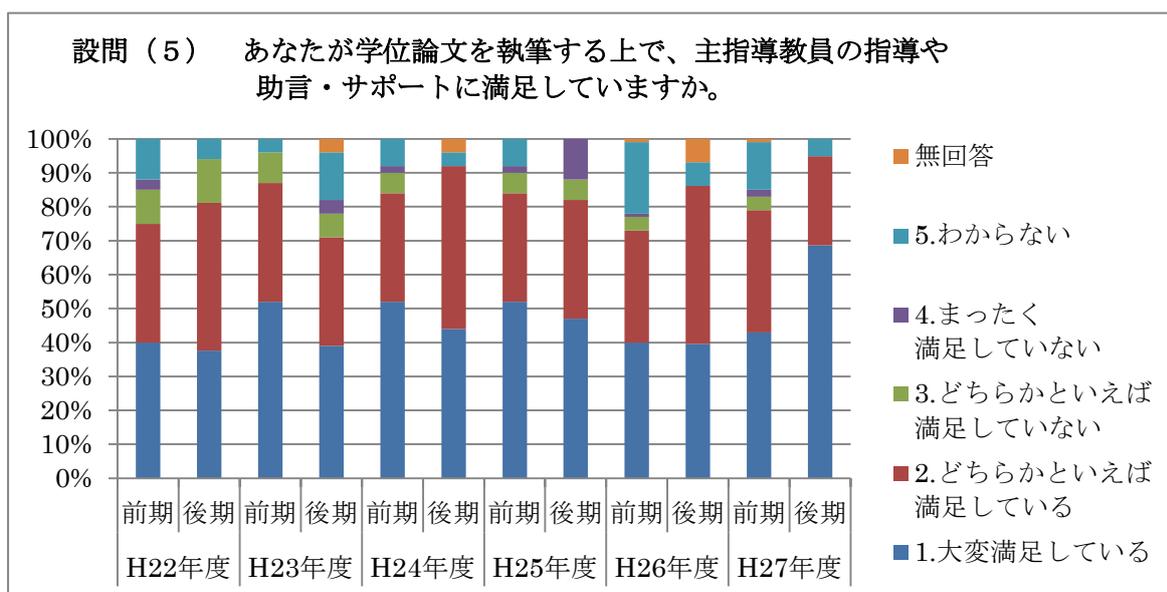
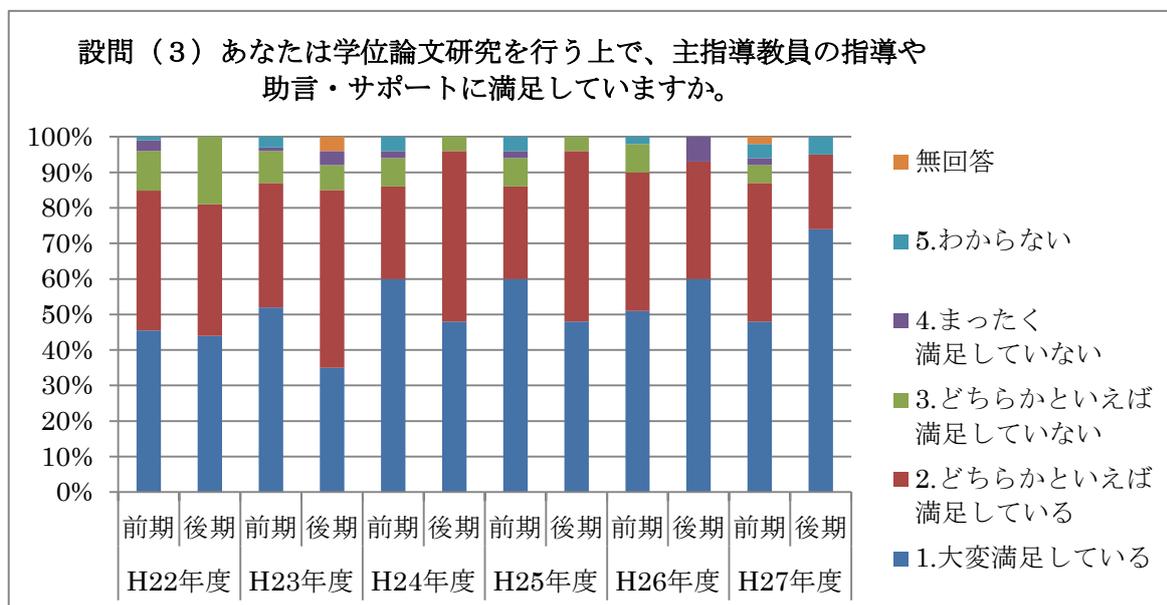
	在学生数	学会等発表数	論文数
博士前期課程	392	133	33
博士後期課程	160	79	58

研究発表支援：海外で開催される国際学会での発表に関しては、国際交流センターの事業により、年 3 回募集を行い、選考の結果採択された学生に往復の航空運賃を支給している。

学生の満足度調査：博士前期及び後期課程に在学する学生及び担当する教員に対し、授業、学位論文研究、研究教育環境、指導体制及び支援体制についてアンケートを実施した結果、

学位論文のための研究遂行、学位論文執筆にあたっての教員のサポート体制に満足と答えた学生がおおむね80%となっており、学生の満足度は高い（資料Ⅱ－Ⅱ－8）。

（資料Ⅱ－Ⅱ－8：カリキュラム・アンケート集計結果（一部抜粋））



（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）標準修了年数での修了率は、博士前期課程において、約94パーセントと高くなっている。一方、後期課程においては34%となっており、博士の学位取得には、時間を要するという結果になっている。これは長期履修学生の増加の影響が考えられる。教員免許の取得率の高さ、さらに、アンケート調査の結果で学生の満足度の高さなどを総合すると、学習成果が、期待される水準を上回っていると判断される。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

修了者数：修了者数の学内外の状況を以下に記す。本学内においては、博士前期課程の修了者数は、理学系分野が多く、平成22年度～27年度で年平均、全修了者数の45%となっている(資料Ⅱ-Ⅱ-9)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-9：本学における博士前期課程理学系分野修了者数)

専攻名	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
数学	15	10	8	11	11	13
物理科学	14	10	10	10	17	16
化学	17	22	16	17	24	21
生物科学	15	16	13	16	16	23
情報科学	21	17	12	22	19	19
計 (内は理学系専攻修了者の割合)	82 (48%)	75 (39%)	59 (37%)	76 (48%)	87 (55%)	92 (47%)
本学の全修了者数	171	193	158	159	158	197

一方、全国の女子の理学系修士修了生に占める割合からみても極めて高い。資料Ⅱ-Ⅱ-10に示すように、数学、物理学、化学、生物の修了者の国立大学の女子修了者に対する本学修了者の比率は約16%であり、この結果は、本学が我が国の理系女性育成に大きく貢献していることを示している。また、本学理学部から他大学の理系大学院への進学者数も多く、実質的にこの数字以上の貢献があることが分かる。

(資料Ⅱ-Ⅱ-10：国立大学の理学系分野女子修了生に対する本学修了生の比率)

区分	全国計	本学計	全国比
数学	350	146	41.7%
物理学	475	61	12.8%
化学	745	96	12.9%
生物	774	76	9.8%
計	2344	379	16.2%

学校基本調査(平成23年度-27年度)より集計

公務員への就職者数：本学の博士前期課程修了者の公務員への就職に関しては、文学系分野の修了者が多いことが特筆される。公務員への就職は、修士全体では全就職者中の1割程度であるが、そのうちの4割強が文学系分野の修了者である(資料Ⅱ-Ⅱ-11)。

(資料Ⅱ-Ⅱ-11：公務員への就職者数。カッコ内は当該項目の全就職者数を示す。)

博士前期課程	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	計
文学系	9 (24)	3 (30)	5 (25)	5 (19)	3 (14)	5 (28)	30 (140)
理学系	5 (47)	0 (68)	3 (51)	1 (61)	4 (79)	3 (86)	16 (392)
生活環境系	2 (57)	7 (41)	5 (31)	2 (34)	4 (24)	5 (41)	25 (228)
計	16 (128)	10 (139)	13 (107)	8 (114)	11 (117)	13 (155)	71 (760)
就職者中の公務員の比率	13%	7%	12%	7%	9%	8%	9%
公務員中の文学系の比率	56%	30%	38%	63%	27%	38%	42%
就職者中の文学系の比率	7%	2%	5%	4%	3%	18%	4%

就職希望者の就職率：博士前期課程において高い率を示している(資料Ⅱ-Ⅱ-12、別添

資料Ⅱ－Ⅱ－13)。第一期においては、博士前期課程において84%、博士後期課程において90%になっている。就職率は、第一期に比べて、実数及び率において博士前期課程で増えている。博士後期課程では率は減っているが実数をみると大きな差はない。また、就職分野も多様であり、研究教育の学際化と女性の人材育成と社会への貢献という本学の理念を実現している（資料Ⅱ－Ⅱ－14、別添資料Ⅱ－Ⅱ－15）。

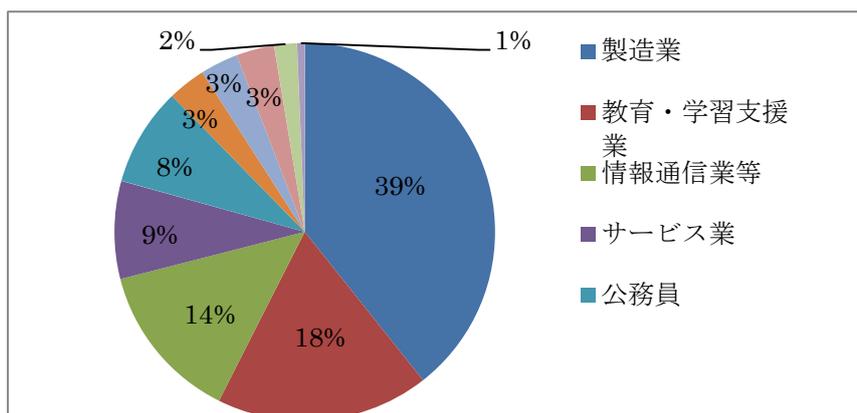
(資料Ⅱ－Ⅱ－12：平成20-27年度 博士課程就職率)

大学院	h22年度	h23年度	h24年度	h25年度	h26年度	h27年度
博士前期課程	88.9%	86.9%	82.3%	89.1%	85.4%	92.8%
博士後期課程	72.2%	80.0%	75.0%	73.3%	64.7%	64.7%
大学院全体	87.0%	86.3%	81.5%	87.4%	83.1%	90.2%

備考

1. 就職率は、就職希望者に対する就職者の割合を示す。
2. 9月修了者を含む。
3. 平成22年度～平成27年度のいずれも修了後の5月1日現在の就職率。

(資料Ⅱ－Ⅱ－14：平成27年度博士前期課程修了生の就職先の産業別内訳就職分野)



就職支援：平成23年度に科学技術人材育成費補助金「ポストドクター・インターンシップ推進事業」（平成24年度より「ポストドクター・キャリア開発事業」に名称変更）に採択された（別添資料Ⅱ－Ⅱ－16）。この事業は博士後期課程修了者等の就職先の開発に貢献しており、参加者の8割強が定時勤務型の職を得る等大きな成果を挙げている（別添資料Ⅱ－Ⅱ－17）。

修了後の進路先・就職先等の関係者への意見聴取等：身につけている能力についてのアンケート調査の結果を記す（資料Ⅱ－Ⅱ－18）。博士前期及び後期課程ともに、レーダーチャートから判断されるように、どの能力についても平均点が5点満点の4以上であり、身につけているという評価を受けていることが分かる。また、学部卒との比較の図から分かるように、大学院修了の評価が殆どすべての項目で上回っている。更に、後期課程修了者のほうが、前期課程修了者よりも概ね高い評価になっており、大学院教育が有効に機能していることが見て取れる。

(資料Ⅱ－Ⅱ－18：修了生上司アンケートの結果（平成27年度実施）)

- ◎第一期、二期に修了した学生の職場での直属上司を対象に調査
- ◎会社（機関）から見て、回答対象者が身につけていると思われる能力・資質

[基準]身についている：5 だいたい身についている：4 どちらとも言えない：3
 やや不足している：2 不足している：1
 博士前期課程

①卒業年度別集計(期間別)

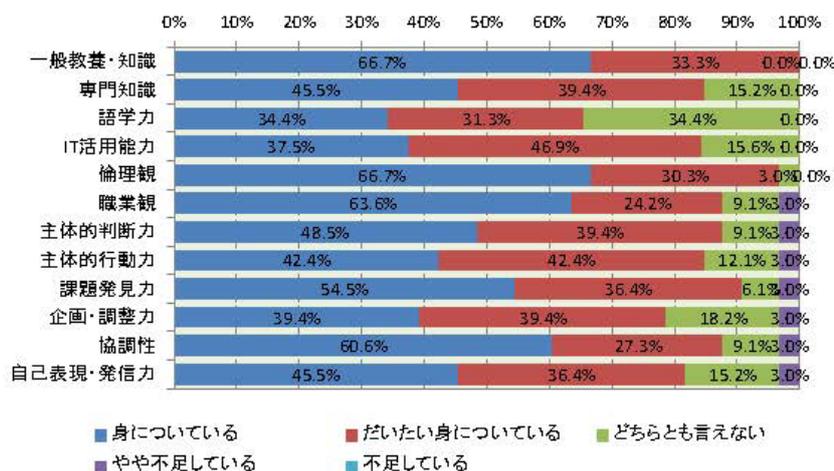
専攻	H16～H21年度まで			H22年度以降			合計		
	度数	年%	専攻%	度数	年%	専攻%	度数	年%	専攻%
文系	6	46.2%	40.0%	7	53.8%	38.9%	13	100%	39.4%
理系	4	66.7%	26.7%	2	33.3%	11.1%	6	100%	18.2%
生環系	5	35.7%	33.3%	9	64.3%	50.0%	14	100%	42.4%
合計	15	45.5%	100%	18	54.5%	100%	33	100%	100%

奈良女子大学の学生教育の成果に関する調査

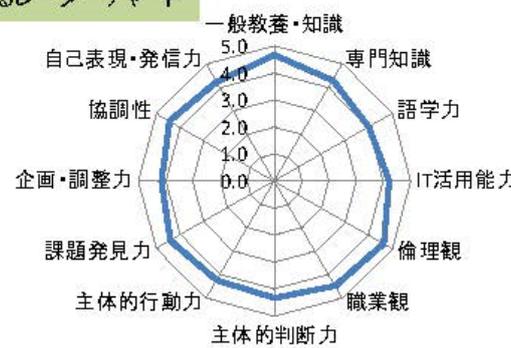
【2】単純集計(博士前期課程)

3. 会社(機関)から見て、回答対象者が身につけていると思われる能力・資質

		(度数)						加重平均
		身についている	だいたい身についている	どちらとも言えない	やや不足している	不足している	無回答	
1	一般教養・知識	22	11	0	0	0	0	4.7
2	専門知識	15	13	5	0	0	0	4.3
3	語学力	11	10	11	0	0	1	4.0
4	IT活用能力	12	15	5	0	0	1	4.2
5	倫理観	22	10	1	0	0	0	4.6
6	職業観	21	8	3	1	0	0	4.5
7	主体的判断力	16	13	3	1	0	0	4.3
8	主体的行動力	14	14	4	1	0	0	4.2
9	課題発見力	18	12	2	1	0	0	4.4
10	企画・調整力	13	13	6	1	0	0	4.2
11	協調性	20	9	3	1	0	0	4.5
12	自己表現・発信力	15	12	5	1	0	0	4.2



平均値によるレーダーチャート



博士後期課程

①卒業年度別集計(期間別)

専攻	H16～H21年度まで			H22年度以降			在学中			合計		
	度数	年%	専攻%	度数	年%	専攻%	度数	年%	専攻%	度数	年%	専攻%
比較文化学専攻	3	100%	50.0%	0	0.0%	50.0%	0	0.0%	0.0%	3	100%	27.3%
社会生活環境学専攻	2	40.0%	33.3%	2	40.0%	33.3%	1	20.0%	100%	5	100%	45.5%
共生自然科学専攻	0	0.0%	0.0%	1	100%	0.0%	0	0.0%	0.0%	1	100%	9.1%
複合現象科学専攻	1	50.0%	16.7%	1	50.0%	16.7%	0	0.0%	0.0%	2	100%	18.2%
合計	6	54.5%	100%	4	36.4%	100%	1	0.0%	100%	11	100%	100%

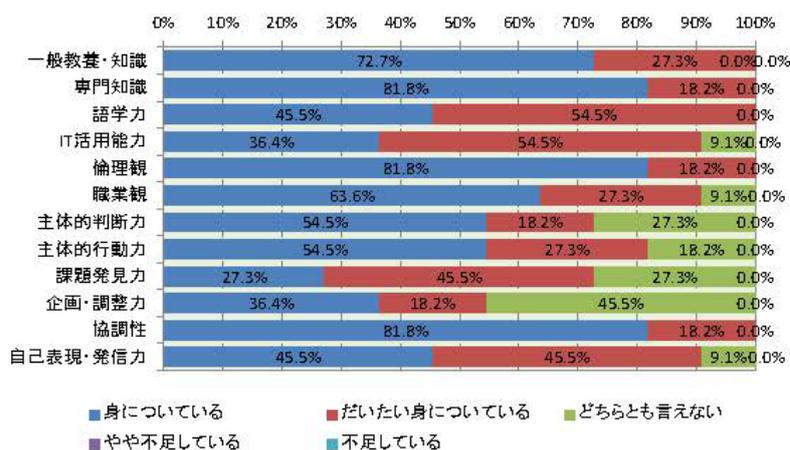
「在学中」の1名は集計時は「H22年度以降」に含める。

奈良女子大学の学生教育の成果に関する調査

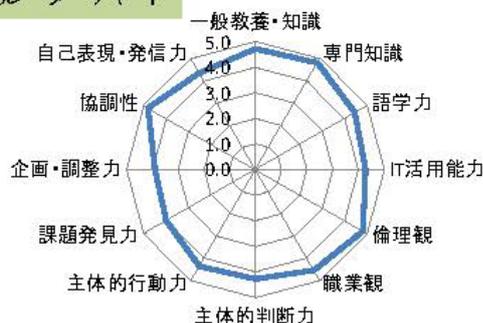
【2】単純集計 博士後期課程

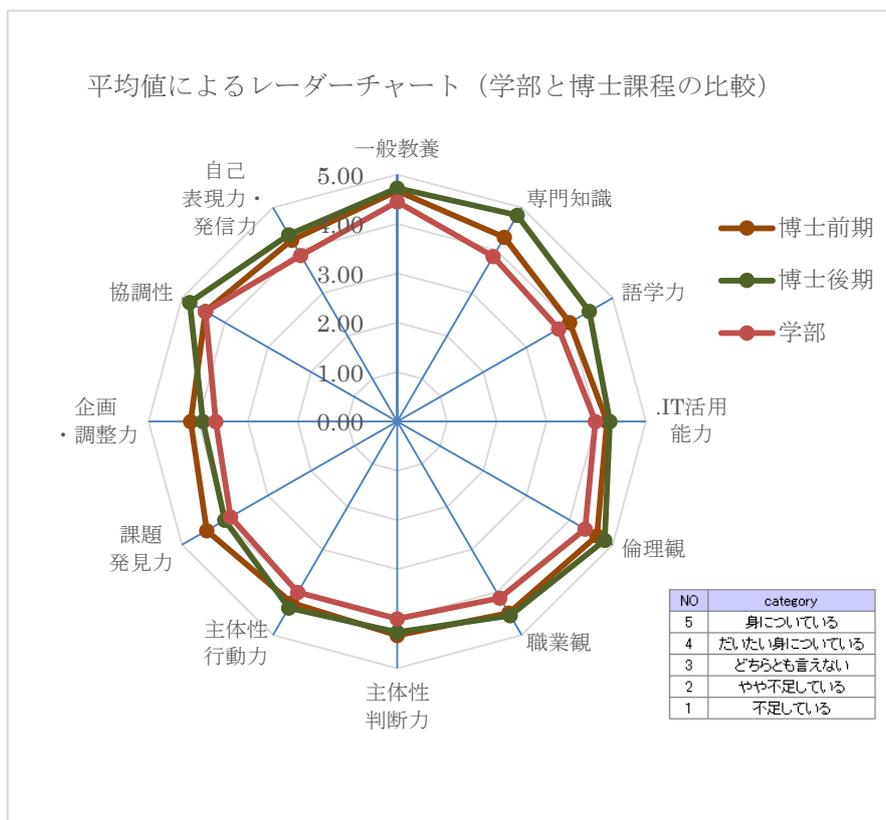
3. 会社(機関)から見て、回答対象者が身につけていると思われる能力・資質

	身につけている	だいたい身につけている	どちらとも言えない	やや不足している	不足している	無回答	加重平均
1 一般教養・知識	8	3	0	0	0	0	4.7
2 専門知識	9	2	0	0	0	0	4.8
3 語学力	5	6	0	0	0	0	4.5
4 IT活用能力	4	6	1	0	0	0	4.3
5 倫理観	9	2	0	0	0	0	4.8
6 職業観	7	3	1	0	0	0	4.5
7 主体的判断力	6	2	3	0	0	0	4.3
8 主体的行動力	6	3	2	0	0	0	4.4
9 課題発見力	3	5	3	0	0	0	4.0
10 企画・調整力	4	2	5	0	0	0	3.9
11 協調性	9	2	0	0	0	0	4.8
12 自己表現・発信力	5	5	1	0	0	0	4.4



平均値によるレーダーチャート





（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）就職率は、博士前期課程は80%を超え、博士後期課程も60%を超えており、職種も多様であることから、当大学院の理念である学際化と社会への貢献を実現していると考えられる。更に数学、物理学、化学、生物においては、前期課程修了者が全国女子の16%以上となっており、我が国の高度な専門性を有する理系女子育成に大きく貢献していると評価できる。一方、博士前期課程修了者の公務員への就職は全体の1割程度あり、特に文学系の修了者が多くなっている。また、修了生の就職先へのアンケート調査においても、博士前期及び後期課程において、全ての能力について身につけているとの評価であり、しかも学部卒よりも評価が高く、在学中の学業の成果があがっていると考えられる。以上のことより、期待される水準を上回ると判断される。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

以下の項目のうち、1, 2, 3は第一期から更に発展したもので、4以降は第一期には無かった教育活動である。

1. 女性教員比率
女性教員比率は、第一期の25%強と比較して、前期課程31.3%、後期課程26.1%と増えている（資料Ⅱ-I-5、P 4-5）。
2. 「組織的な大学院教育改革推進プログラム」では、プログラム終了後も大学独自経費で事業を継続して、学生の自主的な研究企画等をサポートし、自立した人材の育成を行った。例えば、九州大学農学系大学院GPと共同でPBL型授業を実施した。また、学生のニーズや社会からの要請に対応するため、学術の発展を解説する特別講義等の科目、英語を用いたコミュニケーション力育成科目等（資料Ⅱ-I-11、P 4-7）、多様な授業科目を開設した。
3. 社会のニーズに対応するために、平成26年度に博士前期課程「生活健康・衣環境学専攻」を改組して「心身健康学専攻」とし、新たに「臨床心理学コース」を設け、臨床心理士の養成を図っている。
4. 外国の大学との協定を積極的に結び、ゲッチンゲン大学などとのダブルディグリー制度により、博士学位取得者を出すなど、グローバル化を推進した（資料Ⅱ-I-14、P 4-8）。
5. 大学院オープンキャンパスの開始
平成23年度より、大学院のオープンキャンパスを年2回開催し、質の確保を図るとともに、広報活動の充実にも努めた（別添資料Ⅱ-I-2）。
6. 研究倫理教育の推進
平成27年度から、大学院生全員に倫理教育に関する講義を受講することを義務付けた（別添資料Ⅲ-1）。
7. 平成23年度に文部科学省科学技術人材育成補助事業「ポストドクター・インターンシップ推進事業」（平成24年度より「ポストドクター・キャリア開発事業」に名称変更）に採択され、ポストドクターと博士後期課程学生を対象に、積極的に女性人材育成の実践を行った（別添資料Ⅱ-II-16）。参加者の8割が就職している（別添資料Ⅱ-II-17）。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

1. 理学系修士修了者が全大学の女子修了者に占める割合は大きく、数学、物理、化学、生物の修了者の全国立大学の女子修了者に対する比率は、平成23年度から27年度の平均で16%であり、我が国の理系女子教育に大きく貢献している（資料Ⅱ-II-10、P 4-13）。
2. 在学中の学業の成果に関する修了生への調査結果（別添資料Ⅲ-2）
大学で習得したスキル等についての修了生へのアンケート調査について、平成15以前＋平成16年度－平成21年度、及び平成22年度以降の結果をノンパラメトリック検定により比較した。サンプル数の多い博士前期課程については、全項目について、向上したと答えた学生の頻度は第二期の方が多く、特にコンピュータのスキル（5%の水準）、論理的思考力（5%の水準）は有意に差がある。
3. 標準修了年度内の修士の修了率
博士前期課程では、第二期で平均約94%であり、第一期の91%を上回っている（資料Ⅱ-II-1、資料Ⅱ-II-2、P 4-10）。一方、博士後期課程では第二期で約34%であり、第一期の48%をかなり下回っているが、第二期の長期履修学生数は増えており、長期履修学生制度が定着したことも、標準修了年度内の修了率の減少の一因と考えられる（資料Ⅱ-II-3、資料Ⅱ-II-4、P 4-10）。

教 育

文 学 部

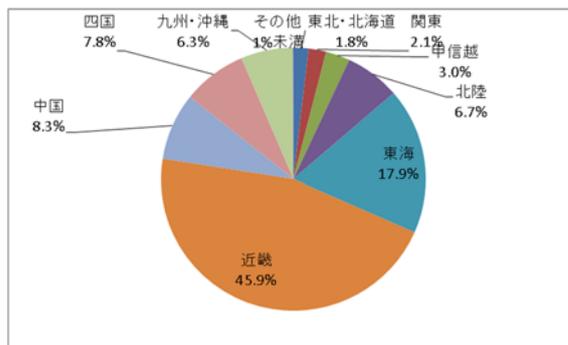
(別 添 資 料)

目 次

別添資料Ⅰ－５	：平成 22～27 年度出身高校所在地別入学者数	P 1
別添資料Ⅱ－Ⅰ－４	：平成 27 年度文学部形態種別科目数と専任担当比率	P 1
別添資料Ⅱ－Ⅰ－６	：平成 27 年度「基礎演習」シラバス	P 2
別添資料Ⅱ－Ⅰ－７	：「学ぶことと女性のライフスタイル」最終授業での学生自己評価	P 2
別添資料Ⅱ－Ⅰ－９	：TOEIC 平均点の推移	P 3
別添資料Ⅱ－Ⅰ－10	：文学部 FD 研修会開催状況	P 3
別添資料Ⅱ－Ⅰ－11	：文学部専門教育科目授業アンケートとフィードバック	P 3
別添資料Ⅱ－Ⅰ－12	：「平成 26 年度共通科目授業アンケートの結果報告」FD 実施委員会	P 4
別添資料Ⅱ－Ⅰ－13	：文学部研究交流集会開催状況	P 5
別添資料Ⅱ－Ⅰ－14	：保護者説明会アンケート結果	P 5
別添資料Ⅱ－Ⅰ－21	：文学部専門およびキャリア科目のインターンシップ実施状況	P 5
別添資料Ⅱ－Ⅰ－25	：「まほろば叢書」創刊号、第 5 巻、6 巻の表紙	P 6
別添資料Ⅱ－Ⅰ－26	：スポーツ科学の地域貢献（一例）	P 6
別添資料Ⅱ－Ⅰ－27	：子ども臨床学の地域貢献（一例）	P 7
別添資料Ⅱ－Ⅰ－28	：文学部提供のアカデミックガイダンス	P 7
別添資料Ⅱ－Ⅰ－29	：高等学校訪問による模擬講義	P 8
別添資料Ⅱ－Ⅱ－２	：学術誌に掲載された優秀卒業論文等の例	P 8
別添資料Ⅱ－Ⅱ－３	：留年、休学、退学の状況	P 9
別添資料Ⅱ－Ⅱ－５	：中国語検定受験者数および合格者数	P 9
別添資料Ⅱ－Ⅱ－６	：フランス語検定受験者数および合格者数	P 9
別添資料Ⅱ－Ⅱ－７	：ドイツ語検定受験者数および合格者数	P 9
別添資料Ⅱ－Ⅱ－８	：文学部学生の受賞等	P10
別添資料Ⅱ－Ⅱ－12	：文学部生の出身地での就職者の割合	P10
別添資料Ⅱ－Ⅱ－15	：就職先アンケートの自由記述	P10

(別添資料Ⅰ－５：平成22～27年度出身高校所在地別入学者数)

地方	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	合計
東北・北海道	2	4	7	2	0	3	18
関東	3	2	5	4	3	4	21
甲信越	3	6	7	7	2	4	29
北陸	18	6	6	11	13	12	66
東海	29	34	29	33	22	29	176
近畿	73	77	83	70	84	63	450
中国	13	15	11	16	10	16	81
四国	14	14	11	11	9	18	77
九州・沖縄	10	13	10	10	13	6	62
その他	0	1	0	0	0	0	1
合計	165	172	169	164	156	155	981



(別添資料Ⅱ－Ⅰ－４：平成27年度文学部形態種別科目数と専任担当比率)

学科	コース	種別	専任	非常勤	専任比率
人文社会科学部	古代文化学	概論(共通)	6		
		講読	8		
		特殊研究	6	3	
		実習	7	1	
		演習	31		
		小計		58	4
	歴史学	概論(共通)	4		
		講読	5		
		特殊研究	6	4	
		実習	7		
		演習	21		
		小計		43	4
	社会情報学	概論(共通)	5	3	
		講読	3		
		特殊研究	3	5	
		実習	4		
		演習	20		
	小計		35	8	81%
	地域環境学	概論(共通)	3	1	
		講読	4	1	
特殊研究		5	5		
実習		3			
演習		11			
小計		28	7	80%	
文化メディア学	概論(共通)	4			
	講読	3			
	特殊研究	6	2		
	実習	5			
	演習	12			
小計		30	2	94%	

学科	コース	種別	専任	非常勤	専任比率
言語文化学科	日本アジア言語文化学	概論(共通)	11	2	
		講読	8	1	
		特殊研究	1	8	
		実習			
		演習	25	3	
		その他専門			
	資格		4		
	小計		45	18	71%
	ヨーロッパ・アメリカ言語文化学	概論(共通)	14	1	
		その他共通			
特殊研究		6	9		
講読		16	2		
コミュニケーション	12	4			
演習	42				
小計		90	16	85%	

学科	コース	種別	専任	非常勤	専任比率
人間科学科(旧人間行動科学科)	教育学・人間学	概論(共通)	7		
		特殊研究	5	3	
		実習	3		
		演習	29		
	小計		44	3	94%
	心理学(旧総合心理学を含む)	概論(共通)	4		
		講読			
		特殊研究	4	3	
		実習	8		
	演習	14			
小計		30	3	91%	
子ども臨床学(25年度入学生まで)	概論(共通)	2			
	講読				
	特殊研究	5	2		
	実習	2			
演習	13				
小計		22	2	92%	
スポーツ科学(25年度入学生まで)	概論(共通)	5			
	講読				
	特殊研究	4	2		
	実習				
	演習	3			
資格					
小計		12	2	86%	

全体		437	69	86%
----	--	-----	----	-----

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－6：平成27年度「基礎演習」シラバス)

講義コード	2000107						
開設科目名	基礎演習G						
担当教員	鈴木康史						
対象学生	1回生						
単位数	2						
週時間	2						
授業概要	基礎演習A～Hは、ゼミ形式で、「大学で自ら学ぶ」という基礎的な「姿勢」と「能力」を身につけるための授業である。今後四年間で「卒業論文」を作成するための第一歩であり、大学で学ぶとはどういうことか、を学ぶことを目的とする。クラス単位で開講するので、自分のクラスに登録すること。						
	「大学で自ら学ぶ」ためには、自ら知的な好奇心を持てるようになることが最も重要なことである。そのために基礎演習では「自ら問題を発見し解決する能力」と、それを表現し、他者に伝える「コミュニケーションする能力」の二つの能力を身につける。前者については、文献の収集と講読、フィールドワークなどを行い、資料やデータを集める能力、さらにそれらを批判的に読み解き、自ら思考する力がその基礎となるだろう。後者については、自分の考えをレジュメや文章として表現し、また人前で発表する能力、さらには、他者の意見を理解する能力がその基礎となるだろう。基礎演習とはこうした諸能力を身につけるための授業であり、これらはA～Hに共通の目標である。						
キーワード	自ら学ぶ、知的な好奇心、問題発見・解決、コミュニケーション、批判的思考						
授業計画	<p>・本基礎演習Gは、各自でテーマを設定して、それについて自分で調査をし、発表や討論を経て、ミニ論文を書いてもらうことを目標とします。各自のテーマにはあまり縛りは設けませんが、グループ単位で討論を行うこともあるので、いくつかの大きなテーマ群を設置しようと考えています。それは授業開始後に皆さんと相談します。</p> <p>・しかし、本演習の目標はテーマについての知識を深めることだけではありません。大学で「研究」とはどのようなことなのか、それを実際に経験するための授業であり、各自のテーマは、それを進めるための切り口にあたります。</p> <p>・身近なテーマをいかに「研究」へとつなげるのか？そのためには何をどのように調べ、どのように考えねばならないのか？こうしたことを実際に経験してゆくことがこの授業の目標です。今後行なう研究、特に卒業論文を、ひとまず半年で経験してみる、そんな授業です。先輩が書いた卒論なども読んでもらいます。</p> <p>・しかし、これらを一人で進めるのはまだ難しいことも多いと思います。ですから、特に、各自がテーマをいかに見つけ、それをどう研究につなげてゆくのかについて(下記の④以下)は、できる限り個別指導も行います。</p> <p>・読むこと、書くこと、発表すること、そして考えること、など文学部の研究に必要な力を総合的に身につけてください。</p> <p>授業は以下のような流れで進められます。</p> <p>① イントロ ～内田樹を読む + テーマ群の設定 【事前学習：興味のあることを考えておく 事後学習：内田の教育論について考察する】</p> <p>② 大学での研究の心構えについて講義～鈴木：『先生は知らない』 【事前学習：自分の興味を明確にする 事後学習：自分の興味がどのような「研究」テーマになりそうかと定める、大学とはいかなるところか考察する】</p> <p>③ 「謎」とは何か？について講義、「仮説」とは？ =大学での研究の技術 【事前学習：各自の研究テーマを決めて報告できるようにしておく 事後学習：テーマについての文献を調査する】</p> <p>④ 図書館にて資料調査の実習／各自のテーマの先行研究を探す 【事前学習：テーマについての文献などのリストを作る 事後学習：文献を実際に収集する】</p> <p>⑤ 図書館の復習／「視点」についての講義(『スラムダンク』を例に) 【事前学習：文献を収集して読み始める 事後学習：文献を収集して読む】</p> <p>⑥ 先輩の卒論についての発表①(グループごと) 【事前学習：配布した論文を読みレジュメを作る 事後学習：各グループの報告について考察する】</p> <p>⑦ 先輩の卒論を読んだ発表②(グループごと) 【事前学習：配布した論文を読みレジュメを作る 事後学習：各グループの報告について考察する、このあたりから各自のテーマについて一次資料を調べ始める】</p> <p>⑧ 先行研究を読んで発表①(グループごと) 【事前学習：自分で集めた先行研究を読みレジュメを作る 事後学習：発表とそこで出た意見などを振り返って考察する】</p> <p>⑨ 先行研究を読んで発表②(グループごと) 【事前学習：自分で集めた先行研究を読みレジュメを作る 事後学習：発表とそこで出た意見などを振り返って考察する】</p> <p>⑩ 調査の途中経過の報告① (グループごと) 【事前学習：自分で集めた資料を読みレジュメを作る 事後学習：発表とそこで出た意見などを振り返って考察する】</p> <p>⑪ 調査の途中経過の報告② (グループごと) 【事前学習：自らのテーマにおいて解くべき「問題」を明確にし、必要であれば質問に来る 事後学習：自らのテーマについて調べを進め、考察をする】</p> <p>⑫ 各自で調べたことの発表① 【事前学習：自らのテーマについて報告の準備をする 事後学習：指摘された諸点を今一度考察し、ミニ論文の構想を考える】</p> <p>⑬ 各自で調べたことの発表② 【事前学習：自らのテーマについて報告の準備をする 事後学習：指摘された諸点を今一度考察し、ミニ論文の構想を考える】</p> <p>⑭ 各自で調べたことの発表③ 【事前学習：自らのテーマについて報告の準備をする 事後学習：指摘された諸点を今一度考察し、ミニ論文の構想を考える】</p> <p>⑮ 各自で調べたことの発表④ 【事前学習：自らのテーマについて報告の準備をする 事後学習：指摘された諸点を今一度考察し、ミニ論文の構想を考える】</p>						
教科書	No	書籍名	著者	出版社	出版年	ISBN	
	1.	授業中に紹介					
参考書	No	書籍名	著者	出版社	出版年	ISBN	
	1.	図書館に訊け!	井上真琴	ちくま新書			
成績評価の方法	出席・授業への取り組み・発表・ミニ論文などで総合的に評価する						
成績評価の割合%	定期試験(期末試験)	授業内試験等	宿題・授業外レポート	授業態度・授業への参加度	受講者の発表(プレゼン)	出席	教員独自項目※
	0		40	20	10		

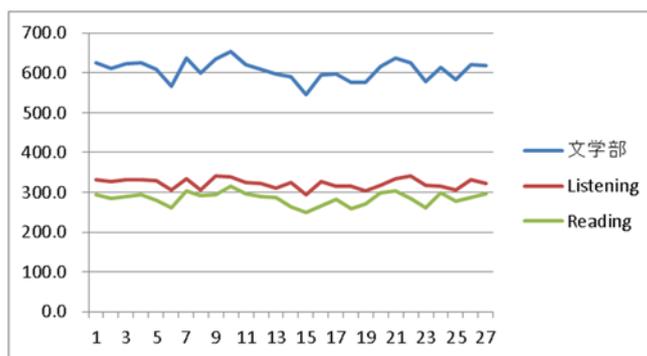
(資料Ⅱ－Ⅰ－7：「学ぶことと女性のライフスタイル」最終授業での学生自己評価)

年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
5 気づきや発見は今後の生き方や考え方に大きく影響する	10	13	34	33	7	23
4 気づきや発見は今後の生き方や考え方に少しは影響する	10	11	18	7	6	13
3 気づきや発見はあるが今後の生き方や考え方には影響なし	1	1	1	0	0	0
2 気づきや発見がどちらかといえばあった	1	0	2	0	0	2
1 気づきや発見はなかった	0	0	0	0	0	0
有効回答数計	22	25	55	40	13	38

*いずれの年度もほとんどの学生が最終授業においてこの授業を通して、自らの女性としての生き方や考え方についての気づきや発見をしたと自己評価しており、この授業取組みが将来の女性リーダーとしての意識を涵養するという点で成果を挙げているといえる。

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－9：TOEIC 平均点の推移)

実施年月	文学部の合計点	Listening	Reading	
2010年	Feb-10	624.3	331.3	293.0
	May-10	610.7	326.8	283.8
	Jul-10	622.3	332.7	289.6
	Sep-10	626.0	332.6	293.4
	Nov-10	607.8	328.8	279.0
2011年	May-11	566.2	305.7	260.5
	Jul-11	637.6	333.9	303.7
	Sep-11	598.6	305.9	292.7
	Nov-11	635.7	340.9	294.8
2012年	Feb-12	652.5	337.8	314.7
	May-12	621.5	325.0	296.5
	Jun-12	609.9	321.1	288.8
	Sep-12	597.7	310.2	287.5
	Nov-12	588.8	324.2	264.7
2013年	Feb-13	544.5	294.5	250.0
	May-13	594.8	327.8	267.0
	Jul-13	597.8	315.3	282.4
	Sep-13	575.1	316.3	258.8
2014年	Nov-13	575.7	304.1	271.7
	Feb-14	616.5	318.7	297.8
	May-14	637.4	333.5	303.9
	Jul-14	624.2	340.5	283.8
	Sep-14	579.2	317.9	261.3
2015年	Nov-14	613.6	315.7	297.9
	Feb-15	582.8	305.8	277.0
	May-15	619.8	332.3	287.5
Jun-15	618.6	322.2	296.4	



- ・文学部の合計点の平均は 600 点前後
- ・Listening は Reading より 10～60 点程度高い傾向にある
- ・合計点の平均が 650 点を越えた回もある

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－10：文学部 FD 研修会開催状況)

実施年度	区分	実施日	テーマ	講師所属・氏名等	参加者数
平成22年度	文学部FD研修会	平成22年7月28日	「学部初年次導入教育のあり方について—岡山大学文学部との奈良女子大学文学部の事例検討」	岡山大学大学院社会文化科学研究科 藤井 和佐 准教授 奈良女子大学文学部 内田忠賢教授、天ヶ瀬正博准教授	51名
	文学部FD研修会	平成22年11月25日	「データに見る近年の奈良女子大学文学部生の動向」	奈良女子大学文学部 天ヶ瀬正博准教授	54名
平成23年度	文学部FD講演会	平成23年4月20日	「大学院前期課程(文学系)の現状と課題—とくに入学定員問題に関連して」	奈良女子大学文学部 高田将志教授	52名
平成24年度	平成24年5月23日の文学部研究会女性エンパワメントと文学部共通科目「学ぶことと女性のライフスタイル」を以てこれに充てる			奈良女子大学文学部 野村鮎子教授	54名
平成25年度	文学部FD研修会(教務委員会との共催)	平成26年3月19日	「文学部の成績分布の現状」	奈良女子大学文学部 石崎研二准教授、林拓也准教授	50名
平成26年度	文学部FD研修会	平成27年2月18日	「これからの大学英語教育—汎用的コミュニケーション能力の育成と学術的教養の涵養をめざして」	京都大学国際学術教育センター 田地野彰教授	42名
平成27年度	文学部FD研修会	平成28年2月17日	「学士力と学習の現状」	奈良女子大学文学部 佐原康夫教授	46名

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－11：文学部専門教育科目授業アンケートとフィードバック)

実施年度	対象	実施日	回収状況	調査結果の概要	結果のフィードバックとその効果
平成22年度	文学部前期開講の概論科目	7月下旬～8月上旬	26/41科目	ほとんどの授業において、出席状況がよく、良好な評価を得ていた。ただし、予習復習については、行っている学生が少なく、課題として残った。	担当者が各自で結果を集計し、集計結果、調査票、コメントの提出を待っているため、前年度よりの改善の効果と、次期からの改善計画が明確になった。
	文学部後期開講の特殊研究(試行)	1月下旬～2月上旬	14/46科目	特殊研究は専門性が高く、履修も文科の学生であるため、良好な評価を得ていた。	授業履修者が少ないために回答者が少ないケースがあり、アンケートの匿名性が担保できず、配慮を要する場面があった。
平成23年度	文学部前期開講の概論科目	7月下旬～8月上旬	21/41科目	ほとんどの授業において、出席状況がよく、良好な評価を得ていた。ただし、予習復習については、行っている学生が少なく、課題として残った。	授業の方法や内容の改善に対する意欲に加えて、予習復習を含めて、授業外における学生の自主的・主体的学習について改善に取り組む意見があった。
平成24年度	文学部後期開講の共通科目(語学および非常勤担当科目を除く)	1月下旬～2月上旬	22/31科目	出席状況や学習面の満足度、習得スキルに関する調査結果より、授業に臨む学生の態度はまじめであり、授業から得られる満足度、知識、スキルなど一定の水準に達しているといえる。また、講義形式の授業が多い中でいくつかの科目ではゼミ形式を採用しており、それらの科目では、受講生自らが実践して身につけるスキルや学習量の向上に寄与していることがわかった。	教員による実施報告の質問項目に「昨年度と比較した改善点とその効果」を追加したところ、「授業内容の変更や構成」「レポートの出し方」「話し方やマイクの音量」「新たな視覚教材の採用」「テキストの利用方法」などを改善したとの回答を得た。
平成25年度	文学部前期開講の概論科目	7月中旬～8月8日	30/41科目	出席状況、満足度などが一定の水準に達しており、特に初年次導入科目である「基礎演習」などの演習科目では、受講生の自発的な学習や実践的なスキルが向上している。	学生の自由記述とともに各教員に結果を周知した。
	文学部後期開講の共通科目(語学および非常勤担当科目を除く)	1月下旬～2月上旬	24/31科目	出席状況や学習面の満足度が良好であることは、安定した傾向といえる。また、習得スキルでは、知識の理解や新たなものの見方以外に、問題を発見して考えるなどの自発的な学習スキルを選択した受講生や科目が多いことがわかった。	昨年度に同科目を担当した教員に対する具体的な改善点とその効果に関する質問への回答によれば、授業テーマの変更や進度および授業展開の改善などがみられた。その結果、受講生の学習態度の改善や担当教員自身にとって効果的であったことが示された。
平成26年度	文学部前期開講の概論科目	7月下旬～8月上旬	24/36科目	例年通り、出席状況、満足度は極めて高い。予復習時間や自発的学習を増やすための指導や、その実態把握のためのアンケートの工夫が必要である。	自発的学習の実態をより正確に把握するために質問項目に工夫を加えた。
	文学部後期開講の共通科目(語学および非常勤担当科目を除く)	1月下旬～2月上旬	18/30科目	前期の良好な点に加え、自発的学習が積極的な授業が6割に達したことが判明した。	アンケートの質問項目の工夫が実態把握に効果的であった。教員による授業改善も順調である。
平成27年度	文学部前期開講の概論科目	7月下旬～8月上旬	29/42科目	例年通り、出席状況、満足度は極めて高い。また基礎演習における教育効果の高さも確認できる。	学生の自由記述の質問の仕方工夫した結果、感情的な記述が減り、授業改善に役立つ建設的批判が見られるようになった。
	文学部後期開講の共通科目(語学および非常勤担当科目を除く)	1月下旬～2月上旬	18/27科目	出席状況、満足度などがかなり高い水準に達しており、授業時間外学習が少しずつ増えていることが明らかにされた。	担当教員の実施報告では、ほとんどの授業で目標が達成できたとする自己評価が見られた。演習授業には、学生の自発性を促したという回答もあった。

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－12:「平成26年度共通科目授業アンケートの結果報告」FD実施委員会)**1. 調査の概要**

調査対象科目：2014年開講の文学部共通科目（非常勤担当科目を除く）前期36科目、後期30科目

実施期間：平成26年7月中旬～8月上旬、27年1月下旬～2月上旬

調査票：別紙参照

実施方法：学務課（文学部係）から各科目の担当教員に調査票を配布後、各科目で受講生に対して調査・回収し、学務課に提出する。

回収結果：前期36科目中24科目、後期30科目中18科目（4科目未集計）で調査結果の提出があった。回答者数は各科目6～71名であった。

2. 調査結果の概要

専門科目という特性から、受講生およびアンケートの回答者数が少ない科目がみられる。したがって、具体的な科目名の表記や各科目の集計結果の公表は控え、各質問に対する回答率（%）を科目ごとに算出し、回答率に対する該当科目数を度数分布として表現し、集計結果を示したい。ただし、授業の向上という目的に照らし合わせて、特筆すべき事項と委員会が判断したものについては、該当科目について詳細な集計結果を掲載する。

1) 出席状況

調査結果の提出があった42科目ではいずれも9割以上の受講生が「ほぼ毎回」出席しており、欠席する受講生はきわめて少ない。専門科目とはいえ、中には大人数の学生が受講している授業もあるが、いずれも出席状況は良好といえる。

2) 学習面の満足度

「得られた」の回答率が50%以上の科目は計35（前期21、後期14）科目あり、全体の9割近くを占める。それに対して、「あまり得られなかった」および「得られなかった」への回答率はきわめて低く、いずれの科目でも受講生の満足度は高いといえる。

3) 習得スキル

文学部共通科目は比較的講義形式の授業が多い。したがって、「学問分野に関する知識」や「新たな視点の獲得」など、講義を聴講して身につく基礎知識の習得が中心となっている。しかし、前期に開講している科目の中には、『基礎演習 A～I』などの演習形式の授業もあり、調査票の質問3にある項目のうち、主に実習・演習形式の科目によってスキルが身につくと考えられるd～gの項目について、少なからず回答率が高い科目がある。

4) 予習復習

講義形式の科目が多いこともあり必ずしも予習・復習が多いとはいえない。ただし、「復習した」と回答した割合が高い科目がいくつかあり、どちらかといえば予習よりも復習に重点を置いているといえる。

5) 自発的学習

「読んだり調べたりした」への回答率が50%以上の科目は、全体の6割にあたる25（前期16、後期9）科目あり、それらの科目では受講生が自発的に学習している姿勢がうかがえる。

6) 『基礎演習』にみる習得スキルの向上

質問3のd～gの項目の回答率が高かったのは、文学部1回生のほとんどが履修する『基礎演習』である。以下では、2014年度前期に開講している『基礎演習』9科目のうち、調査結果の提出があった5科目について、質問3のd～gの項目を集計した結果をみてみたい。当該科目の全回答者数は91名であるが、そのうちの約47%が「文献や資料を読み込む力が上がった」、52%が「対象について調べるための技術が身についた」、42%が「調べたり考えたりしたことを発表する技術が身についた」、51%が「レポートの書き方が身についた」と回答しており、資料解釈力、調べる技術、プレゼンテーション能力、レポート作成能力のいずれのスキルも向上している。『基礎演習』においては質問5に対して「読んだり調べたりした」と答えた回答者が95%を超えており、『基礎演習』という授業の場を通して、担当教員やTAの指導のみならず、受講生が自発的に学習し、その学習過程で資料解釈力、調べる技術、プレゼンテーション能力などが相互に関連しつつ、受講生の全体のスキル向上に貢献していることがわかる。

3. まとめ

調査結果から、2014年度開講の文学部共通科目は、出席状況、満足度などが一定の水準に達しており、とりわけ『基礎演習』などの演習形式の科目では、受講生の自発的な学習や実践的なスキル向上に寄与していることがわかる。

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－13：文学部研究交流集会開催状況)

実施年度	実施日	講師	所属	区分	テーマ
平成22年度	平成22年6月23日	渡辺和行教授	人文社会学科	研究	近代フランスの歴史学と歴史家
	平成22年12月1日	麻生武教授	人間科学科	研究	「イタイ」ということばは何を意味しているのか？—他者の心を理解する自己とは何か
	平成23年3月7日	中島道男教授	人文社会学科	研究	「公共性」論の位置—デュルケム・パウマン・アレント
平成23年度	平成23年5月25日	千本英史教授	言語文化学科	研究	日本の古典偽書について
	平成23年9月28日	西村雄一郎准教授	人文社会学科	研究	GPSと日常生活の地理学
	平成23年11月30日	西村さとみ助教	人文社会学科	研究	国風文化再考—和歌のことばとことば
	平成24年3月20日	西村拓生教授	人間科学科	教育	教育システム研究開発センターの高等教育研究プロジェクトについて
平成24年度	平成24年6月23日	野村鮎子教授	言語文化学科	教育	女性エンパワメントと文学部共通科目「学ぶことと女性のライフスタイル」
	平成24年9月5日	中川千帆准教授	言語文化学科	研究	「トワイライト」サーガにみる少女たちのセクシュアリティ
	平成24年11月28日	成瀬九美教授	人間科学科	研究	相互交流場面にみられる身体的同調過程への興味
	平成25年2月6日	高岡尚子准教授	言語文化学科	研究・教育	『恋をする、とはどういふことか—ジェンダーから考えることばと文学』ができるまで
	平成25年3月19日	小川伸彦教授	人文社会学科	研究	〈遺産化現象の社会学〉への試み
平成25年度	平成25年6月19日	鈴木広光教授	言語文化学科	研究	多言語蒐集への情熱と活字製作—「主の祈り」の博言集はなぜ、どのように編まれたのか？
	平成25年9月25日	河上麻由子准教授	人文社会学科	研究	古代アジアの仏教と王権と対外交渉—日本と中国を中心に—
	平成25年11月27日	石坂友司准教授	人間科学科	研究	オリンピックの遺産の社会学—長野オリンピックとその後の10年—
平成26年度	平成26年7月23日	浅田晴久講師	人文社会学科	研究	インド北東部、プラマプトラ川渓谷の自然環境と地域社会
	平成26年9月24日	鈴木康史准教授	人間科学科	研究	福島中佐のシベリア横断の研究—近代日本の冒険・探検の社会史の試み
	平成27年2月4日	須賀あゆみ准教授	言語文化学科	研究	言葉探しと認識探求—相互行為における指示の一面—
平成27年度	平成27年7月22日	功刀俊雄教授	人間科学科	研究	GHQ (CIE) の検定教科書検閲 (保健 (中学・高校) の場合)
	平成27年12月16日	田中希生助教	人文社会学科	研究	歴史と法の外部について
	平成28年2月3日	吉川仁子講師	言語文化学科	研究	夏目漱石の後期作品について

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－14：保護者説明会アンケート結果)

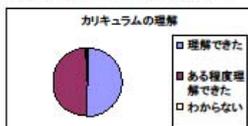
文学部新入生保護者説明会 (平成27年度) アンケート集計結果
[平成27年4月4日実施]

アンケート回答総数 115

(説明会参加家族数 126 休学者を除き出席率 80.8%)

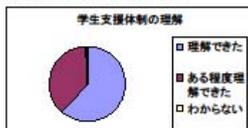
Q1 文学部のカリキュラムについて、ご理解いただけましたか？

理解できた 58
ある程度理解できた 56
わからない 1



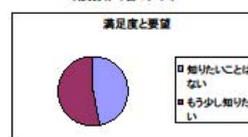
Q2 学生の支援体制について、ご理解いただけましたか？

理解できた 71
ある程度理解できた 43
わからない 1



Q3 「もう少し知りたい」と思われた項目はありますか？ (複数回答あり)

教育カリキュラム 31
大学生活の支援 7
卒業後の進路 31
ない 54



○ 自由記述より

- ・奈良女子大学の全体像について知ることができて、今後の娘の学生生活を支えていくうえでとても有意義な時間でした。
- ・保護者にとっても大変勉強になる会でした。きめ細やかな対応をしていただけることがよくわかり安心して預けることができます。
- ・先生方の「勉強すること、学ぶことは楽しい」「この楽しさをぜひ伝えたい・味わってもらいたい」という気持ちが強く感じられ、とても心強く感じました。娘がうらやましくらいです。
- ・文学部が、子供の人間的成長に期待できると感じました。
- ・高校時代に、自分の学びたいことが何か、なかなか決められなかった娘ですが、オープンキャンパスで体験授業を受けて (和歌の話でした)、文学をやってみたいと思うようになりました。大学では、大学時代にしかできないことをしっかりとやってほしいと思います。どんな卒論になるのか楽しみです。
- ・はじめての大学生活が不安でしたが、いろいろなサポート体制があることがわかり心強いです。とても手厚い学校に入学できた事でとても安心しました。
- ・少人数クラスでのフォローに安心感を持ってました。
- ・文学部の1年次生の担任制、非常にありがたい制度だと思います。
- ・大学に保護者説明会があるなんて時代だなあと感じながらも参加させていただきまして。寮生活になり、親元をはなれることとなり不安でしたが、今回参加させていただけたおかげで吹っ切れました。子離れできそうです。

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－21：文学部専門およびキャリア科目のインターンシップ実施状況)

区分	科目名	正課/非正課	期間	実習時期	H25受講生	H26受講生	H27受講生	備考
文・専門	文化庁 77学インターンシップA	正課	10日	前期	19	12	16	
	文化庁 77学インターンシップB	正課	10日	後期	2	6	4	
	子ども臨床学インターンシップ実習	正課	10日	不定期	12	17	10	改組に伴って廃止予定
キャリア教育科目	地域との対話Ⅰ	正課	5日	前期	-	13	10	H26はキャリアデザイン・ゼミナール (探求型職場体験Ⅰ・Ⅱ)
	地域との対話Ⅱ	正課	5日	後期	-	11	8	
	インターンシップ1 (社風発見インターンシップ早春篇)	正課	3~5日	後期	-	11	26	H26はキャリアデザインゼミナールで開講
	インターンシップ2 (奈良県大学連合インターンシップ)	正課	10日	前期	-	-	29	H27より正課化。「正課外」より移動
	インターンシップ3 (社風発見インターンシップ真夏篇)	正課	5~10日	前期	-	-	8	H27新設
非正課	正課外インターンシップ (官公庁・経済団体・企業等)	非正課	5~10日		36	36	34	大学が公式で紹介するもの

(別添資料Ⅱ - I - 25 : 「まほろば叢書」創刊号、第5巻、6巻の表紙)



(別添資料Ⅱ - I - 26 : スポーツ科学の地域貢献 (一例))

フォローアップ研修会

—奈良県ならびに市町村が推進する「健康なら21計画」と連携して、様々な世代を対象とした運動プログラムを開発し、その指導者を育成(参加者は40~50名、シンポジウムは約100名)

年度	日程		形態	プログラムテーマ
22年度	第1回	6月12日(土)	講義	夏の環境と運動
			実習	夏の環境と運動—安全な活動をめざして
	第2回	9月4日(土)	講義	栄養と運動
			実習	体力測定の実際
第3回	11月27日(土)	シンポジウム	環境とからだ	
第4回	2月5日(土)	講義	健康増進に役立つ食事と運動	
		実習	弾み、やすく動きとリズム	
23年度	第1回	6月4日(土)	講義	やわらかい運動・スポーツを考える
			実習	やわらかいスポーツ—スポーツのすすめ
	第2回	9月3日(土)	講義	加齢と体力を考える
			実習	体力測定
第3回	11月26日(土)	シンポジウム	暮らしの充足とスポーツ—からだはどう向き合うか—	
第4回	2月4日(土)	講義	地域における指導の課題	
		実習	指先までダンスしよう	
24年度	第1回	5月19日(土)	講義	歩き方分析からからだの個性に気づこう
			実習	からだほぐしとゆがみ改善
	第2回	7月28日(土)	講義	呼吸力・イメージ力を用いたトレーニング実践について
			実習	個別性を高めた最適筋トレ指導実践—膝痛、腰痛予防改善トレーニングを中心に
	第3回	9月8日(土)	講義	受講者サロン「運動支援活動の取り組みと課題」
実習			体力測定	
第4回	12月8日(土)	シンポ	幼児の運動と遊び	
25年度	第1回	5月18日(土)	実習	ポッチャ、ソフトバレーボール、体力測定
			講義	スポーツイベントを支えるボランティアシニア
	第2回	7月20日(土)	実習	子ども遊びでつながろう
			実習	地域で活動するフォローアップメンバーによる実践紹介
	第3回	9月7日(土)	講義	受講者サロン「運動支援活動の取り組みと課題」
シンポジウム			「新しい公共」を担う総合型地域スポーツクラブ	
第4回	12月7日(土)	実習	ダンスセラピー/ワーキンググループ”プロセス”	
		講義	ボディワーク体験/DMT(ダンスムーブメントセラピー)	
26年度	第1回	5月17日(土)	実習	体力測定、ポッチャ?
			講義	中高年競技スポーツ選手のスポーツ活動と「健康」
	第2回	7月12日(土)	実習	身近なものでゲーム作り
			実習	地域で活動するフォローアップメンバーによる実践紹介
	第3回	9月6日(土)	講義	受講者サロン「運動支援活動の取り組みと課題」
シンポジウム			スポーツのススメ	
第4回	11月29日(土)	実習	ダンスセラピー/ワーキンググループ”プロセス”	
		講義	DMT(ダンスムーブメントセラピー)—違いが教えてくれること	
27年度	第1回	5月16日(土)	実習	体力測定
			講義	体力測定の諸指標を読み解く
	第2回	7月4日(土)	講座	なぜ人びとは健康を追い求めるのか
			実習	生活とともにある体操—奈良女子大学から生まれた3つの体操
	第3回	9月5日(土)	講義	地域で活動するフォローアップメンバーによる実践紹介
実習			受講者サロン「運動支援活動の取り組みと課題」	
第4回	11月28日(土)	シンポジウム	健康について考える—こころとからだのアプローチ	
第5回	2月6日(土)	実習	世界スケールの多様な健康観をサポートする	

(別添資料Ⅱ－Ⅰ－29：高等学校訪問による模擬講義)

年度	出講先	実施日	出講者	テーマ
平成22年度	鳥取県立八頭高等学校	平成22年10月13日	柳澤有吾	「人間科学」への招待
	大阪府立北千里高等学校	平成22年11月4日	内田聖二	東は東、西は西？
	帝塚山高等学校	平成23年2月23日	千本英史	文学と偽書について
平成23年度	京都橋高等学校	平成23年9月24日	谷口洋	孔子の授業をのぞいてみよう
	大阪府立高津高等学校	平成23年10月6日	鈴木広光	「ニホン」が「ニッポン」か？
	和歌山県立田辺高等学校	平成23年10月27日	高岡尚子	フランス語とフランス文学
	京都府立南陽高等学校	平成23年11月10日	水垣源太郎	社会現象を測定する
平成24年度	京都橋高等学校	平成24年9月29日	西村さとみ	歴史のなかの災害
	育英西高等学校	平成24年10月3日	中川千帆	『トワイライト』を読む—現代アメリカ文学の女性—
	京都府立南陽高等学校	平成24年11月8日	水垣源太郎	家族とは誰のことか
	京都府立洛北高等学校	平成24年11月16日	大平幸代	中国語ってどんな言葉？—言葉を通して文化を知ろう—
平成25年度	西宮市立西宮高等学校	平成25年9月3日	中山満子	社会心理学入門
	育英西高等学校	平成25年10月9日	鈴木広光	大学では古文をこう読む
	大阪府立高津高等学校	平成25年10月10日	中田大貴	スポーツの才能とは？—相対的年齢効果による制約—
	奈良女子大学附属中等教育学校	平成25年11月6日	小川伸彦	高校生が社会学を大学で学ぶための基礎知識
平成26年度	西宮市立西宮高等学校	平成26年9月2日	本山方子	学びの心理学
	大阪府立高津高等学校	平成26年10月9日	中山満子	社会心理学から考えるインターネット
	育英西高等学校	平成26年10月15日	岡崎真紀子	和歌を〈読むこと〉と〈詠むこと〉
	静岡市立高等学校	平成26年10月30日	野村鮎子	「文学部」で学ぶ
	四天王寺高等学校	平成26年11月21日	小川伸彦	文学部で学ぶということ
平成27年度	愛媛県立松山東高等学校	平成27年6月10日	小川伸彦	文学部で学ぶということ
	香川県立高松第一高等学校	平成27年6月11日	小川伸彦	文学部で学ぶということ
	兵庫県立川西緑台高等学校	平成27年7月8日	齋藤美和	文学の言葉—比喩表現とイギリスのエムブレム—
	兵庫県立西宮香風高等学校	平成27年7月15日	本山方子	子どもと遊びの発達学
	奈良県立平城高等学校	平成27年9月17日	鈴木広光	オリジナルか？パクリか？—文学表現の社会史—
	京都府立南陽高等学校	平成27年11月5日	鈴木広光	オリジナルとパクリの文化史
	和歌山県立向陽高等学校	平成27年11月11日	内田忠賢	近世城下町と都市伝説
	京都府立洛北高等学校	平成27年11月13日	大平幸代	中国語ってどんなことば？—言語を学んで文化を知ろう—
	四天王寺高等学校	平成27年12月10日	磯部 敦	文学部で学ぶということ

(別添資料Ⅱ－Ⅱ－2：学術誌に掲載された優秀卒業論文等の例)

年度	当時の所属	氏名	概要	論文名および掲載誌
平成22年度	言語文化学科4年	石井瞳	言語情報学コースの卒論の学会誌掲載	石井瞳『「だから」と『それで』』英語学英米文学論集(2011)37, 25-39, 奈良女子大学英語英米文学会.
	言語文化学科4年	近藤久美子	言語情報学コースの卒論の学会誌掲載	近藤久美子『The Functions of <i>You Know</i> as Politeness Strategies』英語学英米文学論集(2011)37, 41-56, 奈良女子大学英語英米文学会.
	言語文化学科4年	當内佐保	言語情報学コースの卒論の学会誌掲載	當内佐保『現代の新聞英語の諸相』英語学英米文学論集(2011)37, 57-74, 奈良女子大学英語英米文学会.
平成23年度	人文社会学科4年	小林真利奈	歴史学コースの卒論の学会誌掲載	小林真利奈『菅原重三郎と寛政の出版統制』学苑史苑58号,(2013.2), 1-18, 奈良女子大学史学会.
	人間行動科学科4年	松原未季	子ども臨床学コースの卒論の学会誌掲載	松原未季・本山方子『幼稚園4歳児の対人葛藤場面における協同的解決：非当事者の幼児による介入に着目して』保育学研究(2013), 51(2), 187-198.
	言語文化学科4年	原口幸乃	日本アジア言語文化学コースの卒論の学会誌掲載	原口幸乃『「寝」の行方—「寝」と「寝」との関係』叙説40,(2013.3)135-146, 奈良女子大学日本アジア言語文化学会.
	言語文化学科4年	刀祢睦月	日本アジア言語文化学コースの卒論の学会誌掲載	刀祢睦月『副詞「たしかに」と終助詞』叙説40,(2013.3), 339-332, 奈良女子大学日本アジア言語文化学会.
平成24年度	人文社会学科4年	雲下愛子	歴史学コースの卒論の学会誌掲載	雲下愛子『延喜・天曆聖代観について』日本史の方法10,(2013.3), 5-25, 奈良女子大学日本史の方法研究会.
	言語文化学科4年	守田 幸	日本アジア言語文化学コースの卒論の学会誌掲載	守田 幸『熊本県方言「ば」の談話における機能について』叙説41,(2014)69-84, 奈良女子大学日本アジア言語文化学会.
	人間科学科4年	二宮麗	総合心理学コースの卒論の本学年報への掲載	中山満子・二宮麗『Twitterを介したつながりの感覚：女子大学生へのインタビュー調査から(特集 差異と交感の人間学)』奈良女子大学文学部研究教育年報(11), (2014), 83-90.
平成25年度	人間科学科4年	荒川奈摘	総合心理学コースの卒論が教員との共同執筆で英語論文として学会誌に掲載	Nakata H, Arakawa N, Suzuki C, Nakayama M. Modality difference in N2 and P3 components between visual and auditory Go/No-go paradigms. Journal of Psychophysiology, 2015 (in press).
	人文社会学科4年	松岡由佳	地域環境学コースの卒論の学会誌掲載	松岡由佳『地域社会における精神障がい者の受容過程—愛媛県南宇和郡愛南町を事例として—』地理学評論 88-5, 2015, 498-513.
	人文社会学科4年	松延花江	歴史学コースの卒論の学会誌掲載	松延花江『慶応三年のええじゃないかと幕末の民衆』日本史の方法第11号,(2014.7), 35-50, 奈良女子大学日本史の方法研究会.
	言語文化学科4年	赤松由美	欧米言語文化学コースの卒論の学会誌掲載	赤松由美『矛盾学『MXはXでない』の分析』英語学英米文学論集(2014)40, 99-111, 奈良女子大学英語英米文学会.
	言語文化学科4年	山村葵	欧米言語文化学コースの卒論の学会誌掲載	山村葵『直喩におけるasとlike』英語学英米文学論集(2014), 40, 113-133, 奈良女子大学英語英米文学会.
平成26年度	人文社会学科3年	品川愛弓・麓有希・水落しほり・加藤弓枝・岡田亜弓	コロブリ(卒論の研究テーマを擬人化し、様々なメディアを使って発信する文化メディア学コース有志のプロジェクト)が、武庫川女子大学の生活美学研究所の目にとまり、依頼により執筆	品川愛弓・麓有希・水落しほり・加藤弓枝・岡田亜弓『「コロブリ」=コロク・プリンセスの生成と展開』情報美学研究, 4(2015), 119-136, 武庫川女子大学生活美学研究所.
	言語文化学科4年	西村恵美	欧米言語文化学コースの卒論の学会誌掲載	西村恵美『自虐アイロニーに関する一考察—その心理構造と本質的機能をめぐって—』英語学英米文学論集(2015), 41, 21-41, 奈良女子大学英語英米文学会.
	言語文化学科4年	今中麻祐子	欧米言語文化学コースの卒論の学会誌掲載	今中麻祐子『中国語、日本語の母語話者とは母語話者の会話における修復行為について』英語学英米文学論集(2015), 41, 43-62, 奈良女子大学英語英米文学会.
	言語文化学科4年	住吉紅実	欧米言語文化学コースの卒論の学会誌掲載	住吉紅実『『とか』の機能的分析』英語学英米文学論集(2015), 41, 63-79, 奈良女子大学英語英米文学会.

(別添資料Ⅱ－Ⅱ－3：留年、休学、退学の状況)

第1期	16年度			17年度			18年度			19年度			20年度			21年度		
	休学	留年	退学	休学	留年	退学	休学	留年	退学	休学	留年	退学	休学	留年	退学	休学	留年	退学
1年	0		0	0		0	1		2	0		0	1		1	0		0
2年	0		1	3		2	3		1	2		1	2		2	1		3
3年	11		0	7		1	7		0	4		2	4		0	3		1
4年	9		4	12		2	11		2	15		2	12		4	14		3
計	20(12)	30	5	22(11)	25	5	22(9)	28	5	21(5)	26	5	19(5)	41	7	15(3)	42	7

第2期	22年度			23年度			24年度			25年度			26年度			27年度		
	休学	留年	退学	休学	留年	退学												
1年	1		0	1		1	3		0	1		1	0		0	1		2
2年	1		1	0		1	2		1	0		1	3		0	1		1
3年	1		1	2		0	0		1	3		1	2		2	11		0
4年	19		3	13		6	12		12	13		4	7		2	15		8
計	22(4)	56	5	16(1)	43	8	17(2)	42	14	17(6)	40	7	12(6)	40	4	28(11)	32	11

()はうち留学によるもの

(別添資料Ⅱ－Ⅱ－5：中国語検定受験者数および合格者数)

H22～27年実施	4級				3級				2級			
	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率
第72回(H22・11)	30	25	83%	60%	8	6	75%	41%	3	1	33%	16%
第74回(H23・6)	4	3	75%	55%	22	10	45%	37%	3	0	0%	16%
第75回(H23・11)	17	15	88%	47%	7	7	100%	31%	5	0	0%	16%
第76回(H24・3)	3	3	100%	43%	17	4	24%	36%	4	0	0%	24%
第78回(H24・11)	14	11	79%	56%	7	3	43%	38%	2	0	0%	0%
第79回(H25・3)	6	3	50%	49%	13	6	46%	35%	0	0	—	—
第81回(H25・11)	20	15	75%	45%	2	1	50%	27%	1	1	100%	19%
第82回(H26・3)	3	3	100%	47%	9	2	22%	25%	1	0	0%	17%
第84回(H26・11)	6	5	83%	51%	2	2	100%	42%	0	0	—	—
第85回(H27・3)	6	6	100%	57%	12	4	33%	36%	0	0	—	—

準4級は易しすぎるため受験者なし。4級を受験するのはほぼ1回生。数は少ないが、11月に4級、3月に3級に合格する1回生がいることは、初年度における中国語教育のレベルが高いことを示す。

(別添資料Ⅱ－Ⅱ－6：フランス語検定受験者数および合格者数)

H22～27年実施	4級				3級				準2級				2級					
	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	一次合格者数	二次合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	一次合格者数	二次合格者数	合格率	検定全体の合格率
2013年(H25)春	3	3	100%	70.9%	6	6	100%	63.6%	3	3	2	66.7%	54.3%	2	1	1	50%	33.2%
2013年(H25)秋	8	8	100%	68.0%	11	6	55%	54.6%	5	4	4	80.0%	52.3%	1	1	1	100%	32.0%
2014年(H26)春	3	3	100%	77.3%	5	4	80%	75.7%	0	0	0	—	55.5%	3	0	0	0	31.7%
2014年(H26)秋	9	6	75.0%	78.6%	5	5	100%	59.7%	3	2	2	66.7%	60.9%	1	1	1	100%	32.4%
2015年(H27)春	0	0	—	84.5%	1	1	100%	65.9%	2	1	1	50.0%	53.6%	3	1	1	33.9%	32.9%

仏検は上から、1級・準1級・2級・準2級・3級・4級・5級の7級。準2級から2次の面接口頭試験が加わる。通常の週2コマのフランス語授業を受けている場合、秋に5級、翌年の春に4級というのが一般的だが、本学では、週4コマ授業のため、多くの学生は5級を受けず、4級からスタートする。

(別添資料Ⅱ－Ⅱ－7：ドイツ語検定受験者数および合格者数)

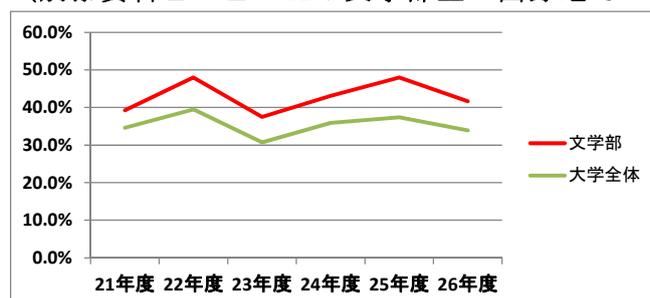
H22～27年実施	5級				4級				3級				2級				準1級				
	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	合格者数	合格率	検定全体の合格率	受験者数	一次合格者数	二次合格者数	合格率	検定全体の合格率
2010年(H22)春	0	0	—	91.7%	2	2	100%	74.2%	4	1	25%	52.4%	1	0	0%	50.7%					
2010年(H22)秋	0	0	—	84.5%	2	2	100%	66.2%	11	9	82%	52.1%	2	1	50%	52.1%	0	0	0	—	29.2%
2011年(H23)春	0	0	—	93.6%	2	2	100%	79.1%	6	4	67%	52.4%	0	0	—	51.1%					
2011年(H23)秋	0	0	—	88.0%	2	2	100%	77.7%	4	3	75%	52.1%	5	2	40%	51.8%	2	1	0	0%	28.6%
2012年(H24)春	22	19	86%	91.0%	1	1	100%	75.3%	3	2	67%	55.0%	2	1	50%	42.9%					
2012年(H24)秋	0	0	—	86.1%	7	5	71.0%	54.3%	9	8	89%	46.7%	3	0	0%	42.7%	0	0	0	—	31.4%
2013年(H25)春	0	0	—	100%	0	0	—	63.9%	2	2	100%	54.6%	5	2	40%	45.9%					
2013年(H25)秋	0	0	—	85.7%	5	5	100%	61.9%	6	5	83%	52.3%	7	5	71%	51.9%	1	0	0	0%	30.9%
2014年(H26)春	0	0	—	88.4%	0	0	—	83.4%	3	3	100%	53.7%	2	1	50%	43.5%					
2014年(H26)秋	1	1	100%	84.9%	6	6	100%	69.3%	8	8	100%	55.6%	7	1	14%	40.2%	1	1	1	100%	27.6%
2015年(H27)春	0	0	—	87.2%	0	0	—	77.5%	6	5	83%	54.7%	3	1	33%	46.0%					

独検は上から、1級・準1級・2級・3級・4級・5級の全6級。春期は2-5級のみ実施。秋期は全級実施。準1級と1級は二次の口述試験が加わる。本学では、週4回の履修をする文学部を中心に、1回生の秋には、4級に必ず合格しうる実力をもち、さらに少なからぬ者がその時点で3級を受験して、高い確率で合格する。2回生進級後に3級を受験して、好成績で合格する者も多く、そこからさらに上を目指して努力する者もいる。例えば本学の規模において2級受験者数がこれだけ存在することは頼もしい。学部生のうちに準1級に合格した者は、みなの模範ともなっている。

(別添資料Ⅱ－Ⅱ－8：文学部学生の受賞等)

在籍区分	当時の所属	氏名	項目	受賞日等	概要
学部生	文学部 1年生	足立早紀	2012年度秋季ドイツ語技能検定試験4級成績優秀者全国第3位)	2013/3/10	2012年度秋季ドイツ語技能検定試験において4級第3位の成績で合格。
学部生3回生時	人文社会科学科3年生	堀内しきぶ	JICA国際協力レポーター2011	2013/08/20～28	JICAの事業である「国際協力レポーター」に応募し、書類審査の結果選ばれてケニアを視察した。現地では女性の日常生活の現状を調査し、その改善策を検討した。JICAのHP上で報告書が掲載された。
	人間科学科4年生	川畑美奈穂	健康心理学会第27回優秀ポスター発表奨励賞	2013年度	総合心理学コースの2013年度の卒論「青年期の友人関係とアサーションにおけるキャラ化の影響」がポスター発表奨励賞を受賞。
	言語文化学科4年	野志亜弥香	日本・ベルギー友好150周年公式ロゴコンテスト大賞受賞	2015/1/20	2016年に外交・友好関係樹立150周年を迎えるベルギー・日本の準備として、公式ロゴの一般公募が行われ、187点にのぼる応募作品の中から大賞に選ばれた。2016年を通して、周年事業に関する活動のあらゆる場面で使用される予定。
学部生3回生時	人文社会科学科3年生	西田菜月	奈良県友好交流を担う次世代養成事業に採択	2015/09/9～13	奈良県主催の「奈良県友好交流を担う次世代養成事業」に応募し、書類審査の結果選考され、北京市と陝西省西安市を訪問した。日本大使館での大使との面会や、陝西師範大学の学生との交流を行い、当該事業に貢献した。
	人間科学科2年生	廣木佳蓮	『おーい！おーちゃん！－自閉症の弟と私のハッピーデイズ』（黎明書房）を出版	2015/9/10	自閉症の弟「おーちゃん」との保育所から、小学校、中学校、高校までの面白すぎる毎日を、「お前の弟、ガイジやる！」と言われ悲しかったことなども交え、姉の目から語る。障がい児・者への理解につながる好エッセイ。

(別添資料Ⅱ－Ⅱ－12：文学部生の出身地での就職者の割合)



(別添資料Ⅱ－Ⅱ－15：就職先アンケートの自由記述)

自由記述	
文学部	大変優秀な人材を弊社に頂いております。
	かなりひかえぬ感じで仕事をしています。もう少し必要な技術などについて、積極的に吸収したり、考えたりすることができれば最高です。
	教員2年目で、担任として日々生徒とともに活動されています。歴史の専門知識を持たれた教員として期待しています。
	能力、資質は高いレベルだと思っております。特に意見ありません。
	真面目に仕事に取り組み、新しい知識を得ることは積極的です。勉強をコツコツやることが得意という印象がある。一方で、自分から周辺に声をかけて、仕事を進めることは苦手。行動力をUPするような教育ができれば、理想的な人材を多く産出できるのではないのでしょうか。期待していますので、よろしく願います。
	大変、良い人材を育成して頂いており、職能だけでなく、人間として、素晴らしい教員です。
	一を聞いて十を知る、大変素晴らしい理解力をお持ちです。老若男女、様々な人間が集まる会社の中で、いかに自分の見識を伝え、回りを動かしていくか、その発信力にはこれからの成長に期待したい部分もあります。今後社会経験を積まれて、学生時代に身に付けた豊かな教養を実践に活かしていかれることと思います。大変期待しております。
	グローバルな視点を含め、仕事に対して、幅広い視野、柔軟な思考性を持った人材を育てていただきたく存じます。これからも期待しています。
	状況判断や分析能力に優れた人材の育成が社会への貢献につながると考えます。又、本人が社会に出て生き抜いていくためにも、重要な要素だと思います。今後とも教育の質の向上と、人材教育の向上に期待しております。
	能力方面を見て採用しがちですが、結果として長続きするかどうかは人間性ということになります。昨今は、職場において家庭教育の延長もせねばならないような状況ですが、出来るならば、学生時代に様々な経験を積み、就職した後は社会人教育と職業知識の修得に専念できるようにしていただければと思います。
	学生の皆様は、真面目な方が多いと思います。真面目さは大切な事ですが、ただそれだけでは、社会に出てから色々な事に対応していくのは、大変かなと感じます。社会人での身だしなみ、髪型など、すっきりと誰から見ても、魅力的でセンスの良さも少なからず必要になります。人は第一印象で、だいたいその人の事を見てしまう事も有る為、センスも大切かと思ます。
	今後とも、有能な人材を育成して下さい。
	一年目以降の、“のび”を強く感じました。今後の皆様のご活躍に期待しております。
	困難な場面に遭遇しても、前向きに物事を捉え、時間を惜しまず頑張っています。

教 育

理 学 部

(別 添 資 料)

目 次

別添資料Ⅰ－5：理学部の各学科のポリシー	P 1
別添資料Ⅰ－6：学生の受入状況	P 2
別添資料Ⅱ－Ⅰ－1：平成 27 年度 理学部・自然科学系内、及び全学委員会委員	P 3
別添資料Ⅱ－Ⅰ－2：理学部 FD 活動状況	P 4
別添資料Ⅱ－Ⅰ－3：平成 26 年度理学部志願者等の出身地一覧	P 4
別添資料Ⅱ－Ⅰ－4：理学部小中高生向け活動一覧（平成 22 年度）	P 5
別添資料Ⅱ－Ⅰ－7：理学部コースツリー例（物理学コース関連科目 相関図）	P 6
別添資料Ⅱ－Ⅰ－8：生物科学科・生物科学コース専門教育科目の学年配置と、階層性にもとづく科目間の関連性	P 6
別添資料Ⅱ－Ⅰ－9：平成 27 年度「基礎遺伝学」シラバス	P 7
別添資料Ⅱ－Ⅰ－10：講義・演習・実験・実習・複合における TA の配置例（調査年度：平成 27 年度）	P 8
別添資料Ⅱ－Ⅱ－3：学生による授業評価アンケート報告書 例（調査年度：平成 24 年度）	P 9
別添資料Ⅱ－Ⅱ－4：学生による授業評価アンケート報告書 授業改善例（平成 24 年度）	P10

別添資料 I—5：理学部の各学科のポリシー

(ウェブページ http://www.nara-wu.ac.jp/rigaku/2014/01_policy_diploma.html で公開)

数物科学科のアドミッションポリシー

【教育理念】数物科学科では、数学と物理学が融合・連携した基礎科学の専門教育を行います。その教育によって自分の専門分野に加えて他分野の知識も備え、新たな課題を発見し斬新な方法論を開拓できる女性人材を育てることを目指します。【求める学生像】数学、物理学に興味を持ち、新たな課題を発見し斬新な方法論を開拓できる能力を身につけ、社会に役立てる意欲のある学生の入学を求めます。入学時までには数学、物理学だけではなく、自然科学全般や英語についても基礎的な素養を身につけておくことを希望します。

化学生命環境学科のアドミッションポリシー

【教育の理念】化学生命環境学科では、化学、生物科学、自然環境科学が連携した理系共通基礎教育とそれらの実践的な専門教育を通して、物質や生命とそれらを取りまく地球環境を総合的にとらえる視野をもち、様々な分野で活躍できる理系女性人材を育てることを目指します。【求める学生像】化学生命環境学科では、自然科学全般に興味をもち、さらに希望する専門コースの高度で先端的な知識を学ぶと同時に「自ら問題を発掘し・考え・解決する能力」を身につけ、将来は広く社会において人類が直面する諸問題の解決に取り組む意欲のある学生の入学を求めます。そのため、高校の数学や理科を広く学んでいること、特に理科(物理、化学、生物、地学)の中から少なくとも2科目を深く学習していることが必要です。また、現代の自然科学を学習する上で英語は必要不可欠ですので、英語を読み・書き・聞き・話すのに十分な能力を備えていることを希望します。また、日本語を正しく理解し・表現する能力も当然求められます。

数物科学科のカリキュラム・ポリシー

数学と物理学が融合・連携した基礎科学の専門教育を行うための科目を設定する。1年次では、数学と物理学の基礎を学ぶための科目を、学科共通の必修科目として設置する。2年次以降では、学生は、数学コース、物理学コース、数物連携コースの3つのコースのいずれかに所属し、各コースの専門的科目のみならず、学生の希望に応じて他コースの専門科目も履修させる。特に、専門的知識の習得だけでなく、広く数学と物理学の方法論を学ぶための科目を設置する。4年次に、数学、物理学の研究の最先端を体験し、新たな課題の発見能力、その課題の解決能力を培うために、卒業研究を設置する。

化学生命環境学科のカリキュラム・ポリシー

化学生命環境学科では化学・生物科学・環境科学だけでなく数学・物理科学・情報科学をも含む広範囲なカリキュラムの中から、自らの目標に応じて幅広い基礎知識やコースにおける専門知識・技能、さらにはそれらの応用・実践能力を修得するよう、学年に応じて必修科目・選択必修科目・選択科目等を系統的に履修する。学科専門科目には学科共通科目とコース専門科目(化学系、生物科学系、環境科学系)があり、その内容や目的に応じて基礎、専門、応用・実践の3区分に分類されている。1年次では、主として学科共通科目やコース専門科目(基礎科目)を履修し、自然科学に関する幅広い基礎知識を修得する。2～3年次では、所属するコースの基礎から先端に至る専門科目を系統的に履修し、専門的知識や技能を修得する。4年次には、応用・実践科目である卒業研究 I～IV や課題研究 I～IV を履修し、先端研究に参画することにより、それまでに修得した基礎知識や専門知識・技能を実際に応用し実践する能力を培う。このような科目では、学生自らが学び・考える取り組みを通じて、課題を発見する力とそれらの解決に取り組む意欲や能力を育てる。また、卒業研究発表等の学生が主体的に行うプログラムを通じて、論理的思考力とそれらにもとづくコミュニケーション能力を培う。

数物科学科のディプロマ・ポリシー

絶えず変動する現代社会の諸現象に対して、柔軟にかつ論理的に取り組む解決する能力を持つ理系女子を育成することを目的として、以下に示す資質・能力を修得させる。

- ・抽象的で創造的な学問研究による、柔軟な思考力。論理的な問題発掘および展開能力により、科学分野のみならず文化・教育分野に貢献できる能力
- ・実験的及び理論的学問研究による、高度な問題解決能力。創造的に課題を探求し、高度化した科学技術のさまざまな分野で貢献できる能力
- ・数学および物理学の理論的学問研究による、幅広い問題解決能力。次世代の人材育成、科学技術システムの改革、豊かな科学文化の普及や創造に貢献できる能力。

化学生命環境学科のディプロマ・ポリシー

化学生命環境学科では、自然科学に関する幅広い基礎知識や各コースの専門的な知識・技能をもとに、急速に変化する現代社会の理系分野において自ら課題を見出しその解決に取り組む能力を修得させる。また、自然科学に関する基礎及び専門知識やそれらにもとづく論理的思考力を社会の様々な場面で役立てるためのコミュニケーション能力を修得させる。

- ・自然科学に関する幅広い基礎知識に基づいて自然科学に関する事象を俯瞰し理解する能力
- ・専門分野の高度な知識や技能をもとに、自ら課題を発見しその解決に取り組む能力
- ・基礎及び専門知識やそれらにもとづく論理的思考力を社会の様々な場面で役立てるためのコミュニケーション能力

(各コースについても、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを設定し公表している。)

別添資料 I-6 : 学生の受入状況

平成22年度

		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
数学科	前期日程	17	60	19	17
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	10	72	13	10
	推薦	3	16	3	3
	私費外国人 留学生	若干名	0	0	0
	学科計	30	148	35	30
物理科学科	前期日程	18	35	20	18
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	12	68	17	12
	推薦	5	13	5	5
	私費外国人 留学生	若干名	1	0	0
	学科計	35	117	42	35
化学科	前期日程	26	76	27	26
	高大連携 専攻生 (若千名)	2	2	2	2
	後期日程	5	29	5	5
	推薦	4	29	4	4
	私費外国人 留学生	若干名	1	0	0
	学科計	35	137	38	37
生物科学科	前期日程	23	87	26	26
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	5	71	6	5
	推薦	7	32	7	7
	私費外国人 留学生	若干名	2	0	0
	学科計	35	192	39	38
情報科学科	前期日程	20	42	26	24
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	10	39	11	8
	推薦	10	28	10	10
	私費外国人 留学生	若干名	1	1	0
	学科計	40	110	48	42
理学部合計	前期日程	104	300	118	111
	高大連携 専攻生 (2名以内) (若千名)	2	2	2	2
	後期日程	42	279	52	40
	推薦	29	118	29	29
	私費外国人 留学生	若干名	5	1	0
	合計	175	704	202	182

充足率

数学	物理	化学	生物	情報	理学部
1	1	1.1	1.1	1.1	1.0

平成23年度

		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
数学科	前期日程	17	30	19	15
	高大連携 専攻生 (若千名)	1	1	1	1
	後期日程	10	90	15	11
	推薦	3	9	3	3
	私費外国人 留学生	若干名	2	1	0
	学科計	30	132	39	30
物理科学科	前期日程	18	41	19	18
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	12	65	17	13
	推薦	5	14	5	5
	私費外国人 留学生	若干名	1	1	0
	学科計	35	121	42	36
化学科	前期日程	26	51	30	27
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	7	64	11	10
	推薦	2	4	2	2
	私費外国人 留学生	若干名	1	0	0
	学科計	35	120	43	39
生物科学科	前期日程	23	43	23	20
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	5	33	8	7
	推薦	7	42	9	9
	私費外国人 留学生	若干名	3	1	1
	学科計	35	121	41	37
情報科学科	前期日程	20	58	22	19
	高大連携 専攻生 (若千名)	1	1	1	1
	後期日程	10	59	15	13
	推薦	10	22	10	10
	私費外国人 留学生	若干名	1	0	0
	学科計	40	141	48	43
理学部合計	前期日程	104	223	113	99
	高大連携 専攻生 (2名以内) (若千名)	2	2	2	2
	後期日程	44	311	66	54
	推薦	27	91	29	29
	私費外国人 留学生	若干名	8	3	1
	合計	175	635	213	185

充足率

数学	物理	化学	生物	情報	理学部
1	1.0	1.1	1.1	1.1	1.1

平成24年度

		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
数学科	前期日程	17	61	20	17
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	10	79	16	10
	推薦	3	18	3	3
	私費外国人 留学生	若干名	1	1	0
	学科計	30	159	40	30
物理科学科	前期日程	18	43	20	20
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	12	70	15	13
	推薦	5	5	5	5
	私費外国人 留学生	若干名	1	1	1
	学科計	35	119	41	39
化学科	前期日程	26	84	28	28
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	7	53	11	10
	推薦	2	11	2	2
	私費外国人 留学生	若干名	1	0	0
	学科計	35	149	41	40
生物科学科	前期日程	23	76	22	22
	高大連携 専攻生 (若千名)	2	2	2	2
	後期日程	5	63	6	6
	推薦	7	43	7	7
	私費外国人 留学生	若干名	6	1	1
	学科計	35	190	38	38
情報科学科	前期日程	20	38	23	23
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	10	67	11	10
	推薦	10	24	10	10
	私費外国人 留学生	若干名	0	0	0
	学科計	40	129	44	43
理学部合計	前期日程	104	302	113	110
	高大連携 専攻生 (2名以内) (若千名)	2	2	2	2
	後期日程	44	332	59	49
	推薦	27	101	27	27
	私費外国人 留学生	若干名	9	3	2
	合計	175	746	204	190

充足率

数学	物理	化学	生物	情報	理学部
1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1

平成25年度

		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
数学科	前期日程	17	28	18	18
	高大連携 専攻生 (若千名)	1	1	1	1
	後期日程	10	77	11	8
	推薦	3	13	3	3
	私費外国人 留学生	若干名	3	2	1
	学科計	30	122	35	31
物理科学科	前期日程	18	31	18	17
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	12	77	18	13
	推薦	5	16	5	5
	私費外国人 留学生	若干名	0	0	0
	学科計	35	124	41	35
化学科	前期日程	26	74	29	25
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	7	35	13	9
	推薦	2	5	2	2
	私費外国人 留学生	若干名	1	0	0
	学科計	35	115	44	36
生物科学科	前期日程	23	83	25	24
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	5	29	6	5
	推薦	7	29	7	7
	私費外国人 留学生	若干名	3	0	0
	学科計	35	145	38	36
情報科学科	前期日程	20	80	23	20
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	10	30	12	10
	推薦	10	20	10	10
	私費外国人 留学生	若干名	0	0	0
	学科計	40	130	45	40
理学部合計	前期日程	104	296	113	104
	高大連携 専攻生 (2名以内) (若千名)	1	1	1	1
	後期日程	44	248	60	45
	推薦	27	83	27	27
	私費外国人 留学生	若干名	7	2	1
	合計	175	636	203	178

充足率

数学	物理	化学	生物	情報	理学部
1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

平成26年度

		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
A型 数物科学科	前期日程	17	65	19	17
	高大連携 専攻生 (若千名)	1	1	1	1
	後期日程	9	84	13	10
	推薦	3	8	3	3
	私費外国人 留学生	若干名	0	0	0
	学科計	30	157	36	31
B型 数物科学科	前期日程	18	37	17	16
	高大連携 専攻生 (若千名)	1	1	1	1
	後期日程	11	53	18	9
	推薦	5	16	5	5
	私費外国人 留学生	若干名	1	0	0
	学科計	35	107	46	37
化学コース 化学生命環境 科学科	前期日程	23	55	27	25
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	4	60	5	3
	推薦	4	40	4	4
	私費外国人 留学生	若干名	1	0	0
	学科計	32	156	36	32
生物コース 生物生命環境 科学科	前期日程	23	73	27	26
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	4	27	4	4
	推薦	4	27	4	4
	私費外国人 留学生	若干名	2	1	0
	学科計	34	127	36	34
環境コース 環境科学科	前期日程	17	31	20	19
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	23	2	2	2
	推薦	4	12	4	4
	私費外国人 留学生	若干名	2	2	2
	学科計	21	68	28	27
理学部合計	前期日程	98	261	110	103
	高大連携 専攻生 (若千名)	2	2	2	2
	後期日程	32	298	43	28
	推薦	20	103	20	20
	私費外国人 留学生	若干名	6	3	2
	合計	150	671	178	155

充足率

数物科学	化学生命環境	理学部
1.0	1.1	1.0

平成27年度

		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
数物科学科	前期日程	35	54	39	37
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	20	79	29	24
	推薦	8	20	9	9
	私費外国人 留学生	若干名	0	0	0
	学科計	63	153	77	70
化学生命環境 科学科	前期日程	23	52	25	23
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	89	6	2	2
	推薦	4	21	4	4
	私費外国人 留学生	若干名	3	2	2
	コース計	165	37	31	
環境科学科	前期日程	23	42	25	25
	高大連携 専攻生 (若千名)	1	1	1	1
	後期日程	4	33	4	4
	推薦	4	21	4	4
	私費外国人 留学生	若干名	0	0	0
	コース計	143	38	38	
理学部合計	前期日程	17	37	19	19
	高大連携 専攻生 (若千名)	0	0	0	0
	後期日程	38	2	2	2
	推薦	4	22	4	4
	私費外国人 留学生	若干名	1	1	0
	コース計	98	26	25	
理学部合計	前期日程	98	185	108	104
	高大連携 専攻生 (2名以内) (若千名)	1	1	1	1
	後期日程	32	273	45	36
	推薦	20	96	21	21
	私費外国人 留学生	若干名	4	3	2
	合計	150	559	178	164

充足率

別添資料Ⅱ—Ⅰ—1：平成27年度 理学部・自然科学系内、及び全学委員会委員

理学部・自然科学系内 委員会委員等一覧

委員会等	選出方法
学科長 コース長 領域代表	数物科学科長
	化学生命環境学科長
	数学科長(数学科長・専攻長・領域代表)
	物理学科長(物理科学科長・専攻長・領域代表)
	数物連携コース長
	化学コース長(化学科長・専攻長・領域代表)
	生物科学コース長(生物科学科長・専攻長・領域代表)
	環境科学コース長(環境科学領域代表)
情報科学科長(情報科学専攻長)	
代議員	各コース選出の教授1名
入試企画委員会	委員長(全学入試委員・学部長指名)
	全学入試委員
	各学科1名
教育計画委員会	委員長(全学教育計画委員・学部長指名)
	各学科3名(教員1名以上を含む)
サイエンス・オープンラボ企画推進委員会	委員長(学部長指名)
	サイエンス・オープンラボⅡ(A)対応者
	サイエンス・オープンラボⅡ(B)対応者
	サイエンス・オープンラボⅡ(C)対応者
	サイエンス・オープンラボⅡ(D)対応者
学生支援委員会	委員長(全学学生支援委員・学部長指名)
	各学科2名
	委員長が必要と認めた者
研究企画推進委員会	委員長(学部長指名)
	全学研究企画推進委員
	評議員
	各学科2名
事業企画推進委員会	委員長(学部長指名)
	社会連携センター員
	評議員
	SOL企画推進委員長
	各学科1名

全学関係委員会委員・室員一覧

委員会等	選出方法	委員会等	選出方法
広報企画推進委員会	委員長(学部長指名)	研究会室室	室長指名(学部長推薦)
	全学広報企画委員	評価企画室	室長指名(評議員)
	入試企画部会長	広報企画室	室長指名(学部長推薦)
理学部安全衛生管理委員会	各学科2名	教育計画室	学部長指名 (教育計画委員長)
	委員長が必要と認めた者	入学試験委員会	
	各学科1名	ED推進委員会	評議員
理学部FD委員会	委員長(学部長指名)	学生支援室	学部長指名 (学生支援委員長)
	各学科1名	社会連携センター	センター長推薦 (各学科1名)
	委員長が必要と認めた者	臨床心理相談センター運営委員会	学部長推薦 (助教以上)
理学部評価委員会	委員長(全学FD推進委員・評議員)	セクシュアル・ハラスメント等防止・対策委員会	学部長推薦 ※1名は女性選出
	全学FD推進委員(准教授)	セクシュアル・ハラスメント等相談員	学部長推薦 ※1名は女性選出
	教育計画委員長	全学情報システム運用委員会	学部長推薦
男女共同参画推進委員会	各学科1名	情報セキュリティポリシーに基づく実施基準・実施手順の見直し検討作業部会	各学科1名
	委員長(学部長指名)	キャリア形成支援システム運営委員会	学部長推薦 (助教以上)
	部会長(自然科学系長)	記念館運営委員会	各学科1名(助教以上)
理学部情報システム運用委員会	部会長(自然科学系長)	倫理・人権委員会	評議員1名
	評議員	利益相反委員会	評議員
	本部会員	国際交流委員会	各学科1名(助教以上)
理学部・生活環境学部共通 実験室運営委員会	部会長(自然科学系長)	伊南情報センター運営委員会	各学科1名(助教以上)
	評議員	保健管理センター運営委員会	各学科1名(助教以上)
	本部会員	教育システム研究開発センター員	学部長推薦 (助教以上)
理学部イオンビーム実験室長	部会長(自然科学系長)	教育システム研究開発センター運営委員会	学部長推薦 (助教以上)
	評議員	附属学校部運営委員会委員	学部長推薦 (教授)
	本部会員	附属学校アカデミック・ガイダンス運営部門員	各学科1名(助教以上)
理学部イオンビーム実験室放射線取扱主任者	部会長(自然科学系長)	阪学研究倫理審査委員会	学部長推薦 (医学・医療の専門家)
	評議員	組織入DNA実験安全委員会	学部長推薦
	本部会員	安全主任者	学部長推薦 (組織入DNA研究者)
理学部イオンビーム実験室放射線取扱主任者	部会長(学部長)	研究倫理審査委員会	学部長推薦(評議員)
	全学情報システム運用委員会委員	アイトーブ総合実験室長	学部長推薦(講師以上)
	部局技術責任者の推薦により、学部長が任命	Ri総合実験室放射線取扱主任者	学部長推薦(第一種放射線取扱主任者免状所有者)
環境マネジメントシステム(EMS)検討専門部会	学部長推薦	理学部イオンビーム実験室長	学部長推薦(物理学領域の講師以上)
	学部長推薦(講師以上)	エクス線総合管理室長	学部長推薦(講師以上)
	各学科1名(助教以上)	交通対策専門部会	各学科1名(助教以上)
環境文化財発掘調査専門部会	学部長推薦	環境マネジメントシステム(EMS)検討専門部会	各学科1名(助教以上)
	学部長推薦(助教以上)	環境文化財発掘調査専門部会	各学科1名(助教以上)
	各学科1名(助教以上)	男女共同参画推進本部	各学科1名(助教以上)
将来計画検討専門部会	学部長推薦	将来計画検討専門部会	各学科1名(准教授以上)
	学部長推薦(助教以上)		
	各学科1名(助教以上)		

別添資料Ⅱ－Ⅰ－２：理学部FD活動状況

実施年度	区分	実施日	テーマ	講師所属・氏名等	参加者数
平成22年度	理学部FD講演会	平成22年11月30日	「就活革命－大学での学びと就職活動－」	勝グロウスアイ代表取締役・辻 太郎	35名
	理学部FD研修会	平成22年3月8日	「大学院修士課程の入学者確保のため、各学科はいかに取り組んでいるか」	各学科代表	60名
平成23年度	理学部FD講演会	平成23年9月14日	「学習意欲を高め、問題発掘能力をどう向上させるか 「クリッカーの活用を中心に」」	金沢大学大学院教授・青野 透	35名
	理学部FD研修会	平成24年3月8日	「初等教育、中等教育と理学部の連携事業」	各学科代表	44名
平成24年度	理学部FD研修会	平成24年12月5日	「授業評価アンケートからみえてくること」	各学科代表	45名
平成25年度	理学部FD研修会	平成26年1月8日	「理学部における卒業研究の現状と課題」	各学科代表	54名
平成26年度	理学部FD研修会	平成27年2月2日	「教養教育と改革とGPAについて」	教育システム研究開発センター長 西村拓生教授 理学部教育計画委員会委員長 山下 靖教授	30名
平成27年度	理学部FD研修会	平成28年1月22日	「学部改組1年後の状況について」	各学科・コース代表	43名

別添資料Ⅱ－Ⅰ－３：平成26年度理学部志願者等の出身地一覧

理学部

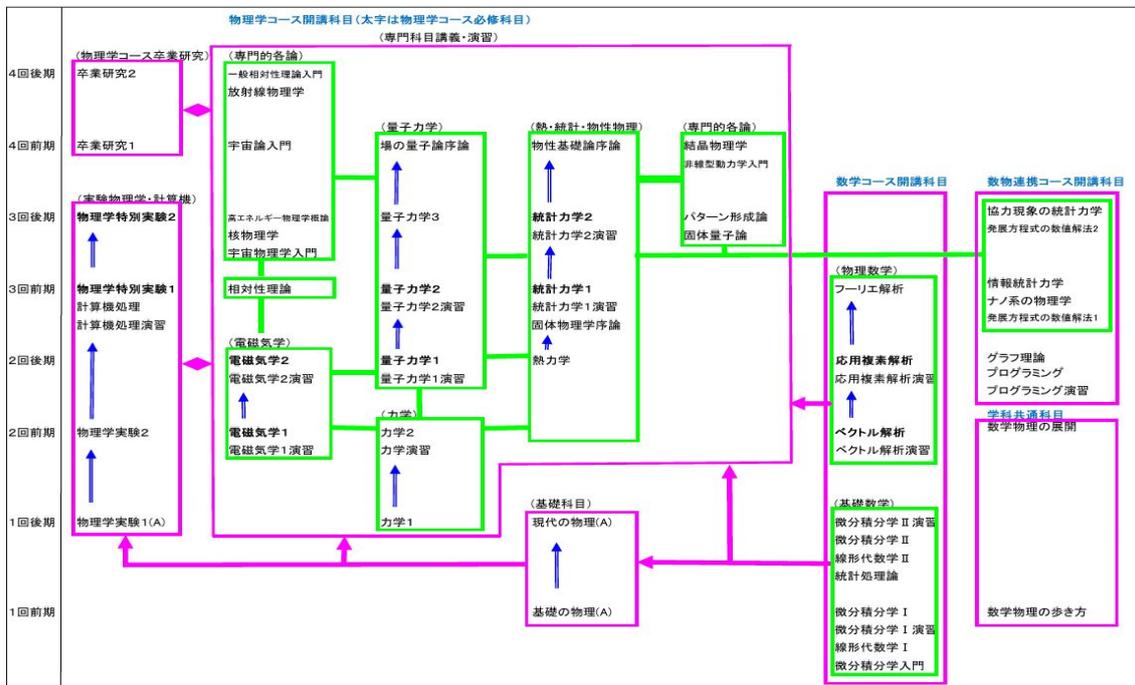
都道府県名	前期日程			後期日程			推薦入試			合計		
	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者
北海道	2	0	0	0	0	0	1	1	1	3	1	1
青森	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1
岩手	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
宮城	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
秋田	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山形	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1
福島	1	1	1	0	0	0	1	0	0	2	1	1
茨城	4	2	1	3	0	0	1	0	0	8	2	1
栃木	1	0	0	1	1	0	2	0	0	4	1	0
群馬	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0
埼玉	2	1	1	0	0	0	0	0	0	2	1	1
千葉	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0
東京	4	2	1	2	0	0	0	0	0	6	2	1
神奈川	1	1	1	1	0	0	0	0	0	2	1	1
新潟	3	2	2	2	1	0	0	0	0	5	3	2
富山	5	4	4	7	1	1	1	1	1	13	6	6
石川	1	0	0	6	0	0	1	0	0	8	0	0
福井	4	1	1	2	1	1	2	1	1	8	3	3
山梨	2	1	1	0	0	0	0	0	0	2	1	1
長野	5	1	1	6	0	0	2	2	2	13	3	3
岐阜	6	2	2	6	1	1	1	0	0	13	3	3
静岡	8	8	8	4	0	0	0	0	0	12	8	8
愛知	12	7	6	16	3	1	4	1	1	32	11	8
三重	7	3	3	5	1	1	3	1	1	15	5	5
滋賀	4	2	2	4	0	0	1	0	0	9	2	2
京都	16	7	7	20	5	4	8	1	1	44	13	12
大阪	71	26	25	97	12	8	30	4	4	198	42	37
兵庫	18	5	5	41	4	2	5	1	1	64	10	8
奈良	31	8	8	27	6	3	19	4	4	77	18	15
和歌山	10	3	3	7	3	3	6	1	1	23	7	7
鳥取	3	0	0	1	0	0	1	0	0	5	0	0
島根	2	1	1	4	0	0	1	1	1	7	2	2
岡山	3	2	2	6	0	0	1	0	0	10	2	2
広島	3	3	3	4	0	0	0	0	0	7	3	3
山口	2	1	1	3	1	1	0	0	0	5	2	2
徳島	2	2	2	2	1	1	3	0	0	7	3	3
香川	7	6	3	4	0	0	0	0	0	11	6	3
愛媛	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	0
高知	2	0	0	2	0	0	3	1	1	7	1	1
福岡	4	3	3	1	1	0	0	0	0	5	4	3
佐賀	2	1	1	2	0	0	0	0	0	4	1	1
長崎	0	0	0	3	0	0	2	0	0	5	0	0
熊本	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0
大分	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
宮崎	2	0	0	2	1	1	0	0	0	4	1	1
鹿児島	2	0	0	3	0	0	0	0	0	5	0	0
沖縄	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1
高卒認定	1	1	1	1	0	0	0	0	0	2	1	1
その他	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
計	261	110	103	298	43	28	103	20	20	662	173	151

別添資料Ⅱ－Ⅰ－４：理学部小中高生向け活動一覧（平成22年度）

日時	場所	活動	講座名称
4月24日	福知山成美高等学校	高校内模擬授業	数理の視点から生物の数の変動を理解する
5月8日	智辯学園奈良カレッジ	高校内模擬授業	あみだくじ・15パズルのお話
5月22日	王子北小学校	王寺北小学校科学教室	空気と遊ぼう
6月5日	奈良県立青翔高等学校	科学講演会	食糞性コガネムシの生態
7月8日	帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校	高校内模擬授業	小さすぎて見えないものをどう見えるようにする
7月12日	追手門学院高等学校	高校内模擬授業	宇宙の暗黒物質
7月15日	大阪府立三島高校	高校内模擬授業	大学で学ぶ物理
7月20日	奈良女子大学	京成成章高校進学研修	生物科学科の教育と研究紹介
8月21日	高山サイエンスプラザ	夏休み科学実験教室	空気と遊ぼう
9月21日	奈良学園登美ヶ丘高等学校	出張講義	四次元の世界を体感しよう
9月25日	奈良県立橿原高等学校	橿原大学	空気砲の数学
9月28日	大阪国際大和田高等学校	高校内模擬授業	「放射線」って何だろう？
10月6日	育英西高等学校	高校内模擬授業	身のまわりの合成高分子
10月8日	奈良県立奈良高校	奈良県立奈良高等学校SSH 数学	「三山崩し」を巡る数学の話題について
10月26日	奈良学園登美ヶ丘高校	出張講義	日常に潜む確率から
11月6日	国際電気通信基礎技術研究所	女子中高生のための関科学塾	けいはんな女性研究者との交流会
11月8日	奈良県立奈良高校	奈良県立奈良高等学校SSH 数学	「三山崩し」を巡る数学の話題について
11月8日	奈良県立奈良高校	奈良県立奈良高等学校SSP 理科	進化生物学の現在
11月10日	京都府立桃山高等学校	高校内模擬授業	身近な金属錯体の話し
11月13日	木津川市加茂プラネタリウム館	まほろば・けいはんな科学ネットワークサイエンスカフェ	X線で探る宇宙のナゾ
11月13日	Dining Cafe 花梨	まほろば・けいはんな科学ネットワークサイエンスカフェ・カフェマテマチカ	折り紙と数学
11月15日	奈良公園	奈良県立奈良高等学校SSP 理科	奈良公園におけるイラクサの防御形質の進化
11月20日	和歌山県橋本市紀見北公民館	橋本市おもしろ算数数学教室出張講義	ペントミノで遊ぼう
11月20日	和歌山県立伊都高等学校	SPP	数理パズルを解く
11月27日	奈良女子大学	女子中高生のための関西科学塾	生き物の不思議：マイクロな世界をのぞいてみよう
11月27日	奈良女子大学	女子中高生のための関西科学塾	暗号入門～アリスとボブの秘密～
12月2日	奈良県立教育研究所	高等学校数学研究会数学セミナー	トポロジーって何だろうー一筆書きからロボット工学への応用まで
12月13日	大阪学芸高等学校	高校内模擬授業	マウスを用いる生物学ー生理学から遺伝子改変マウスまで
12月13日	兵庫県立宝塚西高等学校	高校内模擬授業	タンパク質の化学と生物学
12月21日	奈良女子大学	奈良女子大学附属中等教育学校SSH低学年研究室訪問	研究室訪問
1月8日	Dining Cafe 花梨	まほろば・けいはんな科学ネットワークサイエンスカフェ・カフェマテマチカ	素数とリーマンゼータ関数
1月11日	清心女子高等学校	清心女子高等学校設定科目「生命」	基礎生物科学から再生医療へ

別添資料Ⅱ－Ⅰ－7：理学部コースツリー例（物理学コース関連科目 関連図）

出典：平成27年度「専門教育ガイド」



別添資料Ⅱ－Ⅰ－8：生物科学科・生物科学コース専門教育科目の学年配置と、階層性にもとづく科目間の関連性

出典：平成27年度「専門教育ガイド」

学年	開講時期	生物の階層性に基づく講義・実習科目の大きな区分				演習科目・特論
		分子・細胞	個体	種・個体群	生態系	
1	前期	生化学 基礎細胞生物学				基礎生物学実習Ⅰ
	後期	基礎生物学実習Ⅱ	生物多様性学			
	不定期			水圏生物学野外実習 陸圏生物学野外実習		
2	前期	基礎遺伝学	植物形態学 植物生理学 植物形態分類学実習			生物科学実習
	後期	分子遺伝学 分子細胞工学	動物形態学 動物生理学実習 植物生理学実習	生態学実習		環境生物学実習
	不定期					
3	前期	細胞生物学 発生生物学 恒常性の生理学	進化生物学			生物科学実習Ⅰ 生物科学特論Ⅰ～Ⅹ
	後期	分子生物学実習 細胞生物学実習	動物形態学実習 動物生理学実習	進化生物学 分子遺伝学 細胞生物学	進化生物学Ⅰ、Ⅱ	
	不定期					
4	前期					生物科学実習Ⅱ 生物科学特論Ⅺ～Ⅻ
	後期					
1～4	不定期					公開講座実習

学年	開講時期	化学	生物科学			環境科学
			分子・細胞レベル	組織・個体レベル	集団・生態系レベル	
1	前期	基礎化学Ⅰ	化学生命環境学入門 基礎生物学Ⅰ		基礎生物学Ⅰ	地球環境科学Ⅰ(B) 環境科学基礎 プログラミング 環境科学基礎 プログラミング実習
	夏季集中				生物環境科学基礎実習ⅠA 生物環境科学基礎実習ⅠA	森林生物学野外実習 河川生物学野外実習 海洋生物学野外実習
	後期		基礎生物学Ⅱ	生物多様性学	基礎生物学Ⅱ	地球環境科学Ⅱ(B)
2	前期	基礎化学Ⅱ	生化学 植物形態学	植物生理学	基礎生物学Ⅱ	生物環境科学基礎実習ⅡA 生物環境科学基礎実習ⅡA 生物科学英語 生物環境統計学
	後期	基礎化学Ⅲ 基礎化学Ⅳ	分子遺伝学 分子細胞工学	神経生理学 動物形態学	基礎生物学Ⅲ 基礎生物学Ⅳ	生態学実習 生物多様性学 生物環境科学基礎実習ⅡA 生物環境科学基礎実習ⅡA 生物科学英語 生物環境統計学
	不定期					
3	前期	無機化学実習Ⅰ 有機化学実習Ⅰ 物理化学実習Ⅰ	細胞生物学 発生生物学 進化生物学	恒常性の生理学 分子・細胞生物学 特論Ⅰ～3	基礎生物学Ⅳ 基礎生物学Ⅴ	環境リスク論 環境機能化学 環境分析化学
	後期	無機化学実習Ⅱ 有機化学実習Ⅱ 物理化学実習Ⅱ	動物形態学実習 動物生理学実習	動物形態学分類学実習 動物形態学実習 動物生理学実習	基礎生物学Ⅵ 基礎生物学Ⅶ	環境生物化学 環境分析化学 保全生物学
	不定期					
4	前期	機器分析法Ⅰ	卒業研究Ⅰ(生物科学)または課題研究Ⅰ(生物科学)			
	後期	機器分析法Ⅱ	卒業研究Ⅱ(生物科学)または課題研究Ⅱ(生物科学)			
1～4	不定期集中					公開講座実習

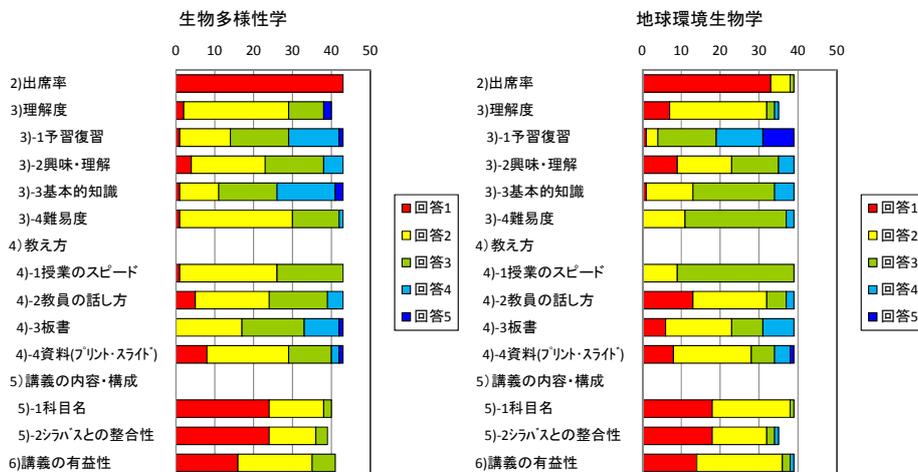
別添資料Ⅱ－Ⅰ－9：平成27年度「基礎遺伝学」シラバス

開設科目名	基礎遺伝学		単位数：2	担当教員：奈良・岩口・春本		
開講期	前期		授業方法：講義	週時間：2		
対象学生	2回生		科目番号：4701800	金曜日	3・4時限	G203
授業の概要	DNAの構造から形質発現までの概略に始まり、メンデル遺伝からヒトの遺伝地図の作成、染色体の行動などの古典遺伝学をゲノム科学と一体化して解説する。その後、遺伝子の構造やその発現と制御など分子遺伝学の基礎となる事項を解説する。					
学習・教育目標	現代の遺伝学の全体像を把握するために必要な基礎的な事項を理解し、それを基に論理的に考え、生命現象を遺伝子のはたらきから説明できる能力を身につける。					
キーワード	遺伝子、ゲノム、染色体、DNAの複製、突然変異、遺伝子発現、遺伝子操作					
授業計画	<p>第1回 DNA：遺伝子とゲノムの遺伝暗号 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第1章の予習 事後学習：授業のまとめと第1章の章末問題の学習</p> <p>第2回 遺伝子伝達の遺伝学：メンデルのもたらしたもの 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第2章の予習 事後学習：授業のまとめと第2章の章末問題の学習</p> <p>第3回 遺伝の染色体的基礎 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第3章の予習 事後学習：授業のまとめと第3章の章末問題の学習</p> <p>第4回 連鎖と遺伝地図 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第4章の予習 事後学習：授業のまとめと第4章の章末問題の学習</p> <p>第5回 ヒトの核型と染色体の行動 (1) 染色体異常、染色体再配列、倍数性 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第5章1節～4節の予習 事後学習：これまでの授業の総まとめと第5章までの章末問題の学習</p> <p>第6回 中間テスト、ヒトの核型と染色体の行動 (2) ゲノム進化 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第5章5節の予習 事後学習：中間テストの見直しと授業のまとめ</p> <p>第7回 DNAの化学構造、複製とその操作 (1) 制限酵素、PCR法 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第6章の予習 事後学習：授業のまとめと第6章の章末問題の学習</p> <p>第8回 DNAの化学構造、複製とその操作 (2) DNAの塩基配列決定法 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第6章の予習 事後学習：授業のまとめと第6章の章末問題の学習</p> <p>第9回 突然変異とDNA修復の機構 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第7章の予習 事後学習：授業のまとめと第7章の章末問題の学習</p> <p>第10回 細菌とバクテリオファージの遺伝学 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第8章の予習 事後学習：授業のまとめと第8章の章末問題の学習</p> <p>第11回 遺伝子発現の分子遺伝学 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第9章の予習 事後学習：授業のまとめと第9章の章末問題の学習</p> <p>第12回 遺伝子制御の分子機構 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第10章の予習 事後学習：授業のまとめと第10章の章末問題の学習</p> <p>第13回 遺伝子操作と機能ゲノム科学 (1) 遺伝子のクローニング 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第11章の予習 事後学習：授業のまとめと第11章の章末問題の学習</p> <p>第14回 遺伝子操作と機能ゲノム科学 (2) 遺伝子操作と遺伝子工学 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第11章の予習 事後学習：授業のまとめと第11章の章末問題の学習</p> <p>第15回 遺伝子操作と機能ゲノム科学 (3) ゲノムプロジェクトと機能ゲノム科学 事前学習：エッセンシャル遺伝学 第11章の予習 事後学習：授業のまとめと第11章の章末問題の学習</p> <p>第16回 期末試験</p> <p>講義中に前回までの内容に関する小テストを実施する。</p>					
教科書	エッセンシャル遺伝学 第3版 D.L.ハートル・E.W.ジョーンズ 共著 培風館 2005					
参考書	細胞の分子生物学 第5版 Alberts, B. et al. Newton Press 2008					
成績評価方法	期末試験、授業内試験(中間テスト・小テスト)、授業参加度、出席を総合して評価する。					
評価割合	定期試験(期末試験)	授業内容試験等	宿題・授業外レポート	授業態度・授業への参加度	受講者の発表(プレゼン)	出席
	50	30		10		10
備考	本科目は、後期開講の分子細胞工学、分子遺伝学の基礎となる事項を学ぶ講義である。					

別添資料Ⅱ—Ⅰ—10：講義・演習・実験・実習・複合におけるTAの配置例（調査年度：平成27年度）

平成27年度 前期 TA配置状況				平成27年度 後期 TA配置状況			
	科目名	採用人数	勤務時間数		科目名	採用人数	勤務時間数
講義	基礎の物理(A)	1	6	講義	電磁気学2	1	24
	基礎の物理(B)	1	24		シミュレーション物理	4	92
演習	計算機物理	2	52	演習	線形代数学Ⅱ演習(A)	1	27
	集合・位相演習	1	27		代数入門演習	1	24
	整数論演習	1	26		電磁気学2演習	1	24
	微分積分学Ⅰ演習(B)	1	24		統計力学2演習	2	24
	ベクトルと空間の幾何学演習	1	27		微分積分学Ⅱ演習(A)	1	27
	力学演習	1	12		微分積分学Ⅱ演習(B)	1	24
	量子力学2演習	1	24		プログラミング演習	2	52
実験	物理学実験2	2	52	実験	プロジェクト演習(B)	1	12
	化学実験Ⅱ	2	64		量子力学1演習	1	24
	化学基礎実験2	3	90		化学基礎実験1(A)	6	65
	化学専門実験1	3	90		化学基礎実験1(B)	8	205
	化学専門実験2	4	120		化学基礎実験3	7	210
	生物学実験Ⅱ	5	19		物理学実験1(B)	3	81
実習	遺伝・生化学実習	5	30	実習	物理学実験1(A)	3	90
	海洋生物学野外実習	2	60		環境生物学実習	5	40
	環境科学応用プログラミング演習	1	21		生物環境科学基礎実習IIA	7	24
	細胞生物学実習	4	22		生物環境科学基礎実習IIB	7	24
	植物形態分類学実習	3	30	動物形態分類学実習	6	31	
	森林生物学野外実習	3	90	分子細胞工学実習	5	40	
	生態学実習	1	30	複合	環境科学応用プログラミング	2	42
	生物環境科学基礎実習ⅠA	5	19	合計		75	1,206
	生物環境科学基礎実習ⅠB	5	19				
	生物形態発生学実習	3	30				
	分子生物学実習	5	26				
	臨海実習Ⅰ	1	40				
	臨海実習Ⅱ	1	45				
	複合	サイエンス・オープンラボⅠ・Ⅱ	4	48			
知識社会の数理学		2	52				
	合計	74	1219				

別添資料Ⅱ—Ⅱ—3：学生による授業評価アンケート報告書 例（調査年度：平成24年度）



(2) あなたは、この科目に何回出席しましたか。
 1. 8割～10割 2. 6割以上8割未満 3. 4割以上6割未満 4. 2割以上4割未満 5. 2割未満

(3) この科目の目的や内容を理解できましたか。最もよく当てはまるものを選択肢1～5からひとつ選んで○をつけてください。また、そのような理解度になった理由を知るために、次の項目について選択肢1～4のうち最も当てはまるものを選んで○をつけてください。もし、他にも理由が考えられる場合はその他で具体的に書いてください。
 1. 理解できた 2. ある程度理解できた 3. あまり理解できなかった 4. 理解できなかった
 5. 理解できているかどうかわからない

<項目>

1) 予習・復習について (1. 十分やった 2. ある程度やった 3. ふつう 4. それほどやらなかった 5. 全くやらなかった)

2) あなたの興味・意欲 (1. 十分あった 2. ある程度あった 3. ふつう 4. それほどなかった 5. 全くなかった)

3) 授業を理解するための基礎的知識 (1. 十分あった 2. ある程度あった 3. ふつう 4. 少し足りなかった 5. 全くたりなかった)

4) 授業内容の難易度 (1. 大変難しかった 2. やや難しかった 3. どちらでもない 4. やややさしかった 5. 大変やさしかった)

(4) この科目の担当者の教え方は適切だったと思いますか。次の項目の中から最もよく当てはまるものを選択肢1～5からひとつ選んで○をつけてください。また、その他に、教え方や教材について良かった点、悪かった点、提案や要望などがあればコメントを書いてください。

1) 授業を進めるスピード (1. はやすぎた 2. ややはやかった 3. ちょうどよかった 4. ややゆっくりだった 5. ゆっくりすぎた)

2) 教員の話方 (1. 大変わかりやすかった 2. ある程度わかりやすかった 3. ふつう 4. ややわかりにくかった 5. 全くわからなかった)

3) 板書について (1. 大変わかりやすかった 2. ある程度わかりやすかった 3. ふつう 4. ややわかりにくかった 5. 全くわからなかった)

4) 資料(プリント・スライドなど) (1. 大変わかりやすかった 2. ある程度わかりやすかった 3. ふつう 4. ややわかりにくかった 5. 全くわからなかった)

(5) この科目の内容や構成は、科目名にふさわしい、またシラバスにしたがった適切なものだったと思いますか。最もよく当てはまるものを選択肢1～5からひとつ選んで○をつけてください。

1) 科目名 (1. たいへんふさわしい 2. ある程度ふさわしい 3. どちらともいえない 4. あまりふさわしくない 5. 全くふさわしくない)

2) シラバスとの整合性 (1. たいへん適切だった 2. ある程度適切だった 3. ふつう 4. あまり適切ではなかった 5. 全く適切ではなかった)

(6) この科目は、あなたにとって有益なものだったと思いますか。最もよく当てはまるものを選択肢1～5からひとつ選んで○をつけてください。また、そのように評価する理由を述べてください。
 1. 有益だった 2. ある程度有益だった 3. どちらともいえない 4. あまり有益ではなかった 5. 有益ではなかった

別添資料Ⅱ－Ⅱ－4：学生による授業評価アンケート報告書 授業改善例（平成 24 年度）

3406800	植物生理学	教員 A 教員 B
<p>質問項目</p> <p>a) 出席率について 36名全員が出席率8-10割と回答しており、実際に毎回きちんと出席し、宿題もほとんど例外なく提出していた。極めて真面目に取り組んでいたと思う。(教員A) 極めて真面目に取り組んでいたことには同感である。(教員B)</p> <p>b) 理解度について アンケート(3)の項目(学生側の要因)と(4)の項目(教員側の要因)の結果を参考にして、学生の理解度に対する分析とコメントを書いてください。 大多数は「ある程度理解できた」を選択している。 授業の難易度は「やや難しかった」という評価が最多であるが、基礎的知識は「ふつう」に持っており、興味や意欲も「十分」あるいは「ある程度」あり、予習復習も「ある程度」あるいは「ふつう」に実施していた学生が大半であるので、こうした結果になったものを思われる。また、授業を進めるスピードは丁度良いかやや早め、話し方はある程度あるいは大変分かりやすく、板書は普通科ある程度分かりやすい、資料はある程度あるいは大変分かりやすい、という評価であり、全体として教え方には大きな問題はなさそうである。数少ないコメントを見ると、プリントが分かりやすかった点は好評のようであるが、ときどき声が聞き取りにくかった、との指摘もあった。引き続き意識して改善していきたい。(教員A) ほとんどの学生は授業態度が非常によく、真面目に聞いていたが、他の授業と関連しそうな用語の意味や自分の知識を総合して考えなければならない問題について質問すると、わからないと答える学生が多かった。植物生理学を学ぶ上で知っていてほしい基礎知識(分子生物学や生化学、細胞生物学等)を持っていない(まだ習っていない)場合が多かったので、できるだけ丁寧に説明することで理解度を上げるように努力した。アンケートの結果をみると、授業で習ったことはおおむね理解しているようなので、他の授業で習うこととの関連性なども含めて本当の理解が得られるよう自主的な勉強を促したい。(教員B)</p> <p>c) 講義の内容と構成について 内容、シラバスとの整合性のいずれについても良好な評価である。しかし、「ある程度ふさわしい」との回答については、「どうすればよりふさわしいものになるのか」という考えをコメントとして記してほしかった。全体としてコメントがほとんどなく、授業改善のヒントにはなりにくいアンケート結果となってしまった。コメントを書くよう促すのを忘れたことが悔やまれる。(教員A)</p> <p>d) 有益度について 無回答以外は全て「有益」「ある程度有益」との回答であった。「植物に興味をもてた」「大変勉強になった」などのコメントを見ると、素直に嬉しい。(教員A)</p> <p>e) その他 課題を毎回課すのは教員の側も大変なのであるが、「毎回の課題によって勉強意欲を刺激された」というコメントで報われた気がする。(教員A)</p>		

教 育

生 活 環 境 学 部

(別 添 資 料)

目 次

別添資料Ⅱ-I-3：各学科で担当する全学共通科目一覧（平成27年度）	P1
別添資料Ⅱ-I-4：自治体・他大学との連携教育	P1
別添資料Ⅱ-I-10：学科ごとのFD活動の取り組みとその成果（生活文化学科・住環境学科）	P1
別添資料Ⅱ-I-12：養成する能力の明示とカリキュラムの体系性に関わる工夫（平成27年度）学科ウェブページから	P2
別添資料Ⅱ-I-13：高大連携（スーパーサイエンス授業）（衣環境学科）	P4
別添資料Ⅱ-I-14：高大連携（アカデミック・ガイダンスの開講テーマ：2010～2015年）	P4
別添資料Ⅱ-I-17：アクティブ・ラーニング（各学科の取り組み：平成27年度）	P5
別添資料Ⅱ-I-18：教室外学修プログラム	P6
別添資料Ⅱ-I-19：インターンシップ実施状況	P6
別添資料Ⅱ-II-7：学生の受賞歴	P7
別添資料Ⅱ-II-10：キャリア支援教育の取り組み（衣環境学科）	P8
別添資料Ⅱ-II-14：生活環境学部卒業生の進路（平成22～26年度）	P8

別添資料Ⅱ-I-3：各学科で担当する全学共通科目一覧（平成27年度）

学科・専攻	教養科目（平成27年度以前から担当）	H27年度新設教養科目
生活文化学科	○憲法（A）、（B）（教職科目） ○ジェンダー論入門（高大連携科目） ○専門職論（キャリア科目） ○現代社会の職業」（キャリア科目）	○パサージュ ○ジェンダーから見た人間と社会 ○アジア論入門
スポーツ健康科学コース	○健康運動実習Ⅰ、Ⅱ ○スポーツ実習A1、C2、C4、C5、C6 ○朝食たべてダイエットⅠ、Ⅱ ○奈良の四季とウォーキングⅠ、Ⅱ ○日本とヨーロッパ ○健康・スポーツ科学 ○生命・運動・健康 ○専門職論（キャリア科目）	○パサージュ
臨床心理学コース	○専門職論（キャリア科目）	
生活健康学コース	○生体機能と環境 ○生命・運動・健康 ○朝食たべてダイエットⅠ、Ⅱ ○奈良の四季とウォーキングⅠ、同Ⅱ	○パサージュ
生活情報通信科学コース	○情報処理入門Ⅰ（D）、（F）、（G） ○情報処理入門Ⅱ ○情報基礎	○パサージュ
衣環境学コース	○生活と科学	
住環境学科	○キャリアデザイン・ゼミナールB（キャリア科目）	○パサージュ
食物栄養学科	○キャリアデザイン・ゼミナールB（キャリア科目）	○パサージュ

別添資料Ⅱ-I-4：自治体・他大学との連携教育

生活文化学科	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良県内の食品加工会社と協力し、奈良周辺の食品や加工について学習・体験する機会を学生に提供している。 ・奈良の食に関する一般市民向け講座やツアーを開催するNPOと共同でイベント開催などを実施し、学生にも学習機会を提供している。 ・紀伊半島にある食関連産業のネットワークに参加し、和歌山県、三重県、奈良県などの農業・漁業・食品加工会社と連携を図り、研究を進めるとともに学生にも学習機会を提供している。
住環境学科	<ul style="list-style-type: none"> ・ランドスケープ7大学展への出展（奈良女のほかに、神戸大、大阪府立大、滋賀県立大、立命館大、神戸芸術工科大、京都造形芸術大） ・建築学会、造園学会等の学協会が主催する設計競技への参加 ・設計演習課題作品の他大学との合同講評会 ・毎年、三大学環境工学系卒業研究発表会を大阪大・大阪市立大・奈良女子大で実施。

別添資料Ⅱ-I-10：学科ごとのFD活動の取り組みとその成果（生活文化学科・住環境学科）

<p>【生活文化学科（2011-2015年度）】</p> <p>○2011年度 学生アンケート（卒業生、2・3回生前期授業アンケート）をFD委員が分析し、特に平均点が低いものや学科平均との差がある項目に注目して、学科の課題について話し合いをした。</p> <p>○2012年度 ①学科会議で授業評価アンケート・卒業生アンケートについて分析と課題を報告して討論（課題の抽出）をした。また、次年度からの②生活文化学入門の新設（講義形式の生活文化学入門編から演習形式〔学生を3グループに分け、それぞれのグループに教員3名、5回ずつ〕にした初年時教育の導入）を検討した。その他、③生活文化学入門編の複数人でテーマを共通させた連続講義も試みた（領域間の関連付け、他講義の見学などのパイロット的試み）。</p> <p>○2013年度 学部初年時生向けの授業である生活文化学入門において、少人数グループに分けての演習形式の教育を実施した。また、生活文化学入門を中心とした初年時教育のさらなる拡充を目指して、チューターを雇用してのPBL（プロブレム・ベースド・ラーニング）の経験のある教員の報告を踏まえて、学科の基礎科目である生活文化学入門でのPBL導入について検討をした。その上で次年度以降の初年時教育の拡充を明確な課題として位置づけた。</p>
--

○2014 年度

学部初年時教育として生活文化学入門を再編した。生活文化学の概論、大学図書館及び国会図書館の利用法、PBL（テーマ「日本の少子化」）、ディベートなどを組み込み、大学生活における主体的な学びの方法を学習するプログラムとした。各回にはFD委員が授業見学を行うなど、教員の参観を呼び掛け、初年時教育の課題を共有できるように配慮するとともに、受講生アンケートを独自に取るなどして引き続き授業改善と拡充を図ることとなった。

○2015 年度

前年度までの課題を元に、生活文化学入門の拡充を図った。生活文化学の概論、図書館利用とレポート作成法、PBL（テーマ「日本の少子化」「ロボット」）、ディベートを中心に構成した。特にPBLで2つの課題を連続して行うことにより、主体的に学ぶ方法に慣れ、自らテーマを設定し探究することの習得を目指した。前年度より始めたPBLのグループ発表も、少人数での議論の方法、プレゼンテーション方法などを学ぶ機会となり、学生の主体的学びを促す効果を得ていると考えられる。

【住環境学科】

住環境学科の取組み：毎年、各教員の主要科目の授業をVTRに録画し、それをもとに各自が教授方法に関して自己評価を行っている。また、不定期であるが非常勤講師との懇談会の場を設けて教育に関する意見交換を実施している（平成23年度実施）。

別添資料Ⅱ-I-12: 養成する能力の明示とカリキュラムの体系性に関わる工夫（平成27年度）学科ウェブページから

○食物栄養学科

食物栄養学科は、平成17年度より、管理栄養士養成課程を設置している。したがって、カリキュラム体系は、管理栄養士養成課程に必要なカリキュラムを基軸とし、「社会・環境と健康」「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」「食品機能化学・調理科学・食品衛生学」「基礎及び応用栄養学」「栄養教育論」「臨床栄養学」「公衆栄養学」「給食経営管理論」を網羅したカリキュラムとなっている。

これに加えて、本学科の特徴としては、①専門的で科学的な思考ができ、物の本質を考察できる能力を養うための基礎科目として「基礎化学演習」「基礎生理学演習」を設置し、専門科目に対する理解がスムーズに進むように支援している。②オムニバス形式で実施する「基礎栄養学特別講義」や「食物栄養学研究法」を設置し、各専門分野における最新の情報を学生に提供している。③卒論研究を充実させて、物事を企画・立案し、実行に移し、目的を達成できる能力を養っている。

本教育プログラムにより、単に「管理栄養士」の資格を得るためだけの教育プログラムではなく、ライフサイエンスをベースにした思考力を備え、人々の健康増進と疾病予防のために指導的立場として活躍できる人材の育成を目指している。

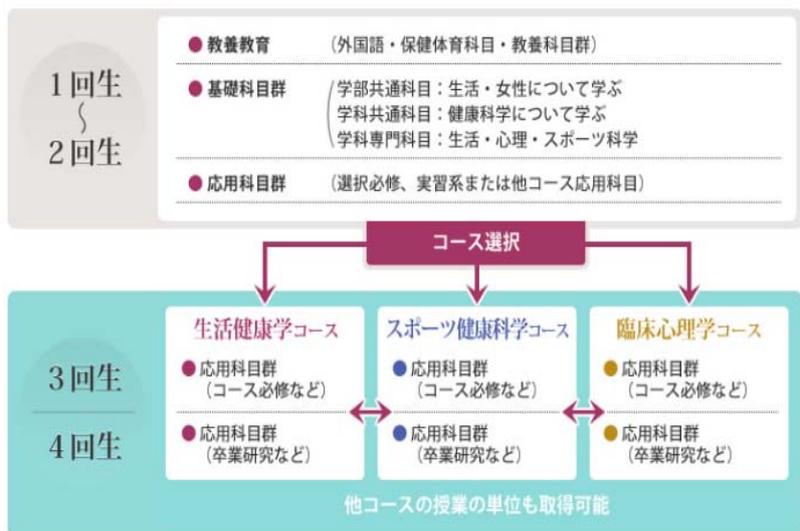
○心身健康学科

心身健康学科は3つの分野（生活健康学、スポーツ健康科学、臨床心理学）に分類されるので、学科専門基礎科目群では心と身体の健康を学習する上で基礎となる科目を広く履修させるために、各分野からそれぞれ少なくとも8単位履修することとしている。また、2つの分野に跨る「ブリッジ科目」を配置している（右図参照）。

○衣環境学コース

衣環境学コースでは、衣環境学に関する幅広い知識を体系的に学ぶために、カリキュラムの編成にあたり以下4つの基本方針を掲げている。①社会のための衣服を創造できる人材を育成するために必要な基礎から実践までのカリキュラムを準備する。②部分と全体を俯瞰するモデルである応用数学・統計学及びシステムとして俯瞰する創造学と失敗学を用意する。③実験・実習を重視する。④中学校・高等学校教諭一種免許状（家庭）を取得できる教育課程を置く。

この基本方針を具体化するにあたり、年次ごとに学ぶ内容を整理し、基礎から発展まで無理なく学べる工夫を施している。まず1年次では、実世界を論理モデルで記述するための基礎である数学と、具体的な物質の操作である被服学実習を学ばせる。同時に幅のある知識を持たせるため、情報と衣環境の両

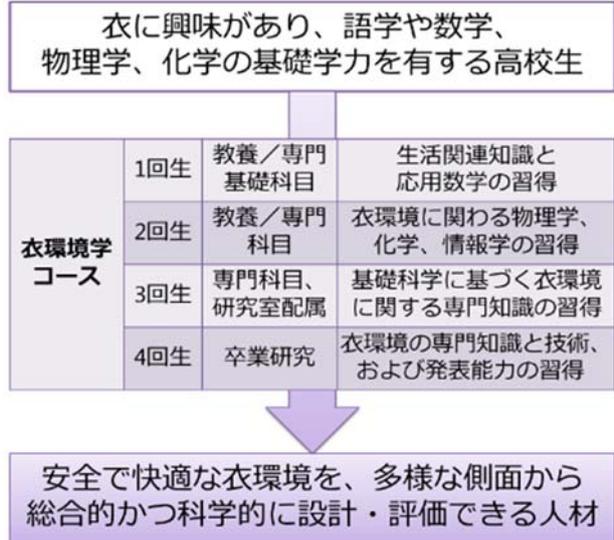


方に関連する科目を学ばせる。次に2年次と3年次において、伝統的な衣服学とフロンティアの衣服学を体系的に学ばせる。さらに3年次には、創造学と失敗学から自ら提案した衣服の研究を俯瞰する手法を学ばせる。そして4年次から卒業研究を学び、問題解決プロジェクトとして経験を積ませる。これらの科目については、分野の偏りなく履修できるよう42単位を必修としている。

○生活情報通信科学コース

生活情報通信科学コースでは、ICT分野に優れた人材を輩出するために、カリキュラムの編成にあたり以下の4つの基本方針を掲げている。①ソフトウェアならびにハードウェアの基礎を学ぶ。②ライフコンピューティングに関する最新の技術を習得する。③情報倫理やセキュリティからシステム監査・経営工学に至るまで技術者研究者として活躍するための社会的知識を養う。④経済産業省の国家試験である情報処理技術者試験に対応した実験演習を行うことで同試験合格をエンカレッジする。

以上の基本方針に従って作られたカリキュラムでは、①は1～2年次のプログラミング言語、アルゴリズムとデータ構造、論理回路、計算機アーキテクチャ、計算機ネットワーク等を、②は2～3年次のヒューマンインターフェース概論、人工知能、マルチメディア情報工学、ソフトウェア工学等を、③は1～3年次の情報セキュリティと法務、情報と職業、プロジェクト管理とシステム監査等を、④は1年次の情報処理技術1ならびに2を学ばせる。さらに卒業研究は3年後期から1年半にわたって予定しており、実践的な知識と技術を持った人材を輩出することを目標としている。



○住環境学科

住環境学の対象とする空間は、身近なインテリア空間から住宅、近隣環境、ランドスケープ、地域コミュニティ、都市にいたるまで広い範囲に及ぶ。住環境学科ではこれら諸空間と生活との関係を軸に質の高い生活空間のための計画、設計、整備、管理のための知識、技術を身につけた専門家の育成を目標としている。

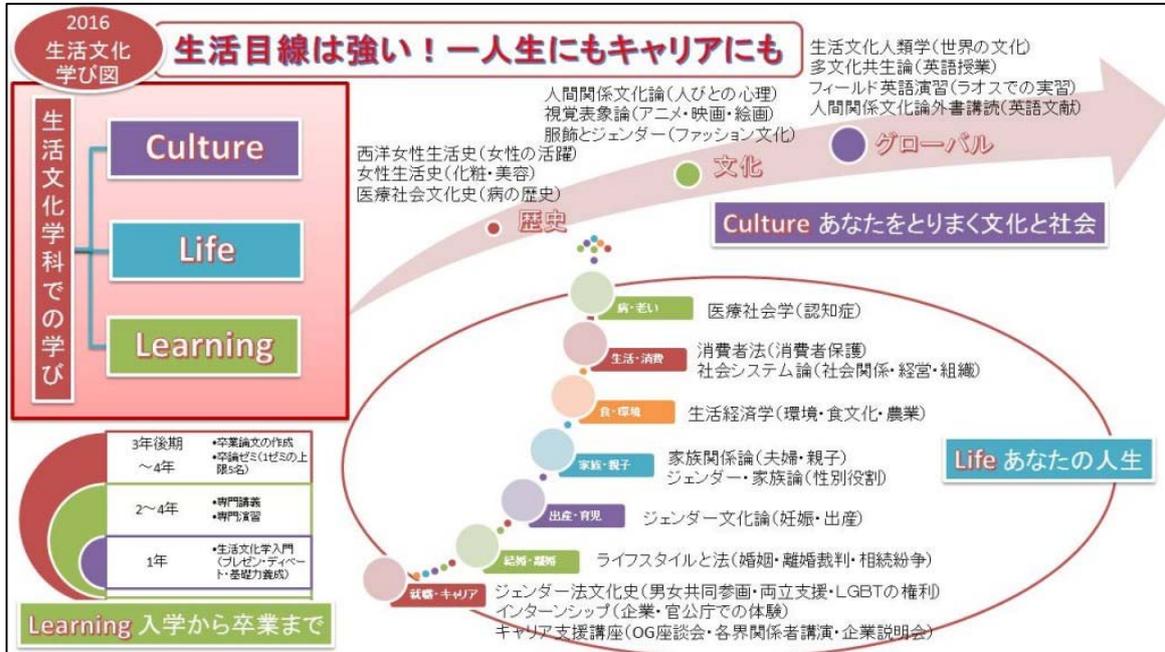
カリキュラムの特徴は、一言でいえば、卒業時に全員が二級建築士および一級建築士（実務経験2年後）の受験資格が得られること、また平成17年度からはJABEE（日本技術者教育認定機構）の認定を受けたカリキュラムであることである。

学習・教育目標は、人材養成をめざす能力6分野（A. 幅広い知識、教養と工学基礎能力、B. 生活および生活環境に関する知識と理解力、C. 住居、建築に関する基礎的知識と計画能力、D. 住居、建築、地域環境を創造するための専門的知識と応用能力、E. デザイン能力、F. 実務遂行能力）ごとに具体的な目標が設定されており（<http://www.nara-wu.ac.jp/life/resed02/profile/mokuhyou.html>）、カリキュラムはこの学習・教育目標の達成のために体系的に構築され、学年進行に配慮して組み立てられている。住環境学は、対象領域・方法が広範囲であることから、授業形態も専門的講義のほか体験的に学ぶ実験・

実習、住宅・住環境の設計演習など多岐にわたる。さらに、インターンシップ、合宿研修、見学会などの多様な授業形態の導入により、教育効果の向上を図っている。

○生活文化学科

生活文化学科では、独自の「学び図」を作成し、学科ウェブページで公表している（下図参照）。生活文化学科では、学際的・グローバルな教養を身につける学科として、「生活文化学」を以下のように特徴づけている。①総合的にものごとをとらえる「教養」、②「専門知」をふまえた「高度な教養」、③「教養の学」としての「生活文化学」。養成する人間像は、生活目線に立つ広義の「女性リーダー」である。



別添資料Ⅱ-I-13：高大連携（スーパーサイエンス授業）（衣環境学科）

附属中等教育学校
 平成 22 年度「三次元計測および色彩の研究」
 平成 23 年度「快適衣環境の創出をめざして」
 平成 26 年度「快適衣環境の創出をめざして」
 平成 27 年度「知能情報処理：情報をデータから学習し活用する技術」
 奈良学園中学校・高等学校
 平成 24 年度 「洗濯からサイエンスを探る」

別添資料Ⅱ-1-14：高大連携（アカデミック・ガイダンスの開講テーマ：2010～2015年）

年度	学科	開講テーマ	担当者（○は責任者）
2010	衣	衣の生活学	今岡・○才脇・前川・後藤
	住	奈良の街をデザインする	宮城・○牧野
	食物	食の世界を探る	○中田・高村
	文化	家族の法的問題－基礎学習とディベートを通して	大塚・○安藤
	健康	生活の中の健康：自分の体の働きを知る	芝崎・○鷹股
2011	文化	フィールド調査実習ミニ版	佐野
	住	住まいとまちの住環境について考える	中山・○長田
	衣	衣の生活学	後藤・黒子・○才脇
	食物	食と健康	前田・○久保田・中田・菊崎
	健康	生活の中のヘルスサイエンス	松田・○森本
2012	住	安心・安全・快適な住環境について考える	増井・○工藤
	文化	フィールド調査実習ミニ版	佐野
	衣	衣の生活学	前川・米田・○原田
	健康	生活と健康を考える	○久保・三木

	食物	理系の境界領域に触れようーゲノム解析からタンパク質の構造と機能ー	小倉・○植野
	文化	生活の中から問いかけるー愛と偏見について考えてみよう！	○三成・井口
2013	衣	衣生活を考える	黒子・米田・○原田・佐藤
	健康	生活の中の健康科学	○松田・芝崎
	住	気持ちよく暮らせる住まいを学ぶ	○長野・室崎
	食物	理系の境界領域に触れようーゲノム解析からタンパク質の構造と機能ー	小倉・○植野
	健康	食と健康	○菊崎・中田
2014	食物	おいしさの科学と文化	○井上・高村
	食物	理系の境界領域に触れようーゲノム解析からタンパク質の構造と機能ー	植野・○小倉・牧野
	情報	暮らしの中に生きる技術と製品	城・駒谷・○後藤・橋本
	文化	「価値」の生活文化学	青木・○山崎
	住	安全・安心なまちづくりを目指して	瀬渡・○瀧野
	スポーツ	スポーツ健康科学の可能性	○井上・藤原・成瀬・芝崎・星野・石坂・中田
	健康	心と生活行動	鷹股・○久保・岡本・伊藤
2015	スポーツ	「からだ・運動・スポーツを科学する」	○井上・藤原・成瀬・芝崎・星野・石坂・中田
	健康	こころと神経の科学	梅垣・山根・吉本・○森本
	食物	食物に関連する科学と生活との関わり	○松田 覚・前田純夫
	食物	理系の境界領域に触れようー遺伝子、タンパク質、そしてその未来ー	○小倉・牧野
	文化	生活文化学の学び	野田・○鈴木
	衣	衣環境と情報	吉田・安川・○鴨・新出
	住	住環境学への入り口	○山本・藤平

別添資料Ⅱ-I-17: アクティブ・ラーニング (各学科の取り組み: 平成 27 年度)

アクティブ・ラーニング		
食物栄養学科		○実習および一部の講義で、グループごとの研究・調査テーマの設定、グループ学習、グループ発表と学生相互討論を取り入れ、基礎知識の理解度の再認識、問題発見・分析・解決能力およびコミュニケーション能力の向上を図っている。
心身健康学科	スポーツ健康科学コース	○一部の開講科目で、クラウドを用いた講義ノート、関連文献などを公開し、アクティブ・ラーニングを促している。
	生活健康学コース	○それぞれの実習における自主的な学習課題の設定とグループ発表・討論等を取り入れている。(ストレスの科学実習、健康運動学実習) ○卒業研究について、4 回生の中間発表として 10 月にランチョンセミナーをおこない、3 回生以下に自分の研究内容の発表をおこなっている。
	臨床心理学コース	心理臨床に関する実習や演習の授業では、一つの実践について討論を交わし、それぞれの意見を全体で共有するとともにディスカッションを行い、多面的に実践を分析する力を身に付けている。
住環境学科		○設計演習の全科目を通じて、設計課題へのとりくみの成果を毎回の授業においてプレゼンテーションし、それらについて教員と学生、TA と学生、さらには学生同士の間でディスカッションし、その結果をフィードバックするプロセスを反復している。
情報衣環境学科	衣環境学コース	○講義の主題となる部分についてグループディスカッションを行わせ、その結果を互いに発表させ合うことで、講義全体に対する関心・意欲を高めている。 ○CG 技術に関する装置を使用するグループワークを行わせ、成果について発表・講評し合う場を設けることで、技術に対する理解度を向上させている。 ○グループごとに衣環境に関連する研究テーマを自分達で設定、英語論文を探索・取得・読解し、内容をまとめプレゼンテーション・質疑応答を実施させる。最新の知見を得ると共に客観的に研究をとらえ講評する能力を養う。
	生活情報通信科学コース	計算機実験 2 では PBL を全面的に取り入れ、外部組織をクライアントとしたシステム開発の企画提案から設計実装に至るまでをグループで行わせている。 情報と職業ではチームティーチングを導入している。

生活文化学科	<p>○1年前期配当の「生活文化入門」では、PBLやディベートを取り入れ、入学してすぐに学生の学習意欲を高めるように支援している</p> <p>○初年時教育の強化という中期目標に沿って、27年度から1年生向けの演習を新設して開講した。「生活文化の方法」受講生16名</p> <p>○複数の演習科目(2年以上)で、グループワーク・ディスカッション・プレゼン報告訓練・ディベート等を実施している。</p>
--------	--

別添資料Ⅱ-I-18：教室外学修プログラム

		学外研修
食物栄養学科		<p>○新入生合宿研修(1年前期)</p> <p>○在学生合宿研修(2年後期)</p> <p>○実習：公衆栄養学臨地実習・栄養教育実習・給食経営管理臨地実習・臨床栄養学臨地実習・給食経営管理臨地実習</p>
心身健康学科	スポーツ健康科学コース	<p>○新入生合宿研修(1年前期)</p> <p>○実習：シーズンスポーツ実習・夏、シーズンスポーツ実習・冬、地域連携運動実習</p>
	臨床心理学コース	<p>○新入生合宿研修(1年前期)</p> <p>○実習：学校現場(中・高校)での学習ボランティア、不登校支援施設での臨床実践(大学院では単位化・夏休みも利用)、病院や療育施設での実習、司法・矯正施設・福祉施設の見学実習</p>
	生活健康学コース	<p>○新入生合宿研修(1年)</p> <p>○在外生合宿研修(3年)※1~2社に企業訪問をおこない、施設見学、女性研究者との懇談等を実施。</p> <p>H24：ダイキン工業、京都市立ふれあい会館健康指導室・高齢者福祉室</p> <p>H25：東洋紡、京都市立ふれあい会館健康指導室・高齢者福祉室</p> <p>H26：ロート製薬、京都市立ふれあい会館健康指導室・高齢者福祉室</p> <p>H27：パナソニック・アプライアンス社</p>
住環境学科		<p>○新入生合宿研修(1年)</p> <p>○在来生合宿研修(3年)</p> <p>H22：金沢方面(白川郷、金沢21世紀美術館、兼六園)</p> <p>H23：直島方面(犬島・直島アートプロジェクト、倉敷美観地区)</p> <p>H24：富山・金沢方面(21世紀美術館、海みらい図書館)</p> <p>H25・26：直島方面(直島アートプロジェクト、豊島)</p> <p>H27：伊勢志摩方面(内宮・外宮・せんぐう館、海の博物館)</p>
情報衣環境学科	衣環境学コース	<p>○在来生合宿研修(2年生全員参加)</p> <p>H22：ワコール(株)、日本バイリーン(株)滋賀工場</p> <p>H23：川島セルコン株式会社、東洋紡総合研究所</p> <p>H24：ワコール(株)、国立民族学博物館</p> <p>H25：京都市産業技術研究所、グンゼ株式会社</p> <p>H26：大阪府立産業技術総合研究所、島精機</p> <p>H27：タビオ奈良株式会社、花王和歌山工場</p>
	生活情報通信学コース	<p>H26：ホテルフリーゲート白浜(和歌山)</p> <p>H27：川辺の宿(兵庫)</p> <p>いずれも9月に情報処理技術者試験直前ゼミを行った。</p>
生活文化学科		<p>○在学生研修(2年生全員参加)毎年9月・日帰り</p> <p>H22：手作りハムばあく</p> <p>H23：国立民族学博物館、EXPO'70パビリオン、大阪日本民芸館</p> <p>H24：川島織物セルコン(工場、織物文化館、川島テキスタイルスクール)</p> <p>H25：大阪弁護士会、大阪地方裁判所、リバティ大阪</p> <p>H26：伊賀の里モクモク手作りファーム</p> <p>H27：立命館大学国際平和ミュージアム、松本記念ホール陪審法廷</p>

別添資料Ⅱ-I-19：インターンシップ実施状況

		インターンシップ先
心身健康学科	生活健康学コース	<p>○参天製薬インターンシップ(修士課程1回生、森本研究室)</p> <p>○ワコールのインターンシップの対象研究室(鷹股・芝崎・久保)として毎年参加(平成26年から就職時期の変更にともないインターンシップを中止)</p>
住環境学科	(インターンシップを単位化)	<p>限研吾建築都市設計事務所、SANNA、伊東豊雄建築設計事務所、西沢立衛建築設計事務所、PLACE MEDIA、オンサイト計画事務所、鳳コンサルタン環境デザイン研究所、CAI(シーラカンス東京)、CAN(シーラカンス名古屋)、日建ハウジングシステム、坂倉建築研究所大阪事務所、吉村篤一/建築環境研究所、阿久津友嗣事務所、玉置順/玉置アトリエ・宇治、長坂大/Mega、間工作舎、遠藤秀平建築研究所、宮本佳明建築設計事務所、吉本剛/吉本剛建築研究室、E-DESIGN、PLANET Creations、関谷昌人建築設計アトリエ、辻村久信デザイン事務所、HTAデザイン事務所、松田平田設計大阪事務所、スタジオ建築計画、ICU、吉井歳晴/WIZ ARCHITECTS、藤岡建築研究所 他</p>

生活文化学科 (インターンシップを単位化)	○H27: たんぼぼの家(福祉)、毎日新聞、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、AFS(国際交流NPO)、ならコープ ○H26: たんぼぼの家(福祉)、市議会議員事務所、毎日新聞、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、ポラリスセクレタリーズオフィス(研究機関等バックオフィス業務等)、AFS、奈良市役所 ○H25: 毎日新聞、国会議員事務所、市議会議員事務所、AFS、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、奈良市 ○H24: 毎日新聞、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、ポラリス、南都銀行 ○H23: 毎日新聞、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、ポラリス、AFS、南都銀行 ○H22: AFS、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、ポラリス
--------------------------	--

別添資料Ⅱ-Ⅱ-7: 学生の受賞歴

受賞日	受賞名	受賞者	所属	概要
2015/01/28	SI2014優秀講演賞	井上 光	生活環境学部 生活健康・衣環境学科 衣環境学専攻 4回生	第14回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会における口頭発表に対し、審査の結果「優秀講演賞」に選出された。725件の講演中、上位1割程度が受賞。 「服装と香りの印象適合度についての検討」
2015/01/28	SI2014優秀講演賞	紫原 舞	生活環境学部 生活健康・衣環境学科 衣環境学専攻 4回生	第14回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会における口頭発表に対し、審査の結果「優秀講演賞」に選出された。725件の講演中、上位1割程度が受賞。 「布の湿り感と温熱的性質の関連性に関する研究」
2015/01/26	平成26年度パテントコンテスト入選(特許出願支援対象者) (主催:文部科学省、特許庁、日本弁理士会、(独)工業所有権情報・研修館)	南明里	生活環境学部食物栄養学科 4回生	パテントコンテストは、全国学生の知的財産マインドを育てると共に、知的財産権制度の理解を促進することを目的に開催されている。平成26年度は、大学部門応募総数170件から13件が特許出願支援対象者に選出された。特許出願支援対象者は、発明の特許出願書類作成等の弁理士への相談料などが基本的に主催者負担となる。 受賞発明の名称:「微生物色素による健康増進作用」
2015/01/20	第16回キャンパスベンチャーグランプリ大阪 奨励賞	安井麻衣 鈴木美穂 浅井裕里奈 祝迫景子 南明里	生活環境学部食物栄養学科4回生	主に高齢者を対象とする疾病予防の料理教室「福食教室」の提案を行い、第16回キャンパスベンチャーグランプリ(CVG)大阪・奨励賞を受賞した。 また、日刊工業新聞に発表の様子が写真入りで掲載された。
2014/11/08	住空間ecoデザインコンペティションReal Size Thinking 2014 入賞	濱岡飛鳥 二石菜々子	人間文化研究科博士前期課程住環境学専攻 M1/ 生活環境学部住環境学科4回生	2004年に始まったデザインコンペティションで、積水ハウス、大阪ガス、TOKYO GAS、クリナップの4者による協賛。 プレ審査・1次審査・2次審査、3次審査を経て、関西、関東でそれぞれ4組の入賞者を決定。入賞者は原寸大モデルが作成され関西では、11/5-11/16に本町ガーデンスティで展示された。毎年総数200を超える作品応募があり、本学からの入賞者は、2階建て住宅の外部に取り付ける木製の可動格子のデザイン提案を行った。 受賞作品名「こぼれでる」
2014/10/24	第53回日本生気象学会 若手・学生発表コンテスト 優秀賞	金山美紗貴	生活環境学部 生活健康・衣環境学科生活健康学専攻 4回生	第53回日本生気象学会(2014年10月23日〜2014年10月25日)での若手および大学院学部学生の口頭発表コンテストにおいて、発表と質疑応答が優秀と認められた。受賞者は3名。発表題目は「ラットにおける恐怖記憶想起にもなう交感神経活動の応答と海馬神経活動との相関性」
2014/07/17	2014年(第25回)日本建築学会優秀卒業論文賞	可児知里	生活環境学部住環境学科2014年3月卒業	当該年度の学部卒業論文等の優れた論文を顕彰する。表彰件数15件以内 受賞した卒業論文題目:総合有効温度を用いた日本の各生活季節期の推定
2014年	空気調和・衛生工学会近畿支部学術研究発表会奨励賞受賞	栗山直子	生活環境学部 4回生	発表テーマ「冷房環境下における足元の不快感に関する実験的研究」
2013/03/09	奈良特産品料理部門 入賞	奈良の食プロジェクト		JAならけん主催「地産地消オリジナル料理コンテスト」
2013/03/08	第60回日本生態学会大会ポスター賞 優秀賞	内田さちえ	人間文化研究科博士前期課程・情報科学専攻	第60回日本生態学会大会(静岡大会)にてポスター発表「個体ベースモデルを用いた感染症の空間的拡大の研究」が、ポスター賞「動物個体群」分野において研究内容、発表技術がともに優れていると評価され、優秀賞を受賞した。
2013年	空気調和・衛生工学会近畿支部学術研究発表会奨励賞受賞	亀ヶ谷佳純	生活環境学部 4回生	発表テーマ「夏期の寝室温熱環境が高齢者と若齢者の終夜睡眠に与える影響」
2012/07/25	「県内大学生が創る奈良の未来事業」優秀賞	笹川祐里	代表者生活環境学部住環境学科4回生	「県内大学生が創る奈良の未来事業」は、多様化・複雑化する県政の様々な課題を解決するため、奈良県内の大学等に在籍する学生から政策提案を募集し、優秀と認められる提案を事業化するものである。 今回、27の提案が寄せられ、事前審査(書類選考)により選考された8グループが参加して本審査(公開コンペ方式による選考)を実施し、本学学生が提案した「奈良県産材製の児童用学習机・椅子・教卓の普及」が優秀賞に選出された。 今後は提案した学生たちと県担当者によるプロジェクトチームが設置され、事業化に向けた検討が行われる。
2012/01/27	平成23年度パテントコンテスト(主催:文部科学省、特許庁、日本弁理士会、(独)工業所有権情報・研修館)	阪本 理緒	生活環境学部 生活健康・衣環境学科	パテントコンテストは、全国学生の知的財産マインドを育てると共に、知的財産権制度の理解促進を目的に開催されている。受賞者は発明の名称「簡便遺伝子導入法」で、大学部門・特許出願支援対象者に選ばれた。本学としては2年連続の受賞となった。
2011/11/04	第50回日本生気象学会大会 若手・学生発表コンテスト優秀賞	青田江未	生活環境学部生活健康・衣環境学科生活健康学専攻	第50回日本生気象学会大会(2011年11月4日・5日、京都女子大学)において、若手および学生を対象とした発表コンテストで優秀な発表者に与えられる。本年度は3名が受賞した。 発表題目は、「暑熱負荷時の皮膚アセチルコリン放出量の加齢差」
2011/09/17	2011年度日本生物高分子学会大会 Best Presentation Award	水野 薫	生活環境学部食物栄養学科	2011年度日本生物高分子学会大会(2011年9月16-17日、金沢工業大学)において、30歳未満の優秀な発表者に与えられる。本年度は3名が受賞、発表題目は「忌避剤の効果の検討と目的化合物の同定」
2011/08/23	日本建築学会優秀卒業論文賞	丸山悠	生活環境学部住環境学科	1989年設置、建築教育振興基金による学生を対象とした論文表彰事業であり、優秀卒業/修士論文賞を設け、構造系・計画系・環境系の各分野からすぐれた論文を顕彰する。対象論文「タスクアンビエント照明に関する研究•器具の配光がタスクアンビエント比の容認率に与える影響•8212」
2011/01/28	平成22年度パテントコンテスト受賞ならびに独立行政法人工業所有権情報・研修館理事長賞	東 亜弥香	生活環境学部生活健康・衣環境学科	パテントコンテストは、全国学生の知的財産マインドを育てると共に、知的財産権制度の理解を促進することを目的に開催されている。平成22年度は、応募総数333件から15件が受賞した。受賞者の中から、さらに独立行政法人工業所有権情報・研修館理事長賞にも選ばれた。
2010/12/18	TEPCOインターカレッジデザイン選手権2010 佳作	三橋香織 佐藤まどか 真木梨華子	生活環境学部住環境学科	全国の建築系学生を対象にしたアイデアコンペ「TEPCOインターカレッジデザイン選手権」において、397点の応募の中から、佳作7点の1つに選ばれた。
2010/09/09	2010年日本建築学会「優秀卒業論文賞」	小原由貴 百武昌子	生活環境学部	日本建築学会「建築教育振興基金(タジマ基金)」による「優秀卒業論文賞」であり、この顕彰事業は、教育的観点から卒業論文を学業のひとつの成果として評価・顕彰し、表彰するものである。優秀卒業論文賞推薦理由として「入所児童数が増加傾向にある児童養護施設の今後の計画のあり方についての有益な知見がみちびかれており、論文としての完成度も高い」との評価を受けている。受賞テーマは「児童養護施設における生活の場としての子育て環境に関する研究」。

別添資料Ⅱ-Ⅱ-10：キャリア支援教育の取り組み（衣環境学科）

キャリアアップ科目群 専門職論 衣環境専攻卒業生による講義

- ◇ 平成 24 年度 木村昌絵氏(トヨタ自動車株式会社)・木村智加氏(特許庁審査業務部 意匠審査官)
- ◇ 平成 25 年度 深川愛子氏 (ワコール株式会社)・雪村まゆみ氏 (関西学院大学社会学部)
- ◇ 平成 26 年度 東和田恵理子氏 (トヨタ紡織株式会社)
- ◇ 平成 26 年度 秋川優子氏 (ユニチカトレーディング株式会社)
- ◇ 平成 27 年度 塚本香帆氏 (菅公学生服株式会社)

※衣環境では、平成 25 年度から、上記の在来生合宿研修、キャリア研修講習会、キャリアアップ科目などを衣環境キャリアアップ研修の一環と位置づけて、学生たちに広報を開始した。



別添資料Ⅱ-Ⅱ-14:生活環境学部卒業生の進路（平成 22～26 年度）

❖ 生活環境学部 (H26 年度)

❖ 食物栄養学科

〔亀岡市〕〔公立豊岡病院組合〕〔和歌山県教育委員会(中学校)〕
イオンリテール(株) 医療法人医誠会 井村屋(株) (株)えひめ飲料 (株)岡山木村屋 花王プロフェッショナル・サービス(株)
一般財団法人化学物質評価研究機構 (株)かんぼ生命 杏林堂薬局(株) 霧島酒造(株) (株)クリニカルサポート (株)クリニコ
(株)関西ケーズデンキ (株)テーブルマーク (株)デリカパーラー長野 中北薬品(株) (株)ニチレイフーズ パナソニック(株)
東淀川病院 光の子保育園 (株)福岡銀行 マルゼン薬局(株) 山崎製パン(株) 社会福祉法人夢工房 (株)ヨドバシカメラ

❖ 生活健康・衣環境学科

生活健康学専攻	〔広島労働局〕 (株)泉屋 医療法人健康会鳴田病院 オタフクソース(株) (株)楓工務店 一般財団法人近畿健康管理センター (株)神戸屋 (株)コスモス薬品 (株)ジンコーポレーション (株)セブン-イレブン・ジャパン 第一生命保険(株) ダイードリンコ(株) 東レ・メディカル(株) (株)トンボ フジパンググループ本社(株) ホクト(株) (株)三井住友銀行
衣環境学専攻	〔法務省東北地方法務局〕〔津市〕 (株)アイジーエー アンドールシステムズ(株) (株)ジーフット TIS(株) トーソー(株) (株)NICOLE (株)ニッセン (株)百五銀行 プライミクス(株) 一般財団法人ポーケン品質評価機構 (株)陽進堂 (株)リクルート・キャリア ローアシュレインジャパン(株) (株)ワコール

❖ 住環境学科

〔生駒市〕〔神戸市〕〔堺市〕〔富山県〕〔枚方市〕〔福岡市〕
SMBC日興証券(株) 大阪ガス(株) (株)合田工務店 JIPテクノサイエンス(株) (株)JALスカイ 住友林業ホームテック(株)
総合警備保障(株) ダイキン工業(株)(2) 大和ハウス工業(株) TIS(株) (株)デザインーク (株)東芝 東邦レオ(株) (株)ニトリ 日本郵便(株) (株)NENGO (株)姫路メタルアート ミサワホーム(株)

❖ 生活文化学科

〔京都府〕〔三重県教育委員会(高校)〕〔奈良県教育委員会(小学校)〕
(株)IHIシパウラ (株)足利銀行 アチーブメント(株) アッシュ・ペー・フランス(株) イオンモール(株) イオンリテール(株) ANA エアポートサービス(株) 関西総合システム(株) 京都製糖(株) ゴマボックス(株) 山陽物産(株) 積水ハウス(株)
(株)ゼネラルアサヒ (株)セブンイレブン・ジャパン 大東建託(株) 高市製薬(株) 東京海上日動火災保険(株)
(株)ニトリ 日本司法支援センター(法テラス) 日本生命保険相互会社 日本たばこ産業(株) (株)BBDO J WEST
(株)北国銀行 (株)マイクロウェブ (株)マクロミル 丸和油脂(株) (株)みずほフィナンシャルグループ (株)ゆうちょ銀行

❖ 生活環境学部(H25年度)

❖ 食物栄養学科

[近江八幡市立総合医療センター] [長崎県]『大阪府教育委員会(高校)』 (株)あわしま堂 石井食品(株) 社会福祉法人上賀茂保育園 京都桂病院 (株)クリニコ 神戸市民病院機構 堺市立堺病院 (株)さくら野百貨店 三栄源エフ・エフ・アイ(株) (株)ジャパンホームベーキングスクール 特定医療法人衆済会 増子記念病院 (財)食品環境検査協会 ダイヤ製菓(株) トヨハシ種苗(株) ナフス(株) 日本ハム(株) (株)バンビシャス奈良 (株)フジッコ 理想実業(株)	
---	--

❖ 生活健康・衣環境学科

生活健康学専攻	[名古屋市] 『京都府教育委員会(中学校)』 (株)カスタマーリレーションテレマーケティング (財)近畿健康管理センター (株)クスリのアオキ 社会保険診療報酬支払基金 ダイキン工業(株) 奈良県農業協同組合 日進化学(株) 日本生命保険相互会社(2) 平和商事グループ 養命酒製造(株) (株)わかさ生活
衣環境学専攻	[磐田市] [高知県] [長野県] [名古屋市] (株)AOKI (株)ノー坪製作所 小野(株) (財)カケンテストセンター 菅公学生服(株) 桑村繊維(株) java group セブンイレブン近鉄奈良駅北口店 (株)ティ・エス・シー (株)トンボ (財)ニッセンケン品質評価セ ンター (財)日本繊維製品品質技術センター (財)ポーケン品質評価機構 フリーインターナショナル(株) 丸久(株) (株)ワコール(2)

❖ 住環境学科

[(独)製品評価技術基盤機構] [大阪府] 愛知(株) (株)一条工務店 ANA新千歳空港(株) MID都市開発(株) (株)オリバー 国立大学法人京都大学 (株)クレディセゾン 山陽建設(株) (株)上毛新聞社 大建工業(株) 大和リビング(株) 東京海上日動火災保険(株) トヨタホーム(株) (株)トリドール 西日本電信電話(株) (株)ノーリツ (株)八十二銀行 (株)阪急交通社 (株)三井ホームデザイン研究所 (株)類設計室 YKK AP(株)	
--	--

❖ 生活文化学科

[宝塚市] [名古屋市] [福生市]『横浜市教育委員会(中学校)』 『開智学園(小学校)』 社会福祉法人青葉仁会 (株)アビバ (株)一条工務店 国立大学法人岡山大学 (独)高齢・障害・求職者雇用支援機 構 (独)住宅金融支援機構 (株)ジョイックス・コーポレーション セキスイファミエス中部(株) 全国健康保険協会 西尾信用金庫 西日本旅客鉄道(株) (株)ベネフィット・ワン (株)みずほフィナンシャルグループ 三井食品(株) ヤマト 運輸(株) (株)ゆうちょ銀行	
---	--

❖ 生活環境学部(H24年度)

❖ 食物栄養学科

アスザックフーズ(株) (株)アプリーティセサモ 一正蒲鉾(株) (株)ヴィ・ド・フランス (株)ウェルネス湖北 (株)ABC Cooking St udio 医療法人社団喜生会新富士病院 神戸市民病院機構 国立大学法人島根大学医学部附属病院 友塾 公益財団法人日本食品油脂検査協会 ミズノ(株) (株)山口銀行 ユタカフーズ(株) 理研ビタミン(株) (株)ロック・フィールド [上市町] [瀬戸市] [東京都]『埼玉県教育委員会(中学校)』	
---	--

❖ 生活健康・衣環境学科

生活健康学専攻	(株)アッシュ・シー・クレアシオン (株)アルビオン イオン リテール(株) 石井食品(株) 香川県農業協同組合 一般財団法人近畿健康管理センター シスメックス(株) 市民生活協同組合ならこーブ (株)スカイ 瀬 戸内通信鋼業(株) 日本赤十字社 日本マクドナルド(株) バイエル薬品(株) 白鶴酒造(株) (株)パルス ブラザー工業(株) (株)平成建設 (株)ラピーヌ [生駒市]
衣環境学専攻	(株)アシックス イトキン(株) クリケット(株) (株)さなる (株)山晃住宅 ジョンソン・エンド・ジョンソン(株) セ キミキ・グループ(株) (株)大丸松坂屋百貨店 高見(株) (株)タカラ 田窪(株) (株)玉屋 (株)ナルミヤインタ ーナショナル 福助工業(株) 北陸エステアル協同組合 丸山繊維産業(株) (株)メイワボックス (株)ユニ クロ YKK(株) (株)ワコール

❖ 住環境学科

(株)アクアホーム イオンクレジットサービス(株) (株)一条工務店 (株)ウッドワン (株)エクセディ クリナップ(株) (株)山陰合同 銀行 (株)サンゲツ (株)サン・メルクス 諏訪信用金庫 積水ハウスリフォーム(株) TOTOバスクリエイト(株) パナホーム (株) 東日本旅客鉄道(株) (株)フォレストコーポレーション 福山通運(株) 丸信製粉(株) 三井不動産リフォーム(株) (株)ゆう ちょ銀行 (株)吉貞 吉本興業(株) [奈良県]	
--	--

❖ 生活文化学科

公益財団法人アイメイト協会 (株)アドバンスクリエイト イオンリテール(株)(2) (株)WAVE 大阪中河内農業協同組合 カコムス(株) (株)かんでんエンジニアリング (株)近畿大阪銀行 小林産業(株) スルガスタッフサービス(株) 全国健康保険協 会 田窪(株) TIS(株) (株)トヨタコミュニケーションシステム 長島観光開発(株) 日本生命保険相互会社 (株)浜学園 (株)ファイブアークス (株)北陸銀行 (株)ゆうちょ銀行 [大阪地方裁判所] [愛媛県警察] [香川県] [西宮市] [寝屋川市] 『兵庫県教育委員会(小学校)(2)』	
---	--

❖ 生活環境学部 (H23 年度)

食物栄養学科

(医)あすか会 カルビー(株) 関西福祉科学大学 (株)クリニコ (株)グレープストーン 月桂冠(株)
 (株)ジュノエスケイブル (株)ドンク 奈良市総合医療検査センター (株)ナリコマエンタープライズ
 (株)フィールコーポレーション (株)三重給食センター 三重大学医学部附属病院 森永乳業(株) ヤマエ久野(株)
 [高知県警察] 『大阪府教育委員会(高等学校)』 『奈良県教育委員会(中学校)』

健康衣環境学科

生活健康学専攻	エア・ウォーター防災(株) MSD(株) (株)ジェイテクト (株)トーカイ 東芝キャリア(株) 長野県信用組合 新田ゼラチン(株) 日本赤十字社 (株)ブルボン [奈良県] [新潟県]
衣環境学専攻	(株)インフォテクノ朝日 (株)ウィルウェイ (株)NTT データ 岡本(株) 花王(株) (株)京都銀行 澤田(株) 島田商事(株) (株)千趣会 (株)玉屋 TIS(株) (株)DNP 情報システム (株)中川政七商店 (株)ハニーズ (株)ワコール

住環境学科

アッシュ・ペー・フランス(株) 植彌加藤造園(株) (株)ウッドワン (株)エムイーシー 鹿島建設(株) 国立大学法人岐阜大学
 (株)京都銀行 クリナップ(株) (株)シーエッチ建築工房 島田商事(株) 清水建設(株) 住友不動産リフォーム(株)
 生和不動産保証(株) (株)銭高組 ダイワラクダ工業(株) 大和リゾート(株) トランスコスモス(株) 西日本旅客鉄道(株)
 (株)日建技術コンサルタント (株)日積サーベイ パナソニック電工(株) (株)ファーストリテイリング 北海道セキスイハイム(株)
 マックスバリュ東海(株) (株)三井ホームデザイン研究所 ヤマハリビングテック(株)(2) ローム(株)
 [奈良県] [広島県] [堺市] [富山市]

生活文化学科

(学)北里研究所 京都グレインシステム(株) (株)共立メンテナンス (医)蔵本ウイメンズクリニック
 独立行政法人国立印刷局 住友生命保険相互会社 ソフトバンクグループ (株)南都銀行 野村證券(株)
 (株)百五銀行 福山通運(株) (株)ベネフィット・ワン (有)勉強堂 正森三博法律事務所 (株)三菱東京UFJ銀行
 [犬山市] [岐阜市] [諏訪市] [福山市] [袋井市]
 『大阪市教育委員会(小学校)』 『明石市教育委員会(幼稚園)』 『近畿大学附属小学校』

❖ 生活環境学部 (H22 年度)

食物栄養学科

(株)青木松風庵 イオンペーカー(株) 上野製菓(株) (医)開聞クリニック (株)新保哲也アトリエ 森永乳業(株) ヤマハリ
 ビングテック(株) (株)ユーハイム
 [徳島県] [赤磐市] [生駒市] [静岡市] [富山市] [名古屋市]

生活健康・衣環境学科

生活健康学専攻	(株)アルビオン 公益財団法人尼崎市スポーツ振興事業団 (株)伊予銀行 (株)ヴィッド・フランス (株)オー ジースポーツ 小山(株) セガミメディクス(株) 東電ピーアール(株) 明治製菓(株) メロディアン(株) (株)や ずや [愛媛県]
衣環境学専攻	(株)アイジーイー (株)大隅自動車商会 岡本(株) 清原(株) 京都鯉節(株) (株)サイゼリヤ (株)ジェイア ール西日本伊勢丹 テック・ワーク(株) (株)トリニティアーツ (株)ドンク 日本化学繊維検査協会 日本織 維製品品質技術センター (株)ハッピーチャイルド ベイエリアサービス(株) (株)ワコール [檀原市] [佐世保市]

住環境学科

(株)青森銀行 (株)一条公務店 (株)イノセンス オーリス(株) 岩水開発(株) 北野木材(株) 社会医療法人きつこう会多根
 総合病院 (株)グラフィック クリナップ(株) ゲンダイエージェンシー(株) コイズミ照明(株) (株)シャルドネ (株)TAK-QS
 (株)ニトリ パナソニック電工(株) パナソニック電工インテリア照明(株) パナホーム(株) 三井不動産住宅サービス関西(株)
 (医)もとだ整形外科クリニック (株)四電工 六花亭製菓(株)
 [金沢市] [浜松市]

生活文化学科

いちよし証券(株) 磐田信用金庫 (株)NTTデータ 大谷医院 (株)オージス総研 (株)サンゲツ 社会保険診療報酬支払
 基金 ジャパン・インターナショナル総合研究所 仙南信用金庫 (株)デンソー (株)東京海上日動キャリアサービス 東
 洋証券(株) 富永貿易(株) (株)パイオン (株)ボン・マリアージュ 丸一(株) 三井住友カード(株) (株)三菱東京UFJ銀行
 [金沢市] [酒田市] [塩尻市] [福岡市] [奈良県警察] 『京都聖母学院小学校』

教 育

人間文化研究科

(別 添 資 料)

目 次

別添資料Ⅰ－１	： アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー	P 1
別添資料Ⅱ－Ⅰ－２	： 大学院オープンキャンパスの参加学生の年度別人数	P 1
別添資料Ⅱ－Ⅰ－３	： 在学生へのアンケート様式	P 2
別添資料Ⅱ－Ⅰ－４	： 大学院 FD 研修会実施年月日と参加者数	P 4
別添資料Ⅱ－Ⅰ－６	： 国立大学の学部・大学院の教員数と女性教員比率（常勤の助教以上）	P 4
別添資料Ⅱ－Ⅰ－10	： 現況報告書の様式	P 5
別添資料Ⅱ－Ⅱ－13	： 平成 27 年度博士前期課程進路状況	P 6
別添資料Ⅱ－Ⅱ－15	： 平成 26 年度 博士前期課程就職先一覧	P 7
別添資料Ⅱ－Ⅱ－16	： ポスドクインターンシップ	P 8
別添資料Ⅱ－Ⅱ－17	： ポスドクインターンシップ就職状況	P 8
別添資料Ⅲ－１	： 研究倫理教育の実施について（大学院学生向け資料）	P 9
別添資料Ⅲ－２	： 統計解析資料 博士前期課程	P10

別添資料Ⅰ－1：アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー

以下のウェブページに記載されています。

アドミッションポリシー

http://www.nara-wu.ac.jp/daigakuin/policy_master_ad.html 博士前期課程

http://www.nara-wu.ac.jp/daigakuin/policy_doctor_ad.html 博士後期課程

カリキュラムポリシー

http://www.nara-wu.ac.jp/daigakuin/policy_master_cr.html 博士前期課程

http://www.nara-wu.ac.jp/daigakuin/policy_doctor_cr.html 博士後期課程

ディプロマポリシー

http://www.nara-wu.ac.jp/daigakuin/policy_master_dp.html 博士前期課程

http://www.nara-wu.ac.jp/daigakuin/policy_doctor_dp.html 博士後期課程

別添資料Ⅱ－Ⅰ－2：大学院オープンキャンパスの参加学生の年度別人数

大学院オープンキャンパスの参加者数

実施日	時間	参加者数
平成 23 年 7 月 23 日(土)	11:00～16:00	26 名
平成 23 年 11 月 5 日(土)	11:00～16:00	22 名
平成 24 年 6 月 2 日(土)	10:30～16:00	20 名
平成 24 年 11 月 3 日(土)	10:30～16:00	不明
平成 25 年 6 月 16 日(日)	10:30～16:00	28 名
平成 25 年 11 月 2 日(土)	10:30～16:00	28 名
平成 26 年 6 月 7 日(土)	10:30～16:00	33 名
平成 26 年 11 月 1 日(土)	10:30～16:00	36 名
平成 27 年 6 月 6 日(土)	10:30～16:00	44 名
平成 27 年 11 月 1 日(日)	10:30～16:00	45 名

別添資料Ⅱ－Ⅰ－3：在学生へのアンケート様式

平成 27 年度奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期・後期課程アンケート
(学生用)

このアンケートは奈良女子大学大学院人間文化研究科 FD 活動の一環として行われ、結果は資料として集計され本学大学院の改善や今後の在り方を検討する目的のみに使用されます。アンケートの結果をこの目的以外に使用することはなく、皆さんの成績評価や学位授与に影響することも一切ありません。できるだけ多くの学生諸君がアンケートにご協力くださるようお願いいたします。無記名でありのままをお答えください。回答いただいたアンケート用紙は、学務課大学院係 (F 棟 2 階) に設置された回収ボックスに**平成 28 年 2 月 29 日 (月) までに**提出してください。

人間文化研究科 FD 委員会

【あなたについての質問】

(1) 該当する学年を選び、所属する専攻名を記入してください。

1. M1 2. M2 以上 3. D1 4. D2 5. D3 以上

専攻名：[] 専攻 (差し支えなければ) [] コース・講座

(2) あなたはどの入試選抜制度で現在所属する専攻に入学されましたか。

1. 一般選抜 2. 社会人特別選抜 3. 外国人留学生特別選抜 4. その他特別選抜

以下の質問に対し該当する回答を○で囲んでください。

【学位論文研究について】

(3) あなたは学位論文研究を行う上で、主指導教員の指導や助言・サポートに満足していますか。

1. 大変満足している。 2. どちらかといえば満足している。 3. どちらかといえば満足していない。
4. まったく満足していない。 5. わからない。

(4) あなたが学位論文研究を行う上で、主指導教員と副指導教員の複数指導体制が効果的に機能していますか。

1. 大いに機能している。 2. どちらかといえば機能している。 3. どちらかといえば機能していない。
4. まったく機能していない。 5. わからない。

(5) あなたが学位論文を執筆する上で、主指導教員の指導や助言・サポートに満足していますか。

1. 大変満足している。 2. どちらかといえば満足している。 3. どちらかといえば満足していない。
4. まったく満足していない。 5. わからない。

【教育研究設備や施設について】

(6) あなたが本研究科で研究を行う上で、本学の設備や施設 (研究室、研究設備、図書館など) に満足していますか。

1. 大変満足している。 2. どちらかといえば満足している。 3. どちらかといえば満足していない。
4. まったく満足していない。 5. わからない。

(7) あなたが本研究科で学業を行う上で、本学の設備や施設 (教室、セミナー室、図書館など) に満足していますか。

1. 大変満足している。 2. どちらかといえば満足している。 3. どちらかといえば満足していない。
4. まったく満足していない。 5. わからない。

【授業について】

(8) あなたが属する専攻の授業科目 (講義や演習、セミナーなど) の内容に満足していますか。

1. 大変満足している。 2. どちらかといえば満足している。 3. どちらかといえば満足していない。
4. まったく満足していない。 5. わからない。

(9) あなたが属する専攻の授業科目 (講義や演習、セミナーなど) の内容を理解できていますか。

1. ほとんど理解できています。 2. どちらかといえば理解できています。
3. どちらかといえば理解できていない。 4. まったく理解できていない。 5. わからない。

(10) (前期課程の学生のみ答えてください) あなたは教職・専修免許を取得しようと思いませんか。

1. 取得する。 2. 取得しない。 3. わからない。

(11) (前期課程の学生のみ答えてください) あなたの履修系列を選んでください。

1. 専修系 2. 複合系

(12) (質問 (8) で「2. 複合系」を選んだ学生のみ答えてください)

あなたは複合系の履修カリキュラムに満足していますか。

1. 大変満足している。 2. どちらかといえば満足している。 3. どちらかといえば満足していない。
4. まったく満足していない。 5. わからない。

【支援体制について】

(13) (授業料を免除された学生のみ答えてください) 授業料免除制度はあなたにとって役に立ちましたか。

1. 大変役に立った。 2. どちらかといえば役に立った。 3. どちらかといえば役に立たなかった。
4. まったく役に立たなかった。 5. わからない。

*****裏面に続く*****

- (14) (日本学生支援機構の奨学金を受給している学生のみ答えてください) 日本学生支援機構からの奨学金はあなたにとって役に立ちましたか。
1. 大変役に立った。 2. どちらかといえば役に立った。 3. どちらかといえば役に立たなかった。
4. まったく役に立たなかった。 5. わからない。
- (15) (TAやRAに採用された学生のみ答えてください) TAやRA制度はあなたにとって役に立ちましたか。
1. 大変役に立った。 2. どちらかといえば役に立った。 3. どちらかといえば役に立たなかった。
4. まったく役に立たなかった。 5. わからない。
- (16) (長期履修制度を利用した学生のみ答えてください) 長期履修制度はあなたにとって役に立ちましたか。
1. 大変役に立った。 2. どちらかといえば役に立った。 3. どちらかといえば役に立たなかった。
4. まったく役に立たなかった。 5. わからない。
- (17) 入学時に配布された履修案内、開講科目概要、その他パンフレット等は役に立ちましたか。
1. 大変役に立った。 2. どちらかといえば役に立った。 3. どちらかといえば役に立たなかった。
4. まったく役に立たなかった。 5. わからない。
- (18) あなたが就職活動を行う上で、本学の支援体制は役に立ちましたか。
1. 大変役に立った。 2. どちらかといえば役に立った。 3. どちらかといえば役に立たなかった。
4. まったく役に立たなかった。 5. わからない。

以下は自由記述形式の質問です。

- (19) 【学位論文研究について】(質問(3)～(5))に関連してご意見・要望・コメント等を書いてください。

- (20) 【教育研究設備や施設について】(質問(6),(7))に関連してご意見・要望・コメント等を書いてください。

- (21) 【授業について】(質問(8)～(12))に関連してご意見・要望・コメント等を書いてください。

- (22) 【支援体制について】(質問(13)～(18))に関連してご意見・要望・コメント等を書いてください。

- (23) その他自由にご意見を書いてください。

ご協力ありがとうございました。

別添資料Ⅱ－Ⅰ－4： 大学院 FD 研修会実施年月日と参加者数（第二期）

平成 22 年度－25 年度は、各学部の FD 研修会と共同開催

年度	学部・研究科	実施日	テーマ
平成 22 年度	文学部	7 月 28 日	学部初年次導入教育のあり方について－岡山大学文学部との奈良女子大学文学部の事例検討－
		11 月 25 日	データに見る近年の奈良女子大学文学生の動向
	理学部	3 月 8 日	大学院修士課程の入学確保のため、各学科はいかに取り組んでいるのか
	生活環境学部	12 月 1 日	授業の問題点と工夫
平成 23 年度	文学部	4 月 20 日	大学院前期課程（文学系）の現状と課題・・・とくに 入学定員問題に関連して・・・
	理学部	3 月 8 日	初等教育、中等教育と理学部の連携事業
	生活環境学部	11 月 30 日	平成 22 年度に実施した「生活環境学部専門教育科目のアンケート及びその結果に対する教員のリプライ」「3 回生アンケート」「4 回生アンケート」を踏まえての報告と討論
平成 24 年度	理学部	12 月 5 日	授業評価アンケートからみえてくること
	生活環境学部	2 月 8 日	平成 23 年度に実施した「生活環境学部専門教育科目のアンケート及びその結果に対する教員のリプライ」「3 回生アンケート」「4 回生アンケート」を踏まえての報告と討論
平成 25 年度	文学部	3 月 19 日	文学部の成績分布の現状
	理学部	1 月 8 日	理学部における卒業研究の現状と課題
	生活環境学部	2 月 7 日	各学科・専攻における FD 取り組みの現況
平成 26 年度	人間文化研究科	10 月 30 日	－TA の充実のための取り組みや工夫に関する報告－
平成 27 年度	人間文化研究科	12 月 3 日	大学院アンケート結果からみえる課題－改善に向けて－

別添資料Ⅱ－Ⅰ－6 国立大学の学部・大学院の教員数と女性教員比率（常勤の助教以上）（『国立大学における男女共同参画推進の実施に関する第 12 回追跡調査報告書』国立大学協会、平成 27 年 12 月公表 より引用）

専攻分野	小 計(助手を除く)							
	女		男		計		女性比率%	
		うち任期付き		うち任期付き		うち任期付き		うち任期付き
人文科学	827	52	2,664	96	3,491	148	23.7	35.1
社会科学	643	68	3,146	182	3,789	250	17.0	27.2
理学	393	34	5,080	219	5,473	253	7.2	13.4
工学	687	76	11,950	714	12,637	790	5.4	9.6
農学	430	86	3,777	240	4,207	326	10.2	26.4
保健	3,796	866	14,749	3,220	18,545	4,086	20.5	21.2
商船	2	0	11	0	13	0	15.4	－
家政	85	0	66	0	151	0	56.3	－
教育	1,232	14	4,298	72	5,530	86	22.3	16.3
芸術	103	20	421	16	524	36	19.7	55.6
その他	1,482	361	7,275	1,451	8,757	1,812	16.9	19.9
合計	9,680	1,577	53,437	6,210	63,117	7,787	15.3	20.3

別添資料Ⅱ－Ⅰ－10：現況報告書の様式

【平成27年9月提出用】
提出日：平成 年 月 日

大学院博士後期課程現況報告書			
学生番号	学生氏名	入学年：平成 年 月 専攻・講座名：	専攻 講座
主任指導教員：		印	
副指導教員：		印 印 印 印	
学位取得見込みに関する審査 平成28年3月または平成28年9月に学位取得を予定している学生のみ記載			
学位取得に関する事項（該当する記号に○を付す） 平成28年3月または平成28年9月に学位取得を予定している学生のみ記載			
平成28年3月の学位取得可能性 イ 60%未満 ロ 60%以上80%未満 ハ 80%以上90%未満 ニ 90%以上95%未満 ホ 95%以上			
平成28年9月の学位取得可能性 イ 60%未満 ロ 60%以上80%未満 ハ 80%以上90%未満 ニ 90%以上95%未満 ホ 95%以上			
研究の進捗状況			
研究発表・論文発表などの状況（裏面に記載） 教育環境（指導教員間の連携指導、学びあえる友人関係等の学生レベルの学習環境など）			
指導教員の所見（主任指導教員だけでなく、副指導教員（代表）も簡単に所見を記入して下さい） 主任指導教員： 副指導教員（ ）：			

<p>【報告会等】 月 日（ ） 出席者（ ） ＜実施項目に○をつけてください。＞ 1. 進捗状況の報告書による内容確認 2. 実施形態 （1）報告会 （2）その他（自由記述） 自由記述欄</p> <div style="border: 1px solid black; height: 50px; width: 100%;"></div>																				
<p>学生氏名【 】 研究発表・論文発表などの状況 【前回提出分以降平成27年4月1日～平成27年9月30日の間で研究発表・論文発表したものを記入してください。】 ※ 掲載頁は、最初と最後を記載ください。なお、査読ありのものについては、掲載誌名に下線を付してください ※ 記入欄が不足する場合は、この頁をコピー-&ペーストで追加して記入して下さい</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>著者・発表者名</th> <th>論文名・発表題目</th> <th>※掲載誌名・巻号・頁、発表学会名等</th> <th>発表・掲載日(予定)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> </tbody> </table> <p>研究発表・論文発表以外に記載すべき事項がありましたら、以下に記入してください。</p>	著者・発表者名	論文名・発表題目	※掲載誌名・巻号・頁、発表学会名等	発表・掲載日(予定)																
著者・発表者名	論文名・発表題目	※掲載誌名・巻号・頁、発表学会名等	発表・掲載日(予定)																	

資料Ⅱ－Ⅱ－13：平成27年度博士前期課程進路状況

平成28年5月1日現在

大学院	専攻	平成27年度修了者数			就職希望				進学			その他 (人)	不明 (人)
		9月 修了 (人)	3月 修了 (人)	合計 (人) <a>	就職 希望者 数 (人) 	就職者 数(人) <c>	就職率(※)		大学院 (人) <f>	学部等 (人)	その他 (人)		
							本学方 式 <d>	大学通 信方式 <e>					
人間文化 研究科 博士前期 課程	国際社会 文化学専攻	2	12	14	7	6	85.7%	60.0%	4	0	0	3	0
	言語文化学専攻	2	10	12	9	9	100.0%	90.0%	2	0	0	1	0
	人間行動科学専攻	2	16	18	16	13	81.3%	76.5%	1	0	0	1	0
	数学専攻	0	13	13	13	13	100.0%	100.0%	0	0	0	0	0
	物理科学専攻	0	16	16	15	15	100.0%	100.0%	1	0	0	0	0
	化学専攻	0	21	21	20	20	100.0%	100.0%	1	0	0	0	0
	生物科学専攻	1	22	23	21	21	100.0%	95.5%	1	0	0	1	0
	情報科学専攻	0	19	19	17	17	100.0%	94.4%	1	0	0	1	0
	食物栄養学専攻	3	12	15	14	13	92.9%	92.9%	1	0	0	0	0
	生活健康・ 衣環境学専攻	1	0	1	1	0	0.0%	0.0%	0	0	0	0	0
	住環境学専攻	3	11	14	10	8	80.0%	80.0%	4	0	0	0	0
	生活文化学専攻	4	14	18	13	9	69.2%	60.0%	3	0	0	1	1
	心身健康学専攻	0	13	13	11	11	91.7%	100.0%	2	0	0	0	0
	合計		18	179	197	167	155	92.8%	88.1%	21	0	0	8

※ その他には、進学希望者の進学先未決定者、就職も進学も希望しない者を含む。

※ 就職率の算出方法

・本学方式 就職率<d>=就職者数<c>÷就職希望者数

・大学通信方式 就職率<e>=就職者数<c>÷(修了者数<a>-大学院進学予定者数<f>)

大学通信方式は、「(株)大学通信」が行うアンケート調査(対象:全国の国公私立大学。時期:5月、12月)で採られる算出方法で、その結果が「サンデー毎日」「週刊東洋経済」「大学ランキング(朝日新聞出版刊)」に掲載されるものです。

別添資料Ⅱ－Ⅱ－15：平成26年度 博士前期課程就職先一覧

❖ 大学院

❖ 人間文化研究科博士前期課程

国際社会文化学専攻	[和泉市] [琴平町] [豊中市] 『茨城県教育委員会(小学校)』 『広島県教育委員会(高校)』 株式会社リクルート・キャリア
言語文化学専攻	『追手門学院中学校・高等学校(高校)』 『清風南海学園(高校)』 スペシャライズドグループ株式会社 公益財団法人福武財団
人間行動科学専攻	『大阪成蹊大学(大学・短大)』『奈良市立幼稚園(幼稚園)』 『洛陽総合高等学校(高校)』 株式会社Z会
数学専攻	[総務省近畿総合通信局] 『京都府教育委員会(高校)』『静岡県教育委員会(高校)』『岡山学芸館高等学校(高校)』 アドソル日進株式会社 アメリカンファミリー生命保険株式会社 株式会社京都銀行 株式会社東芝
物理科学専攻	『兵庫県教育委員会(高校)』『比叡山中学校・高等学校(高校)』 株式会社朝日新聞社 AVCテクノロジー株式会社 AVCマルチメディアソフト株式会社 株式会社科学情報システムズ 新日鐵住金株式会社 株式会社新陽社 住友電気工業株式会社 ダイキン工業株式会社 株式会社東芝 ニッセイ情報テクノロジー株式会社 日本電気航空宇宙システム株式会社 パナソニック株式会社(2) 三菱スペース・ソフトウェア株式会社 株式会社南日本情報処理センター
化学専攻	[石川県] 『神戸市教育委員会(中学校)』 大阪シーリング印刷株式会社 花王株式会社 関電システムソリューションズ株式会社 株式会社呉竹 株式会社GSユアサ 株式会社島津テクノリサーチ 株式会社SCREENセミコンダクターソリューションズ 株式会社積水樹脂 大八化学工業株式会社 株式会社千代田グラビヤ TDK株式会社 凸版印刷株式会社 日産自動車株式会社(2) 日本リサイクルセンター株式会社 株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズ ピアス株式会社 株式会社日立建機ティエラ メビックス株式会社 ロート製薬株式会社
生物科学専攻	[高岡市] イービーエス株式会社 上野製薬株式会社 くまざわ書店グループ株式会社 株式会社島津製作所(2) 株式会社千趣会 株式会社田村薬品工業 株式会社テルモ株式会社 国立大学法人奈良女子大学 日本製粉株式会社 パナソニック株式会社 株式会社焼津水産化学工業株式会社
情報科学専攻	[生駒市] 『蒲田女子高等学校(高校)』 クボタシステム開発株式会社 シャープ株式会社 株式会社デンソー 株式会社東芝 株式会社奈良情報システム 日産自動車株式会社 公益財団法人日本道路交通情報センター 株式会社日立製作所 富士通株式会社(3) 株式会社堀場テクノサービス 三菱電機株式会社(3) 楽天株式会社 株式会社NTTドコモ
食物栄養学専攻	[厚生労働省検疫所] 『石川県公立中学校(中学校)』『東洋食品工業短期大学(大学・短大)』『奈良県教育委員会(小学校)』 一般財団法人倉敷成人病センター 一般財団法人食品分析開発センターSUNATEC 株式会社オージス総研 株式会社メイワボックス
生活健康・衣環境学専攻	三洋電機株式会社 株式会社レナウン
住環境学専攻	[奈良県] [野迫川村] [大阪府] アール・イー・ジャパン株式会社 株式会社大林組 株式会社オリエンタルコンサルタンツ トクラス株式会社 株式会社日建設 計 ヒューリック株式会社 PLANET Creations関谷昌人建築設計アトリエ 株式会社ミックス
生活文化学専攻	株式会社ブライツコンサルティング レジェンダ・コーポレーション株式会社

別添資料Ⅱ-Ⅱ-16：ポスドクインターンシップ

国立大学法人奈良女子大学 平成23年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ポスドク・インターンシップ推進事業」
女性のポスドク等々のキャリアパス多様化を目指す
《キャリアの壁》打開策

女性のポスドク等々が、職業世界を広く理解し、自分らしい働き方・生き方を見つけ、様々な職種で活躍できるよう全学を挙げて支援します。女性のポスドク等々の『キャリアパス多様化』に向けた先導的モデルになることを目指します。

学長
男女共同参画推進機構
キャリア開発支援センター
キャリア開発支援本部

長期(3~4か月)インターンシップへの派遣
私らしい働き方・生き方への第一歩

知識・技術面でのサポート
実践的な講義
企業人・起業家・団体職員らとの交流会
女性のための起業セミナー
興味ある職業人へのインタビューの機会

心理・情報面でのサポート
ライフ・キャリア・デザインラボ
キャリア・サポート・グループ
メンター・システム
経済面でのサポート
育児支援金制度

自己分析・自己PR作成プログラム
価値観、興味、性格、能力、経歴、環境の要因、使命感、人生観、生活で抱える課題のバランス、(キャリアの壁)の予測と対策

多様な働き方・働き方を尊重する大学の方針の表明
教員の意識啓発のための参加型学習会

キャリアパス多様化支援のホームページ
キャリア・コーディネーターの配置
博士号取得後の就職
ポスドク・博士後期課程学生
結婚・妊娠・出産
育児・介護

連絡先 奈良女子大学 男女共同参画推進機構 キャリア開発支援本部
〒630-9506 奈良市北魚屋西町
TEL & FAX: 0742-20-3572 E-mail: career-k@cc.nara-wu.ac.jp

別添資料Ⅱ-Ⅱ-17：

ポスドクインターンシップ就職状況

長期インターンシップ実績		20160414				
年度	インターンシップ受入機関	就職状況			備考	
		定時勤務型	非常勤			
H24年度	NPO法人	健康・文化	東京都	受入先		
	公益財団法人	医療系	兵庫県	公立病院研究員		
	株式会社	IT系	静岡県	高校教師		
	公益財団法人	国際交流	大阪府	翻訳受託(受入先)		
	博物館	博物館	和歌山県	高校教師		
	工房	伝統工芸	石川県	起業		
	財団法人	国際平和	大阪府	受入先		
	株式会社	教育系	東京都	受入先		
文化財修理者	文化財	東京都	大学専任講師			
年度	インターンシップ受入機関	就職状況				
		定時勤務型	非常勤			
H25年度	公益財団法人	国際交流	京都府	大学専任教員		
	株式会社	金融サービス	東京都	受入先		
	公益財団法人	シンクタンク	大阪府	受入先		
	NPO法人	多文化共生	兵庫県	大学専任講師		
	公益財団法人	国際交流	大阪府	起業		
	国際機関	保健	神戸市	法人職員		
	株式会社	科学教育	東京都	受入先		
	株式会社	科学教育	東京都	大学教務補佐員		
	一般社団法人	出版	静岡県	法人職員		
	株式会社	コンサルティング	大阪府	受入先		
NPO法人	教育	京都府	大学職員			
株式会社	サービス	大阪府	大学研究員			
年度	インターンシップ受入機関	就職状況				
		定時勤務型	非常勤			
H26年度	一般財団法人	国際観光	奈良県	TV局(中国)		
	社会福祉法人	社会福祉協議会	大阪府	大学講師(中国)		
	株式会社	画像処理	京都府		海外転居	
	国立大学法人	地域連携	愛知県	大学職員		
	県立機関	森林技術	奈良県	集落支援員		
	株式会社	製菓	京都府	受入先		
	株式会社	情報サービス	大阪府	研究員(台湾)		
	社会福祉法人	点字図書館	東京都	大学助教		
	株式会社	出版	京都府	起業		
	株式会社	コンサルティング	埼玉県	高校教師		
	公・学共同事業	博物館	京都府		大学非常勤講師	
	株式会社	デザイン	東京都	一般企業		
	株式会社	就労支援	奈良県	受入先		
	有限会社	映画制作	奈良県	大学研究員		
	学校法人	教育	大阪府	受入先		
株式会社	再生医療	京都府	一般企業			
株式会社	自動車販売	滋賀県	受入先			
年度	インターンシップ受入機関	就職状況				
		定時勤務型	非常勤			
H27年度	株式会社	自然食品販売	大阪府	一般企業		
	宗教法人	宗務庁	滋賀県		就活中	
	行政	区役所	東京都		大学教育助手	
	株式会社	建築事務所	東京都	起業		
	株式会社	乳製品製造	大阪府	大学研究員		
	株式会社	旅行サービス	大阪府	独法研究員		
	社会福祉法人	視覚障害者支援	大阪府	大学教員(台湾)		
	株式会社	製菓	東京都	一般企業		
	県立機関	図書館	奈良県		大学非常勤講師	
	美術館	美術館	米国	一般企業		
	公益財団法人	設計事務所	三重県	受入先		
	商工会議所	商工会議所	奈良県	大学教員(中国)		
	公益社団法人	観光	奈良県		大学特任助教	
	株式会社	食品	京都府	受入先		
	有限会社	出版	大阪府		執筆受託(受入先)	
工房	草木染	神奈川県				
年度	H24	H25	H26	H27	計	
派遣者数	9	12	17	16	54	
就職状況	定時勤務型	7	12	15	10	44
	非常勤	2	0	1	4	7
	その他	0	0	1	2	3

別添資料Ⅲ－1：研究倫理教育の実施について（大学院学生向け資料）

研究倫理教育の実施について

大学院学生向け資料

奈良女子大学大学院人間文化研究科における研究倫理教育の実施について

平成27年4月4日
大学院人間文化研究科

平成27年度より、研究不正を未然に防ぐための研究倫理教育を本研究科において実施することになりました。データや結果の捏造、改ざん、ならびに他者の研究成果等の盗用といった研究活動における不正行為は、健全な学術活動の発展を妨げ冒涇するものであり、本来あってはならないものです。平成27年度は研究倫理教育実施の最初の年度となりますので、本研究科に所属する全ての学年の大学院学生（博士前期課程ならびに後期課程）が研究倫理教育を受けることになります。以下の方法により、研究倫理教育を受講してください。

受講方法

1) CITI Japan プロジェクトが提供するインターネット上の e-learning プログラム（以後、CITI プログラム）を受講します。CITI プログラムを用いた研究倫理教育は、各専攻が定める論文等作成群科目（博士前期課程）もしくは博士論文執筆指導（博士後期課程）の一部として行います。CITI プログラムを受講していることがこれらの科目の単位取得の必要条件となります。最終的には、修士論文あるいは博士論文提出の必要条件となります。

2) 4月以降に全ての学生に対してアカウント（ログイン名とパスワード）を作成し、各専攻長を通じて配布します。各自ウェブブラウザから [CITI プログラム \(http://edu.citiprogram.jp/\)](http://edu.citiprogram.jp/) にアクセスして受講します。ウェブブラウザからの受講となるので、受講時間・受講場所とは問いませんが、論文等作成群科目（博士前期課程）では演習指導もしくは特別研究、博士後期課程では博士論文執筆指導の単位取得に関係するので、授業が行われている期間内に必ず受講を終了してください。

3) CITI プログラムは多数の単元を提供していますが、受講コース「01 責任ある研究行為：基礎編 Stage 1」中の各専攻が定める単元を受講し、クイズ形式の試験を受けます。試験を受けることで受講記録が残ります。現時点では成績（正答率）に関する条件は設けていませんが、各専攻が定める単元を受講していることが論文等作成群科目ならびに博士論文執筆指導の単位取得の必要条件となります。

補足情報

- 1 -

研究倫理教育の実施について

大学院学生向け資料

CITI プログラムは、Internet Explorer、Safari、Chrome などの標準的なウェブブラウザで利用できます。本学学術情報センターの PC や、インターネット接続された自宅 PC 等からアクセスすることができます。CITI プログラム (<http://edu.citiprogram.jp>) に接続し、下記のログイン画面からユーザー名とパスワードを入力し、「01 責任ある研究行為：基礎編 Stage 1」中の各専攻が定める単元を受講します。



* 研究活動における不正行為の定義

不正行為とは、研究者倫理に背馳し、研究活動や研究成果の発表の本質ないし本来の趣旨を歪め、研究者コミュニティの正常な科学的コミュニケーションを妨げる行為に他ならない。具体的には、得られたデータや結果の捏造、改ざん、及び他者の研究成果等の盗用などが代表例である。

文部科学省「研究活動の不正行為への対応のガイドラインについて」より

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu12/houkoku/attach/1334651.htm

- 2 -

別添資料Ⅲ－２：統計解析資料 博士前期課程

【5】統計分析

【5】-4. 入学年度別の差の検定 (H15以前+H16～H21)
(ノンパラメトリックの検定)

4. 大学院博士課程前期

	順位			
	入学年度	N	平均ランク	順位和
Q1: 英語のスキル	H15年以前+	77	68.66	5287
	H16～H21年まで	61	70.56	4304
	H22年以降	61	70.56	4304
	合計	138		
Q2: CPのスキル	H15年以前+	77	63.69	4904.5
	H16～H21年まで	61	76.83	4686.5
	H22年以降	61	76.83	4686.5
	合計	138		
Q3: 数量扱いスキル	H15年以前+	77	65.77	5064
	H16～H21年まで	61	74.21	4527
	H22年以降	61	74.21	4527
	合計	138		
Q4: 論理的思考力	H15年以前+	76	62.18	4725.5
	H16～H21年まで	61	77.5	4727.5
	H22年以降	61	77.5	4727.5
	合計	137		
Q5: 一般的知識	H15年以前+	77	66.25	5101.5
	H16～H21年まで	61	73.6	4489.5
	H22年以降	61	73.6	4489.5
	合計	138		
Q6: 専門知識	H15年以前+	77	65.34	5031.5
	H16～H21年まで	61	74.75	4559.5
	H22年以降	61	74.75	4559.5
	合計	138		
Q7: 問題解決力	H15年以前+	77	68.6	5282
	H16～H21年まで	61	70.64	4309
	H22年以降	61	70.64	4309
	合計	138		
Q8: 課題発見力	H15年以前+	77	67.16	5171.5
	H16～H21年まで	61	72.45	4419.5
	H22年以降	61	72.45	4419.5
	合計	138		
Q9: 能動的態度	H15年以前+	77	69.29	5335.5
	H16～H21年まで	61	69.76	4255.5
	H22年以降	61	69.76	4255.5
	合計	138		
Q10: 創造思考力	H15年以前+	77	67.92	5230
	H16～H21年まで	61	71.49	4361
	H22年以降	61	71.49	4361
	合計	138		
Q11: リーダーシップ力	H15年以前+	77	66.5	5120.5
	H16～H21年まで	61	73.29	4470.5
	H22年以降	61	73.29	4470.5
	合計	138		

*「平均ランク」値の高いほうが肯定側の評価が高い

Mann-Whitney 検定

検定統計量(a)

	英語のスキル	CPのスキル	数量扱いスキル	論理的思考力	一般的知識
Mann-Whitney の U	2284	1901.5	2061	1799.5	2098.5
Wilcoxon の W	5287	4904.5	5064	4725.5	5101.5
漸近有意確率 (両側)	0.776	0.042	0.205	0.016	0.249
年度間有意差判定	有意差なし	5%有意	有意差なし	5%有意	有意差なし

	専門知識	問題解決力	課題発見力	能動的態度	創造思考力	リーダーシップ
Mann-Whitney の U	2028.5	2279	2168.5	2332.5	2227	2117.5
Wilcoxon の W	5031.5	5282	5171.5	5335.5	5230	5120.5
漸近有意確率 (両側)	0.118	0.75	0.414	0.942	0.584	0.297
年度間有意差判定	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし

a クループ化変数: 入学年度

有意確率 ≤ 0.05: 5%有意
有意確率 ≤ 0.01: 1%有意